

新東京国際空港 埋蔵文化財発掘調査報告書 XI

— 東峰西笠峰遺跡（空港No.63遺跡） —

平成11年3月

新東京国際空港公団
財団法人 千葉県文化財センター

新東京国際空港 埋蔵文化財発掘調査報告書 XI

—とうほうにしかさみね
— 東峰西笠峰遺跡（空港No.63遺跡）—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第363集として、新東京国際空港公団の新東京国際空港建設事業に伴って実施した成田市東峰西笠峰遺跡(空港No63遺跡)の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器や縄文時代早期の土器が出土するなど、この地域の旧石器時代から歴史時代までの歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年3月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

凡　　例

- 1 本書は、新東京国際空港公団による新東京国際空港建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県成田市東峰字西笠峰25-2ほかに所在する東峰西笠峰遺跡(空港No63遺跡)〈遺跡コード211-016〉である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、新東京国際空港公団の委託を受け、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は、本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、第2章と第6章第1節を技師 永塚俊司が担当し、その他を研究員 平野雅一が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、成田市教育委員会、法政大学院生米田 寛氏の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第2図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「五辻」(NI-54-19-10-1)
 - 第3図 新東京国際空港公団発行 1/2,500 新東京国際空港平面図 8・9
- 8 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 10 本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 調査の方法.....	2
第2節 遺跡の位置と環境.....	2
1 遺跡の位置と地理的環境.....	2
2 層序区分.....	10
第2章 旧石器時代.....	11
第1節 概要.....	11
第2節 石器集中地点.....	14
1 石器集中1	14
2 石器集中2	14
3 石器集中3	14
4 石器集中4	14
5 黒曜石の母岩分類と分布について.....	15
第3節 グリッド一括石器集中地点.....	23
1 一括集中1	23
2 一括集中2	26
3 一括集中3	28
4 一括集中4	32
5 石器集中地点外.....	36
第3章 繩文時代.....	49
第1節 遺構と遺物.....	49
1 陥穴.....	49
第2節 グリッド出土遺物.....	51
1 土器.....	51
2 石器.....	63
第4章 古墳時代.....	66
第1節 遺構と遺物.....	66
1 竪穴住居跡.....	66
第2節 グリッド出土遺物.....	66
第5章 歴史時代.....	68
第1節 遺構と遺物.....	68
1 溝.....	68

2 土坑	68
第2節 グリッド出土遺物	72
第6章 まとめ	73
第1節 旧石器時代	73
第2節 縄文時代	74
第3節 古墳時代	74
第4節 歴史時代	75
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 グリッド呼称図	2	第28図 一括集中3 出土石器(3)	31
第2図 周辺地形図	3	第29図 一括集中4と主要な出土石器	32
第3図 周辺遺跡分布図	4	第30図 一括集中4 出土石器(1)	33
第4図 確認グリッド配置図・下層本調査範囲 と石器集中	8	第31図 一括集中4 出土石器(2)	34
第5図 遺構配置図	9	第32図 一括集中4 出土石器(3)	35
第6図 基本層序	10	第33図 石器集中地点外と主要な出土石器	36
第7図 石器集中とグリッド一括集中	12	第34図 石器集中地点外 出土石器(1)	37
第8図 主な出土石器	13	第35図 石器集中地点外 出土石器(2)	38
第9図 石器集中地点別の石材構成 (黒曜石の大別)	15	第36図 石器集中地点外 出土石器(3)	39
		第37図 石器集中地点外 出土石器(4)	40
		第38図 陥穴	50
第10図 石器集中1 器種別分布	16	第39図 第I群 繩文土器(早期)分布図	52
第11図 石器集中1 石材別分布	16	第40図 第II群 繩文土器(前・中期)分布図	53
第12図 石器集中1 出土石器	17	第41図 第III群 繩文土器(後・晚期)分布図	54
第13図 石器集中2 器種別分布と石材別分布	18	第42図 第I群 繩文土器(1)	55
第14図 石器集中2 出土石器	19	第43図 第I群 繩文土器(2)	57
第15図 石器集中3 器種別分布と石材別分布	20	第44図 第I群 繩文土器(3)	59
第16図 石器集中3 出土石器	20	第45図 第II群 繩文土器	60
第17図 石器集中4 器種別分布	21	第46図 第III群 繩文土器(1)	61
第18図 石器集中4 石材別分布	21	第47図 第III群 繩文土器(2)	63
第19図 石器集中4 出土石器	22	第48図 繩文時代石器の出土グリッドと 有舌尖頭器	64
第20図 一括集中1と主要な出土石器	23	第49図 繩文時代の出土石器	65
第21図 一括集中1 出土石器(1)	24	第50図 1号竪穴住居跡	66
第22図 一括集中1 出土石器(2)	25	第51図 グリッド出土遺物	67
第23図 一括集中2と主要な出土石器	26	第52図 1号溝	69
第24図 一括集中2 出土石器(1)	27	第53図 2号溝	70
第25図 一括集中3と主要な出土石器	28	第54図 土坑	71
第26図 一括集中3 出土石器(1)	29	第55図 グリッド出土遺物	72
第27図 一括集中3 出土石器(2)	30		

表 目 次

第1表 遺構番号対照表	2	第3表 石器集中1 器種組成と石材構成	41
第2表 周辺の遺跡一覧	5	第4表 石器集中2 器種組成と石材構成	41

第5表	石器集中3	器種組成と石材構成	41	第10表	一括集中4	器種組成と石材構成	43
第6表	石器集中4	器種組成と石材構成	41	第11表	石器集中1~4	出土石器觀察表	44
第7表	一括集中1	器種組成と石材構成	42	第12表	一括集中1~4	出土石器觀察表	46
第8表	一括集中2	器種組成と石材構成	42	第13表	一括集中地点外	出土石器觀察表	48
第9表	一括集中3	器種組成と石材構成	43	第14表	縄文時代	出土石器觀察表	64

図版目次

図版1	東峰西笠峰遺跡航空写真	2号土坑
図版2	調査前全景	3号土坑
	一括集中4	4号土坑
図版3	石器集中1	図版7 石器集中1 出土石器
	石器集中2	石器集中3 出土石器
	石器集中3	図版8 石器集中2 出土石器
	石器集中4	石器集中4 出土石器
	石器集中4(近景)	図版9 一括集中1 出土石器
	石器集中地点外 石核単独出土状況	図版10 一括集中2 出土石器
図版4	1号陥穴	一括集中3 出土石器
	2号陥穴	図版11 一括集中4 出土石器
	3号陥穴	図版12 集中地点外 出土石器(1)
	4号陥穴	図版13 集中地点外 出土石器(2)
	5号陥穴	図版14 第I群土器(1)
図版5	1号竪穴住居跡	図版15 第I群土器(2)
	遺物出土状況	図版16 第I群土器(3)
	1号溝	図版17 第II群土器
	2号溝	図版18 第III群土器(1)
	2号溝セクション	図版19 第III群土器(2)
図版6	2号溝	グリッド出土遺物
	2号溝セクション	図版20 縄文時代 出土石器
	1号土坑	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

財団法人千葉県文化財センターは、千葉県教育委員会の指導のもと、新東京国際空港予定地内及び関連事業地に所在する遺跡について、新東京国際空港公団の委託により、昭和51年度から計画的・継続的に発掘調査を実施している。これらの調査成果の一部は、既に報告書として刊行されている。

今回報告する東峰西笠峰遺跡(空港No.63遺跡)についても、千葉県教育委員会が新東京国際空港公団と遺跡の取扱いについて協議した結果、記録保存の措置がとられることになり、昭和55年度と昭和56年度に発掘調査を行ったものである。その後、年度計画に基づき、昭和58年度と平成10年度に整理作業を実施した。年度ごとの実施内容及び担当職員は、下記のとおりである。

昭和55年度

空港建設事業として発掘調査を実施した。調査対象面積30,000m²で、上層2,400m²、下層2,400m²の確認調査を行った。調査期間は、昭和56年2月1日～同年3月31日である。

発掘調査担当者

調査部長 白石竹雄
班 長 西山太郎
調査研究員 池田大助、西口 徹

昭和56年度

昭和55年度の確認調査の成果に基づき、上層20,000m²、下層810m²の本調査を行った。調査期間は、昭和56年4月2日～同年8月1日である。成果として、旧石器時代石器集中地点4か所、陥穴5基(縄文早期)、竪穴住居跡1軒(古墳時代)、溝2条(近世)、土坑4基(近世)を検出した。

発掘調査担当者

調査部長 白石竹雄
班 長 西山太郎
調査研究員 西口 徹、大野康男

昭和58年度

整理作業を行った。内容は、水洗・注記である。

整理作業担当者

調査部長 白石竹雄
班 長 西山太郎

平成10年度

整理作業を平成10年4月1日～同年7月31日に実施した。作業内容は、図面・写真の整理、遺物の復元・実測、トレース、レイアウト、原稿執筆、刊行である。

整理作業担当者

調査部長	沼澤 豊	室 長	麻生正信
所 長	三浦和信	研究員	平野雅一
副 所 長	宮 重行	技 師	永塚俊司

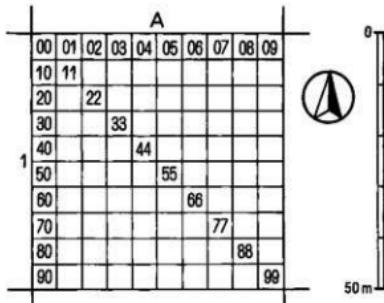
2 調査の方法

発掘調査を始めるに当たり、調査対象区域に公共座標に合わせて、50m×50mの大グリッドを設定した。さらに、その大グリッド内を5m×5mに分割し100個の小グリッドを設定した。そこで大グリッドは北から南へ0、1、2、3……、西から東へA、B、C……と記号を付け、小グリッドについては北西隅を起点に00、01…98、99と番号を付け、これらを組み合わせて呼称することにした(第1図)。

調査は、上層・下層確認調査、上層本調査、下層本調査の順に実施した。上層確認調査は、2m×2mのグリッドを基本とし、調査対象面積の8%を設定して遺構と遺物の分布を確認した。下層確認調査も、2m×

2mのグリッドを基本とし、調査対象面積の8%を設定して遺構と遺物の分布を確認した。それぞれの確認調査後、本調査に移行し、遺構や遺物の分布状況を詳細に調査した(第4図・第5図)。

なお、調査時に遺構番号は大グリッドごとに付けており、本書では、編集の都合上全遺構を時代及び遺構種類ごとに分類して新たに番号付けを行った(第1表参照)。



第1図 グリッド呼称図

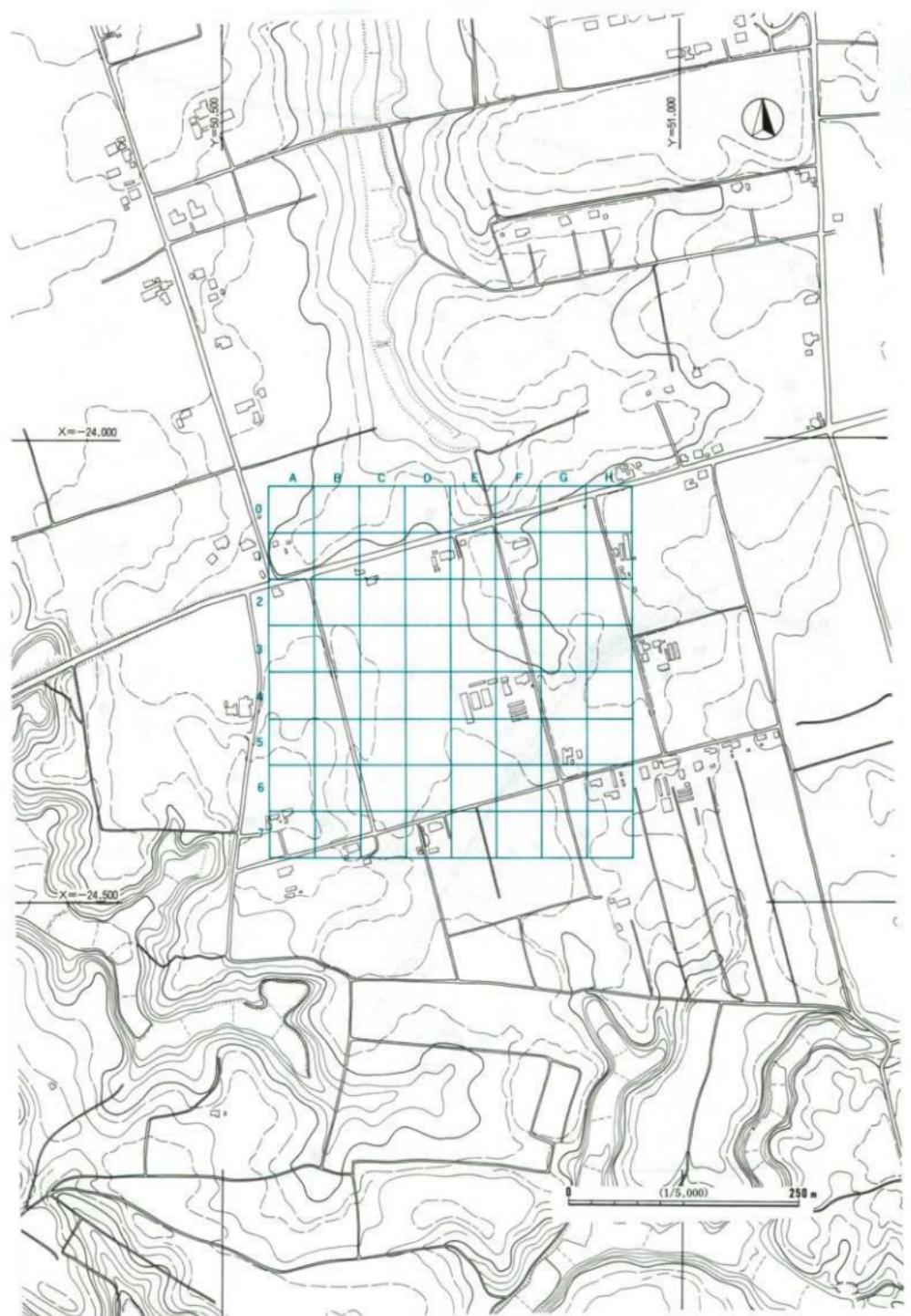
第1表 遺構番号対照表

時代	新番号	旧番号	時代	新番号	旧番号
縄文	1号竪穴	1Cイ001	歴史時代	1号溝	溝1
	2号竪穴	1Dイ001		2号溝	溝2
	3号竪穴	1Eイ001		1号土坑	1Gイ001
	4号竪穴	1Eイ002		2号土坑	1Gイ002
	5号竪穴	3Dイ002		3号土坑	2Eイ001
古墳時代	1号竪穴住居跡	2Dイ001		4号土坑	3Dイ001

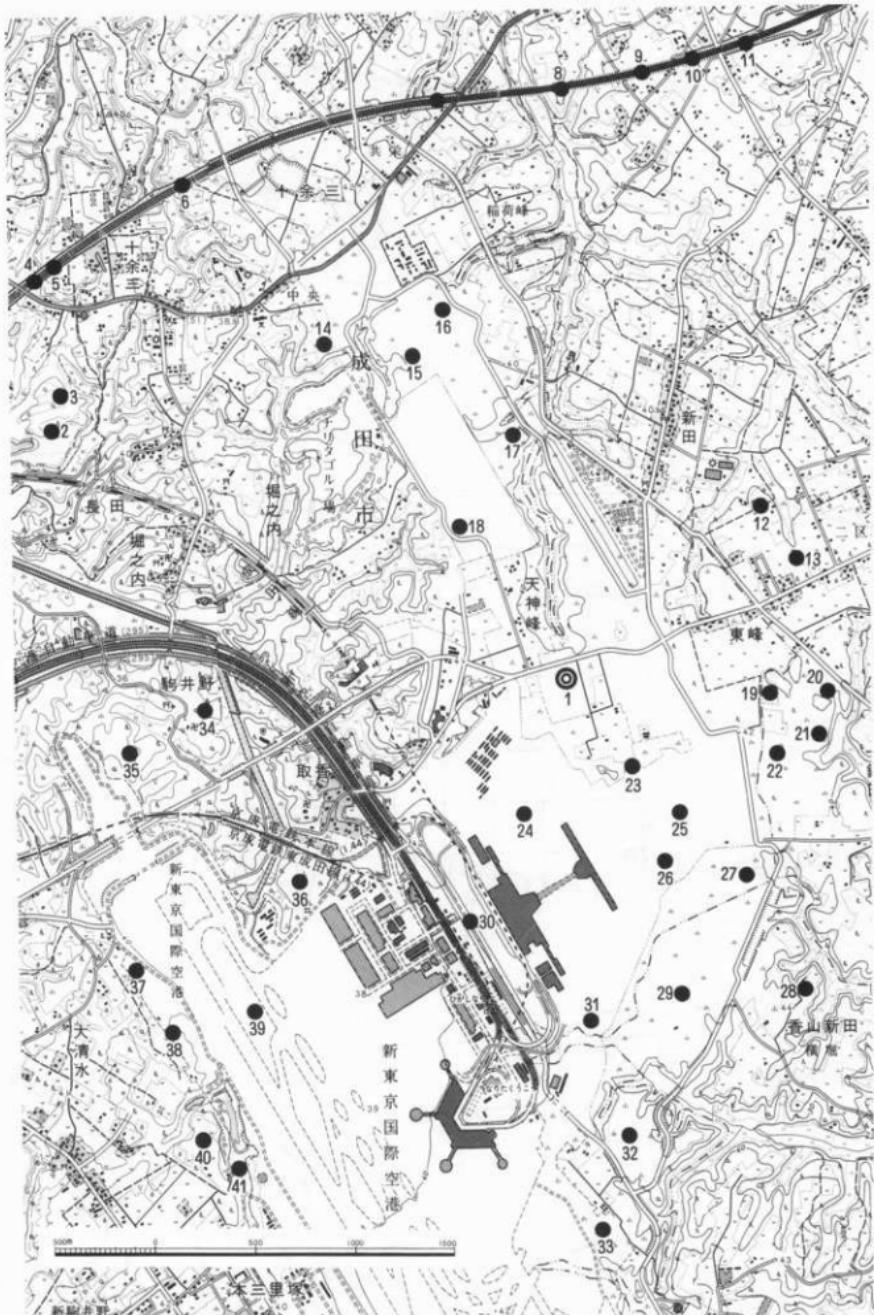
第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

本遺跡は、新東京国際空港予定地内の中央よりやや北側、成田市東峰字西笠峰25-2ほかに所在し、千葉県北部に広がる標高20~40m前後の起伏の乏しい洪積台地である下総台地に立地している。下総台地は河川下流部に行くと細かく開析され、樹枝状の台地を形成するが、新東京国際空港周辺は、太平洋に注ぎ込む栗山川水系の支流である高谷川や多古橋川と、利根川に流れ込む根木名川の支流である取香川や尾羽



第2図 周辺地形図



第3図 周辺遺跡分布図

に広がる遺跡群－天神峰最上遺跡(空港No64遺跡)¹⁴・十余三稻荷峰西遺跡(空港No68遺跡)¹⁵・十余三稻荷峰遺跡(空港No67遺跡)¹⁶が広がっている。両遺跡群合わせて2万点前後の石器が検出されており、空港予定地内にある遺跡の中では群を抜いた存在である。前述したように本遺跡は尾羽根川の源流域に当たり、両遺跡群とは流域を異なる。空港予定地内の尾羽根川流域には、他に十余三稻荷峰東遺跡(空港No66遺跡)¹⁷と天神峰奥之台遺跡(空港No65遺跡)¹⁸がある。十余三稻荷峰東遺跡(空港No66遺跡)は、未報告であるが、III層中から珪質頁岩を主体とした周縁加工により整形された尖頭器を伴う石器群と、石器群を形成しないが野辺山型の細石刃石核も検出されている。天神峰奥之台遺跡(空港No65遺跡)は、3つの文化層に分離され、台形様石器を主体とする第I文化層(IX層下部出土)、珪質頁岩製の大型石刀を素材とする有縫石刃石器群を主体とする第II文化層(VII~VI層出土)、疊群を伴い切出形ナイフ形石器を主体とする第III文化層(V~IV層下部出土)がある。

縄文時代は、ほとんどの遺跡で縄文土器(早期・前期包含層を伴う)が検出されている。取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)では、撫糸文期の竪穴住居跡6軒を検出し、縄文早期における竪穴住居跡と炉の関係、また、疊群と集石土坑、炉穴との関係をとらえることができた。東峰御幸畑西遺跡(空港No61遺跡)・東峰御幸畑東遺跡(空港No62遺跡)・十余三稻荷峰遺跡(空港No67遺跡)では、多量の沈線文系土器、条痕文系土器が出土している。一鉢田甚兵衛山遺跡¹⁹では、撫糸文期の竪穴住居跡が1軒、縄文早期~前期の土器包含層や興津期の土坑などが検出されている。香山新田中横堀遺跡(空港No7遺跡)²⁰では、縄文時代早期の竪穴住居跡1軒(井草I式期)を検出し、竪穴住居跡中央よりやや南に片寄った所に隅丸方形状の浅い掘込みがあり、縄文時代早期の竪穴住居と内部の炉の関係をとらえることができた。古込遺跡(空港No14-55-56遺跡)では、沈線文系土器を主体に分布する地区と条痕文系土器を主体に分布する地区とに分かれており、時代により住み分けがなされていることをとらえることができた。東関東自動車道の建設に伴い調査された稻荷峯遺跡²¹では、早期から前期の竪穴住居跡15軒を検出し、尾羽根川下流域に縄文集落が存在することを明らかにしている。

古墳時代の遺跡としては、空港のごく近くでは大規模な集落は発見されていないが、台ノ田II遺跡²²で竪穴住居跡が1軒報告されている。また、駒井野西の下遺跡では、前方後円墳を伴う古墳群が調査されている。さらに下流域の長田和田遺跡²³では7軒の竪穴住居跡が確認されている。岩山中袋遺跡(空港No2遺跡)²⁴でも古墳時代の竪穴住居跡が検出されている。このように各遺跡とも軒数は多くないが、台地上に竪穴住居跡の存在が確認されている。

歴史時代は、空港周辺では大規模な集落は存在しないが、製鉄に関連する遺跡が多い。一鉢田甚兵衛山北遺跡(空港No11遺跡)²⁵・取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)・香山新田中横堀遺跡(空港No7遺跡)²⁶・東峰御幸畑西遺跡(空港No61遺跡)・岩山中袋遺跡(空港No2遺跡)²⁷などがある。本遺跡は、一連の鉄生産過程が明らかになった取香製鉄跡のある取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)、同じく御幸畑製鉄跡のある東峰御幸畑西遺跡(空港No61遺跡)と同じ台地上に存在しており、距離もわずかしか離れていない。また、南三里塚宮園遺跡(空港No4遺跡)・三里塚御料牧場遺跡²⁸では方形周溝状遺構を伴っており、その時代の墓の存在が確認されている。

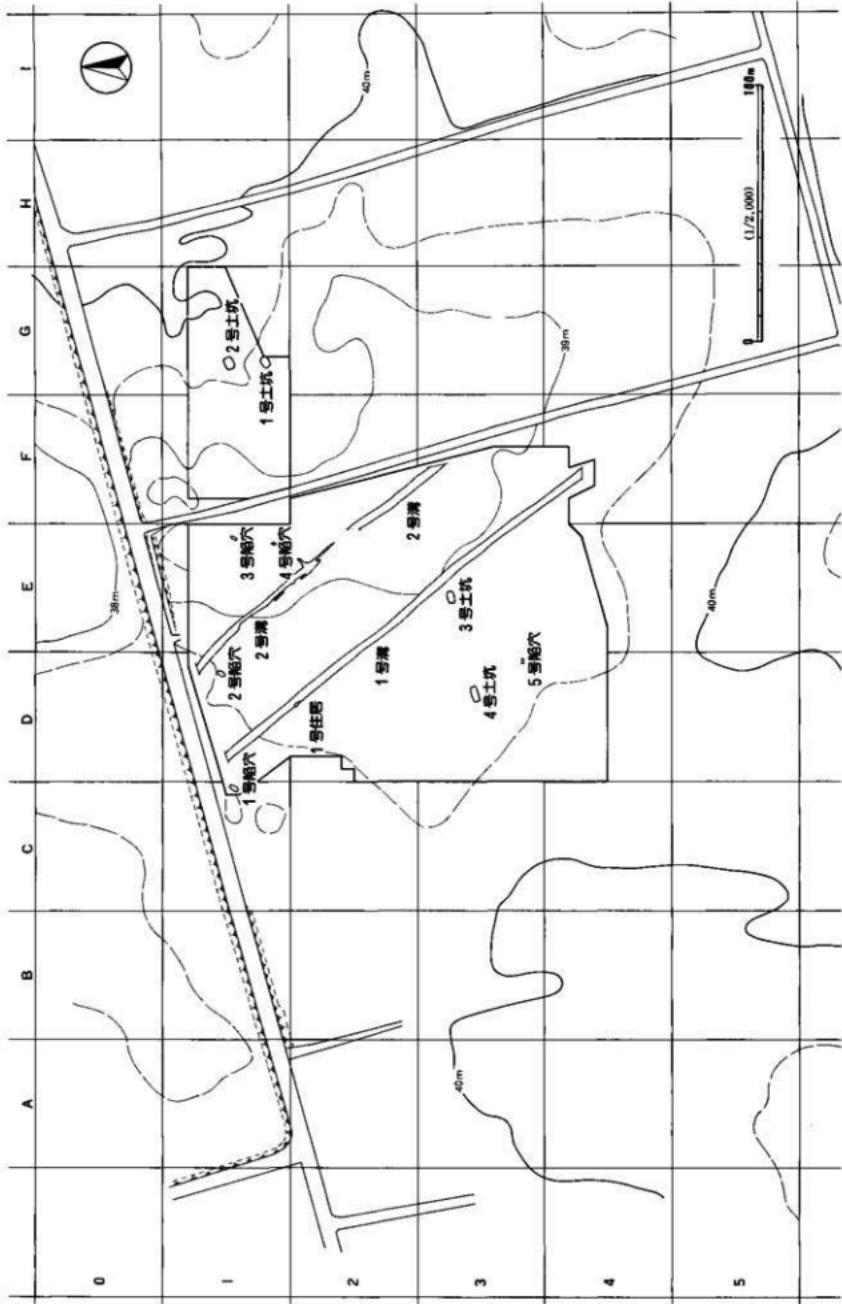
野馬堀も空港周辺の遺跡では、香山新田新山遺跡(空港No10遺跡)・取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)・東峰御幸畑西遺跡(空港No61遺跡)・東峰御幸畑東遺跡(空港No62遺跡)・天神峰奥之台遺跡(空港No65遺跡)・天神峰最上遺跡(空港No64遺跡)・十余三稻荷峰遺跡(空港No67遺跡)・十余三稻荷峰西遺跡(空港No68遺跡)な

どで検出されている。

- 注 1 小久賀隆史・新田浩三 1994 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VII -取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)-」(財)千葉県文化財センター
- 2 (財)千葉県文化財センター 1979 「千葉県文化財センター年報 No.5」
- (財)千葉県文化財センター 1980 「千葉県文化財センター年報 No.6」
- 3 野口行雄ほか 1983 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書III -No14遺跡-」(財)千葉県文化財センター
- 西野 元ほか 1971 「三里塚」千葉県北總公社
- 4 (財)千葉県文化財センター 1989 「千葉県文化財センター年報 No.14」
- 5 (財)千葉県文化財センター 1981 「千葉県文化財センター年報 No.7」
- 6 (財)千葉県文化財センター 1981 「千葉県文化財センター年報 No.8」
- 7 横山仁・矢本節朗 1997 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書X -天神峰奥之台遺跡(空港No65遺跡)-」(財)千葉県文化財センター
- 8 矢本節朗 1997 「多古町一鍬田甚兵衛山遺跡 -刈り草置場埋蔵文化財調査報告-」(財)千葉県文化財センター
- 9 西川博孝 1984 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV -No.7遺跡-」(財)千葉県文化財センター
- 10 萩田則久ほか 1985 「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書I -成田地区-」(財)千葉県文化財センター
- 11 蜂屋孝之・矢本節朗 1997 「成田国際物流複合基地埋蔵文化財調査報告書1 -台ノ田II遺跡-」(財)千葉県文化財センター
- 12 喜多圭介 1989 「ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(I)」(財)印旛郡市文化財センター
- 13 小林信一・矢本節朗 1997 「土木保守管理センター等埋蔵文化財調査報告書 -成田市三里塚御料牧場遺跡・芝山町岩山中袋遺跡(空港No.2遺跡)-」(財)千葉県文化財センター
- 川島利通 1985 「新東京国際空港埋蔵文化財報告書V -No.2遺跡 No.10遺跡-」(財)千葉県文化財センター
- 14 小久賀隆史・新田浩三 1995 「新東京国際空港埋蔵文化財報告書IX -一鍬田甚兵衛山北遺跡(空港No.11遺跡)-」(財)千葉県文化財センター
- 15 三浦和信ほか 1993 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VII -南三里塚宮園遺跡(空港No.4遺跡)・木の根拓美遺跡(空港No.6)・香山新田中横堀遺跡(空港No.7遺跡)-」(財)千葉県文化財センター

第4図 確認グリッド配置図・下層本調査範囲と石器集中





第5図 造構配図

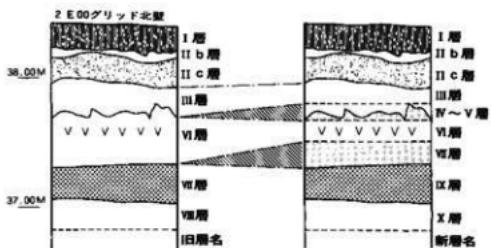
2 層序区分

本遺跡における立川ローム層を中心とする層序区分は、昭和51年からはじまる空港予定地内での一連の調査事例にみられるように、III層・VI層・VII層・VIII層の4細分がなされている。

さて、当センターにおいては、平成2年に千葉県（下総台地）における立川ローム層の層序区分に対する統一見解が提言されたり。その後、提言に基づいた発掘調査、整理が実施されていることは周知のとおりである。本遺跡の調査は昭和56年に実施されたため、現在の見解とは異なった層位の細分がなされている。今回、調査当時の層序区分をそのまま報告することは、研究上混乱をもたらすことが考えられる。そこで、現在、本センターの共通認識となっている先の提言に従い、以下のように層名と層序の認識について、調査当時のものを修正することとする（第6図）。もちろん、完全ななりあわせは困難であるが、土層断面図、土層の写真観察、出土石器、調査経験等からできる限り統一見解に近づけた。

旧基本層名	変更した層名
I 層（黒色土層）表土及び耕作土	I 層：変更なし
II b層（赤褐色土層）いわゆる「新規テフラ」と呼称されている。全体として赤味を帯びている。	II b層：変更なし
II c層（黒褐色土層）立川ローム層への漸移的な層である。主に縄文時代の包含層である。	II c層：変更なし
III 層（黄褐色ローム層）いわゆる「ソフトローム層」である。底面はハードロームとの境界を指標に分離され、波状を呈する。波状帶は、VI層にくい込みIV～V層の多くはIV層に取り込まれている。	III 層：特に変更はないが、III層の下部である波状部付近には、ソフト化により取り込まれてしまったIV～V層が存在する。経験的には、意識をもってそのようなソフト化した部分を観察すると、赤み帯びる部分（IV層）、やや黒み帯びる部分（V層）が抽出できるようである。
IV 層（黄褐色ローム層）識別困難。	IV 層：IV～V層として波状帶を中心に抽出。
V 層（黄褐色ローム層）識別困難。	V 層：IV～V層として波状帶を中心に抽出。
VI 層（明褐色ローム層）始良丹沢火山灰（AT）層を包含する。上面は波状をなし、ソフトとハードロームの境界を形成している。明るい色調を呈する部分すべてをVI層と認識しているため、上下に拡散したATを含んでしまっている。よって、現在の認識より層厚自体が厚めとなる特徴がある。	VI 層：基本的にVI層をできるだけ狭くとらえ、旧VI層上部をIV～V層に、下部をVII層に振り分ける。
VII 層（暗褐色ローム層）第2黒色帯として認識。大部分が現在の第2黒色帯下半部（IX層）に相当する。	VII 層：旧VI層の下部を抽出してVII層（第2黒色帯上半部）とする。色調はやや明るいがATが下位へ拡散したものと理解する。
VIII 層（褐色ローム層）立川ローム最下層。	IX 層：旧VII層をIX層（第2黒色帯下半部）と呼称する。
	X 層：旧VII層をX層と呼称する。

調査当時の旧層名の中で大きく変更されるのは、VI層と第2黒色帯の認識である。右図のようにVI層はできるだけ薄くとらえることによって下位の第2黒色帯を上層（VII層）と下層（IX層）に分離している。IX・X層については間層をはさんでa～c層にさらに細分可能な地域もあるが、空港周辺では難しいようである。



第6図 基本層序

注1 島立 桂・新田浩三・渡辺修一 1992「下総台地における立川ローム層の層序区分 一平成2・3年度職員研修会からー」『研究連絡誌』第35号 (財)千葉県文化財センター

第2章 旧石器時代

第1節 概要（第7・8図）

旧石器時代では石器集中地点4か所が確認された。石器集中地点は、北からのびる尾羽根川により開析された谷頭から、台地にやや上がった緩やかな傾斜地に分布している（第7図）。いずれも、出土石器総点数が10～20点前後と小規模なものである。そのほかに本遺跡からは、旧石器時代のグリッド一括集中地点を4地点で抽出した。これらは、すべて縄文時代の包含層の調査時にグリッド一括資料として取り上げられたものである。今回は、調査時に旧石器として出土位置の記録を取ったものについては「石器集中（地点）1～4」、グリッド一括資料から抽出したものについては「グリッド一括石器集中地点1～4（以下、一括集中と略す）」という名称により、便宜的に分離して報告する。報告は、前者を層位的に下方のものから、後者を調査区南側からそれぞれ順に番号を付し、概要及び遺物の記載を行った。

本遺跡の主な出土石器として代表的な資料を第8図に列挙した。出土層位と技術・形態学的特徴により「IX層出土石器群（石器集中1）」、「VI～III層出土石器群（石器集中2・3）」、「ナイフ形石器群（一括集中1・地区外）」、「尖頭器石器群（石器集中4、一括集中2・3・4）」が挙げられる。IX層石器群（石器集中1）は珪質頁岩製の楔形石器を、VI～III層石器群（石器集中3）はメノウを主体とする石器群であるが、いずれも小規模なものである。ナイフ形石器群はすべてグリッド一括資料である。南関東V～IV層下部段階に見られる横長剣片を用いた切出形のナイフ形石器が多い。利用石材は黒曜石、チャート、珪質頁岩、メノウ、流紋岩、安山岩と多彩である。尖頭器石器群は石器集中4出土の1点を除いてすべてグリッド一括資料である。そのうち黒曜石を用いる一群は基部調整を施した片面加工のものが特徴的で、一部、両面加工のものも見られる。ガラス質黒色安山岩を用いる一群は、周縁加工・両面加工が施された尖頭器が主体である。前者は石器集中4と一括集中2・3、後者は一括集中4にまとまり、両者の分布域は完全に異なる。層位的にも、若干の上下差を見ることができそうであるが、あくまでも相対的なものであり、一方がグリッド一括資料という性格上、踏み込んだ議論はできない。しかしながら、ガラス質黒色安山岩の一群は立川ローム漸移層（IIc層）出土という調査所見があり、旧石器時代終末から縄文時代草創期への移行期という微妙な時期に位置づけられるものと考える。本報告では、土器を伴っていないという消極的な根拠ではあるが、便宜的に旧石器時代終末期と位置づけ、本章で扱うこととする。

各石器集中、一括集中は以下の様相をもつ。

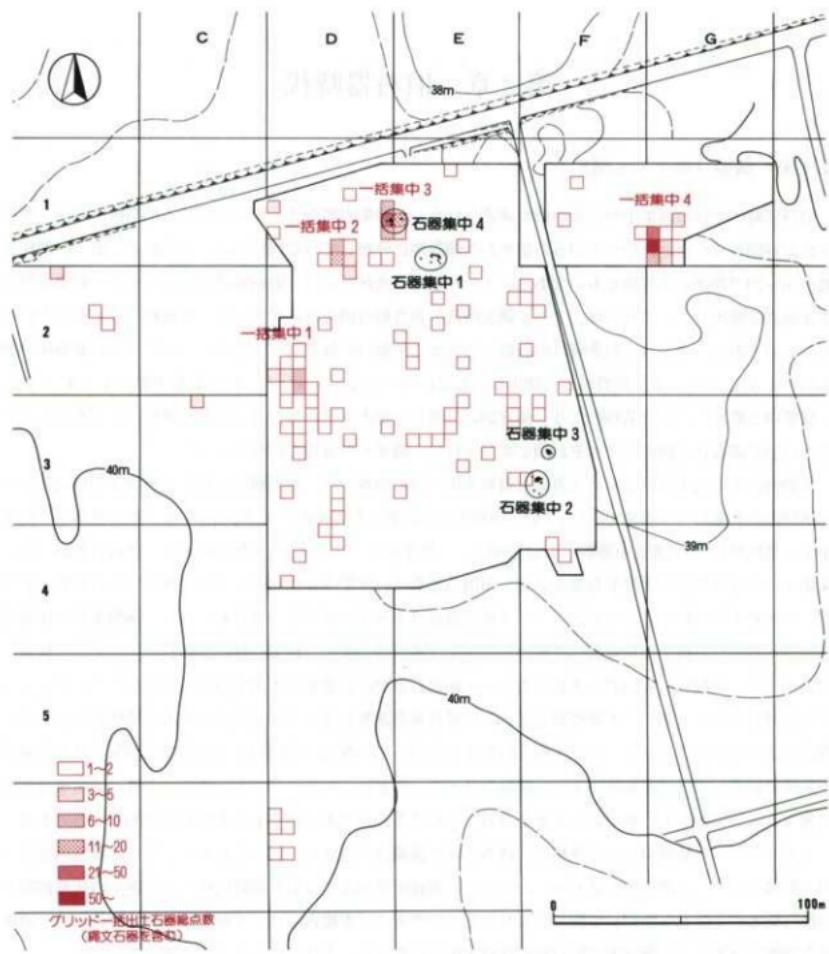
石器集中地点1（第8図1～6） IX層出土。石器数14点。珪質頁岩を主体とし、限定された母岩が搬入され楔形石器を消費している。礫2点が出土しているが、原石の搬入と考えられる。

地点2 VI～III層出土。石器数22点。全点黒曜石で構成される。石核、幅広の剣片がある。

地点3（第8図7～13） VI～III層出土。石器数14点。メノウを主体とする。スクレイパー、幅広の剣片が出土し、大半が折断されている。

地点4（第8図14） III層出土。石器数23点。全点黒曜石で構成される。一括集中3と分布域を共有し接合関係も認められる。

一括集中地点1（第8図15～17） メノウ、珪質頁岩を主体とする。切出形ナイフ形石器、スクレイパー、



第7図 石器集中とグリッド一括集中

石刀、端部加工のナイフ形石器が出土した。利用石材は明確に抽出できる母岩が多い。

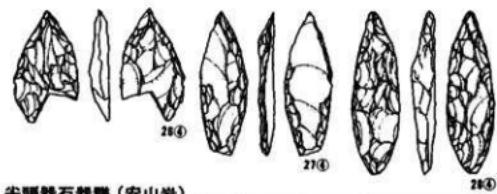
地点2 (第8図18~20) 黒曜石を主体とする。片面加工の尖頭器、スクレイパー、石刀、敲石が出土した。黒曜石A・Bを主体的に消費している。

地点3 (第8図21~25) 黒曜石を主体とする。片面加工の尖頭器、スクレイパー、石核が出土した。黒曜石A・Bを主体的に消費している。石器集中4と分布域を一部共有する。

地点4 (第8図26~28) IIc層出土。一括集中の中でも唯一出土層位を確認できる。ガラス質黒色安山岩を主体とする。両面加工の尖頭器、スクレイパーが出土している。

○付き数字はグリッド一一括集中地点

◎は石器集中地点外を示す

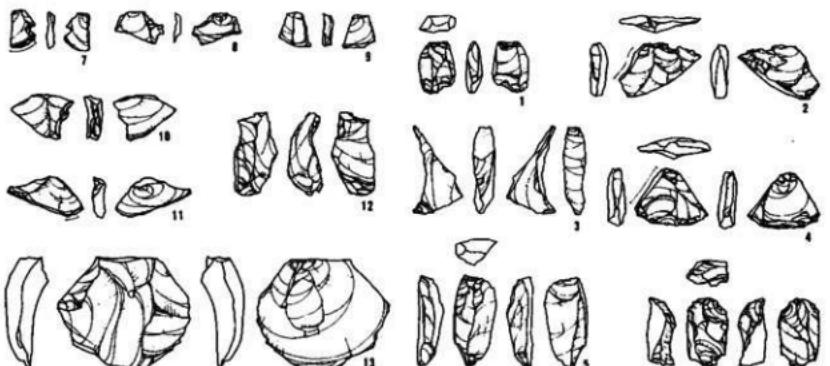


尖頭器石器群（安山岩）



ナイフ形石器群

尖頭器石器群（黒曜石）



III～VI層石器群（石器集中3）

IV層石器群（石器集中1）

第8図 主な出土石器 (S = 1/2)

第2節 石器集中地点

1 石器集中1 (第10図～12図、第3表、図版3・7)

立川ロームIX層に出土層位をもつ(旧層名でVII層)。3m×4mの集中部を形成するが、全体としては東西方向に散漫に広がる。出土総数は14点で、器種別に見ると楔形石器5点、剝片7点(明らかに両極技法により楔形石器より剝がされた剝片〈本報告では、以下、楔形石器剝片と呼称する〉5点を含む)、礫2点である。利用石材は珪質頁岩を主体とするが、母岩分類により複数所属する珪質頁岩1のみを抽出した。珪質頁岩1の特徴は風化剝離面が青灰色、礫面が黄褐色を呈し、あまり珪質化していない。楔形石器、楔形石器剝片を主体に8点が本母岩に属し、本石器集中では、このような限定された石材を用いた両極剝離が行われている。

出土石器(第12図1～11) 1～5は楔形石器である。両極剝離技法を駆使している。7～9は楔形石器剝片である。7は微細剝離痕を有する。6は剝片である。頭部、先端部を欠損する。10・11はチャートの礫である。両極剝離のために原石が持ち込まれた可能性が高い。両極剝離に使用される原石がこれらの礫と同様のサイズであるならば、本遺跡出土の礫の長さが35mm程度、楔形石器の長さが25mm程度であることから、楔形石器は剝離当初の長さをそれほど減じていないと言える。

1・2・4・6・8が珪質頁岩1である。

2 石器集中2 (第13・14図、第4表、図版3・8)

立川ロームVI～III層に出土層位をもつ(旧層名でもVI～III層)。2m×2mの集中部を形成するが、全体としては南北方向にやや散漫に広がる。出土総数は22点で、器種別に見ると石核1点、微細剝離痕のある剝片8点、剝片6点、碎片7点である。黒曜石で占められる石器集中で、その特徴から2種に大別される。黒曜石Cは漆黒でややにぶく光り、黒曜石Dはほぼ透明の石材である。

出土石器(第14図1～12) 1・2・4～9・12は微細剝離痕のある剝片で、組成中に占める割合が高い。3・10は剝片である。11は石核である。裏面に素材面を有する。厚手の剝片を分割し、分割面を打面に設定して幅広の剝片を生産している。

1・7は黒曜石D、それ以外は黒曜石Cである。

3 石器集中3 (第15・16図、第5表、図版3・7)

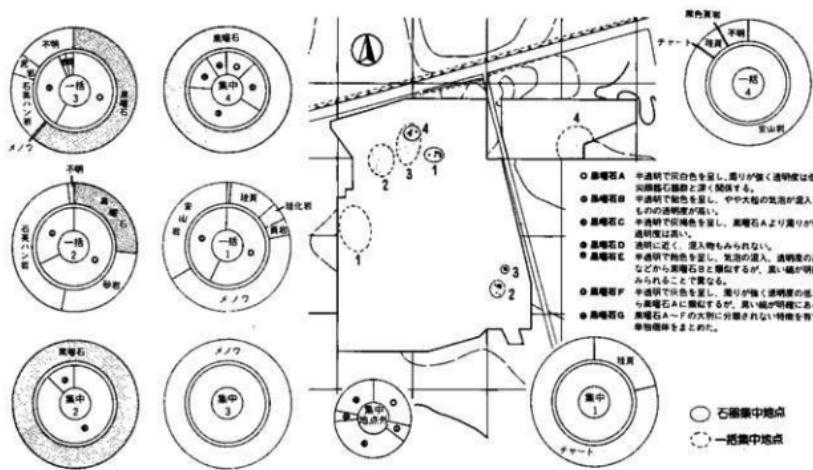
立川ロームVI～III層に出土層位をもつ(旧層名でもVI～III層)。2m×2mの狭い範囲にまとまる。出土総数は14点で、器種別に見るとスクレイパー1点、微細剝離痕のある剝片2点、剝片9点、碎片2点である。全点メノウの石器集中で、2母岩で構成される。メノウ1は透明度が低く白濁色を呈し、11点を占める。一方、メノウ2は透明度が高く赤褐色を呈し、3点を占める。

出土石器(第16図1～8) 1はスクレイパーである。幅広の剝片を素材とし、右側縁部に刃部を設定している。刃部形成後に打面側が折断される。調整角63度を測る。2・4は微細剝離痕のある剝片である。3・5～8は剝片である。いずれも幅広の剝片で折面を有する。

1・2・4～8はメノウ1、3はメノウ2である。

4 石器集中4 (第17図～19図、第6表、図版3・8)

立川ロームIII層に出土層位をもつ(旧層名でもIII層)。3m×3mの範囲にまとまる。出土総数は接合し



第9図 石器集中地点別の石材構成（黒曜石の大別）

た一括集中3の資料を含めて23点で、器種別に見ると尖頭器1点、スクレイバー1点、微細剝離痕のある剝片8点、剝片8点、碎片4点である。黒曜石で占められる石器集中で、特徴から6種に大別される。

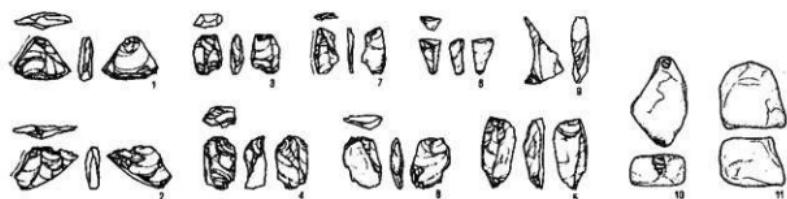
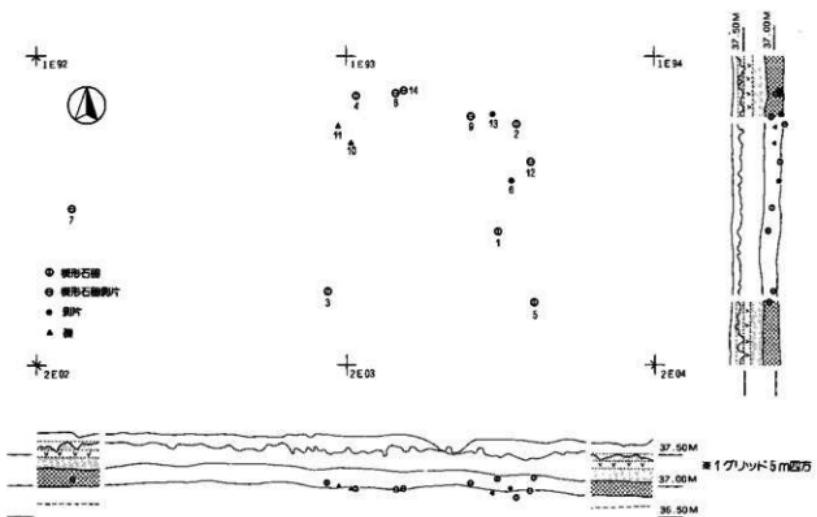
本石器集中の周辺のグリッドからは一括資料として多数の遺物が検出されている（一括集中3）。共有する母岩の存在や一括資料との接合関係から、本来に本石器集中と一括集中3は同一の石器群ととらえることができると考えられる。

出土石器（第19図1～15） 接合資料1(1・2)は周縁加工を施した尖頭器である。縦長の剝片を素材として用い、先端部を欠損する。背面左側に横長の剝離痕を留める。基部は抉りを入れるように作出されている。器体中央部で折断され、折断時の破損の痕跡を残す。3はスクレイバーである。幅広の素材を用いて主に上半部に調整を施す。形状は拇指状で反りが大きく、右下側縁に自然面を有する。接合資料2(4・5)～10・13は微細剝離痕のある剝片である。接合資料2は器体中央で折断されている。左下側縁部に破損部が見られる。接合資料3(7・8)は縦長の剝片が器体上部と下部で折断されている。接合資料4(9・10)はやや幅広の剝片とポイントフレイクの接合例である。11・12・14・15は剝片である。14は黒曜石独特の光沢を失い、被熱したと考えられる。本石器集中の剝片の特徴の一つに、剝片の最大幅に対して打面幅の値が小さいことが挙げられる。これは、ポイントフレイクの特徴と同様である。

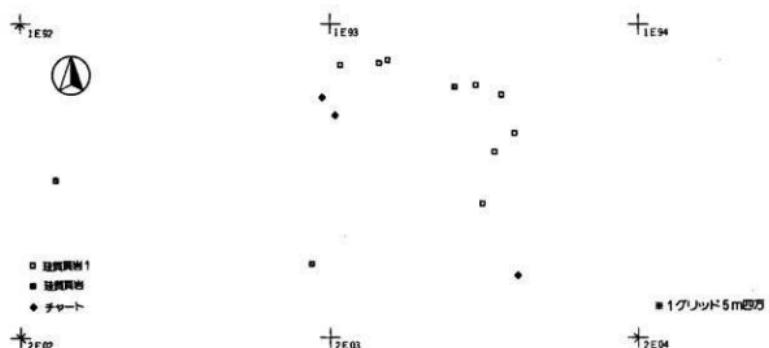
11～14は黒曜石A、7～10は黒曜石B、1～3・6は黒曜石D、4・5は黒曜石E、15は黒曜石Gである。

5 黒曜石の母岩分類と分布について

石器石材の特徴と分布について黒曜石を中心に第9図に示した。黒曜石は母岩分類が困難なため、大別分類を示した。大別は同一時期の帰属を取り上げるには問題が残るが、原産地の違いないしは原産地における露頭の違いを示すと思われる。



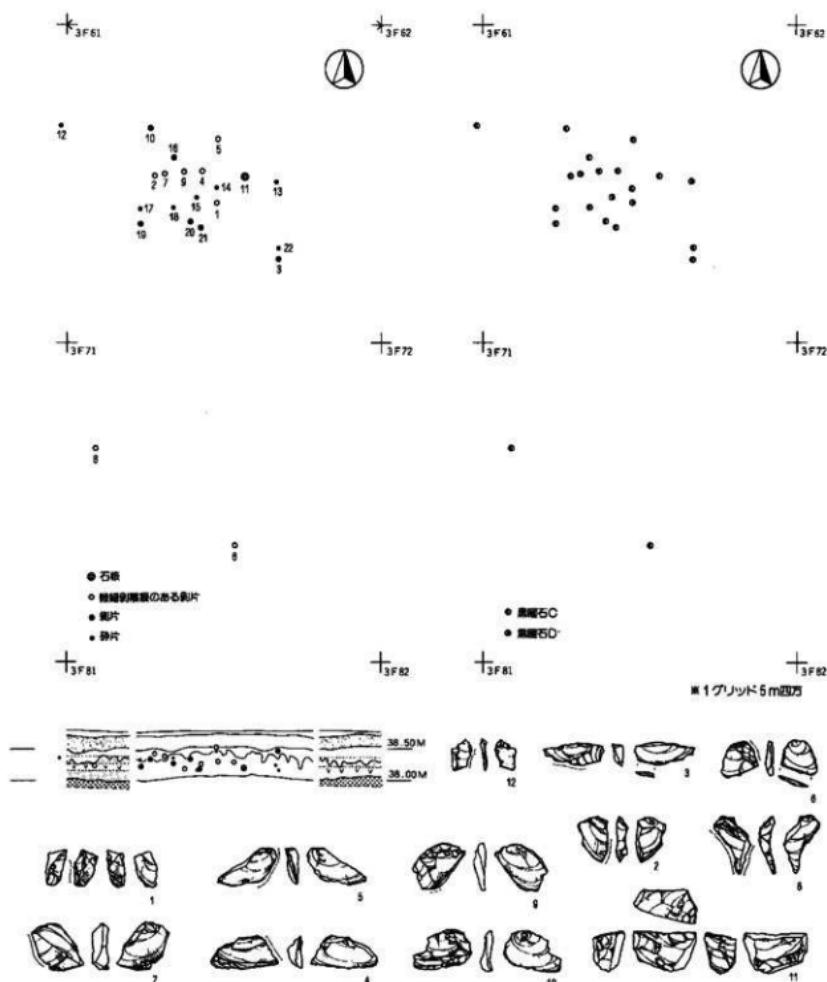
第10図 石器集中1 器種別分布



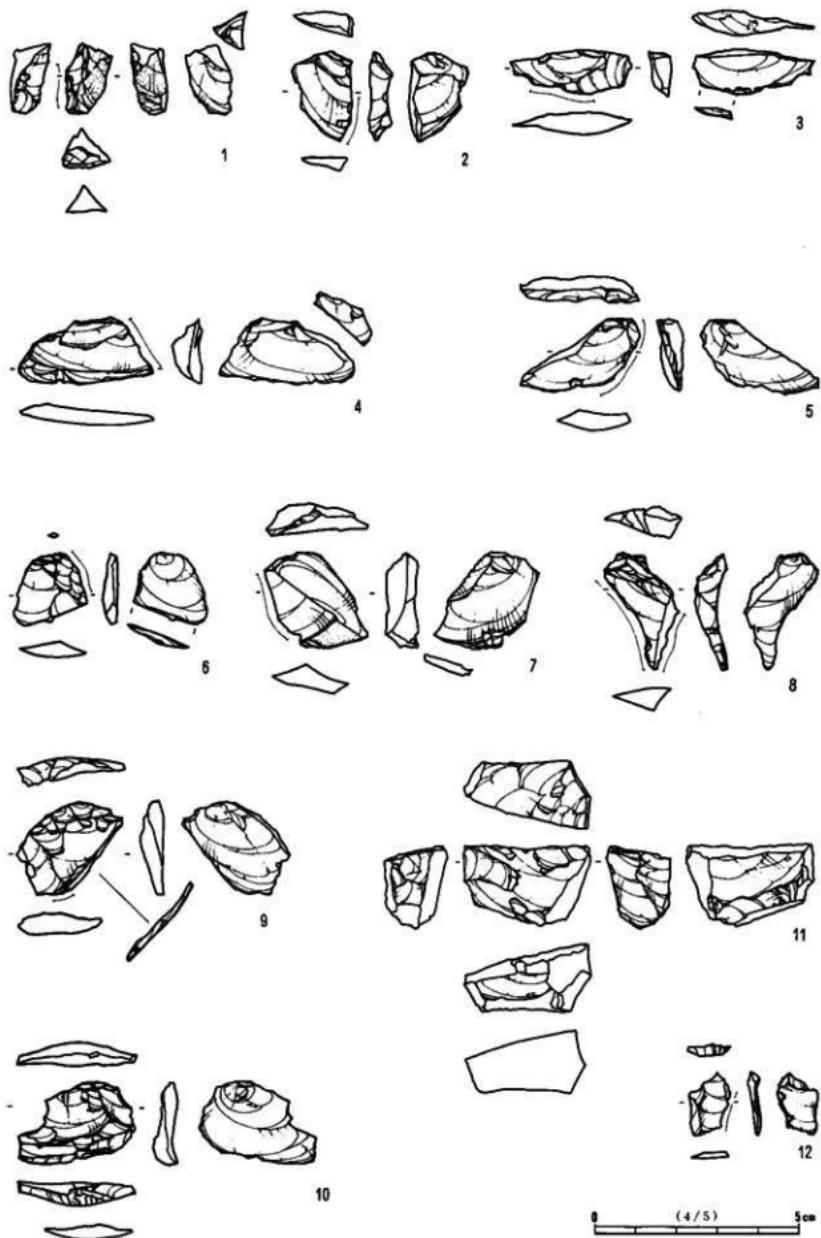
第11図 石器集中1 石材別分布



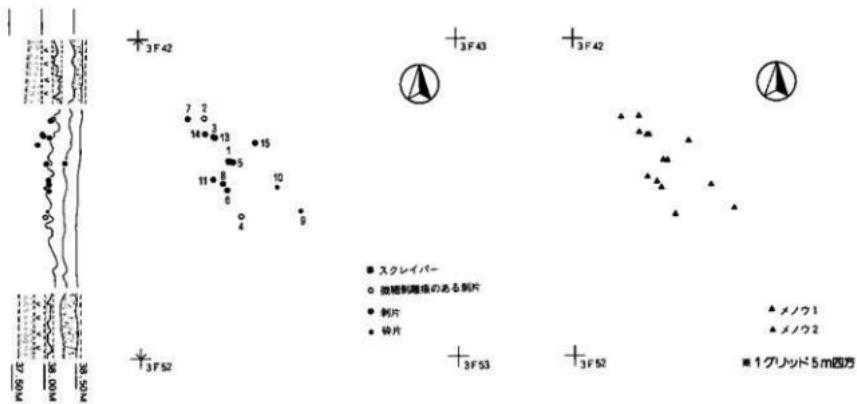
第12図 石器集中1 出土石器



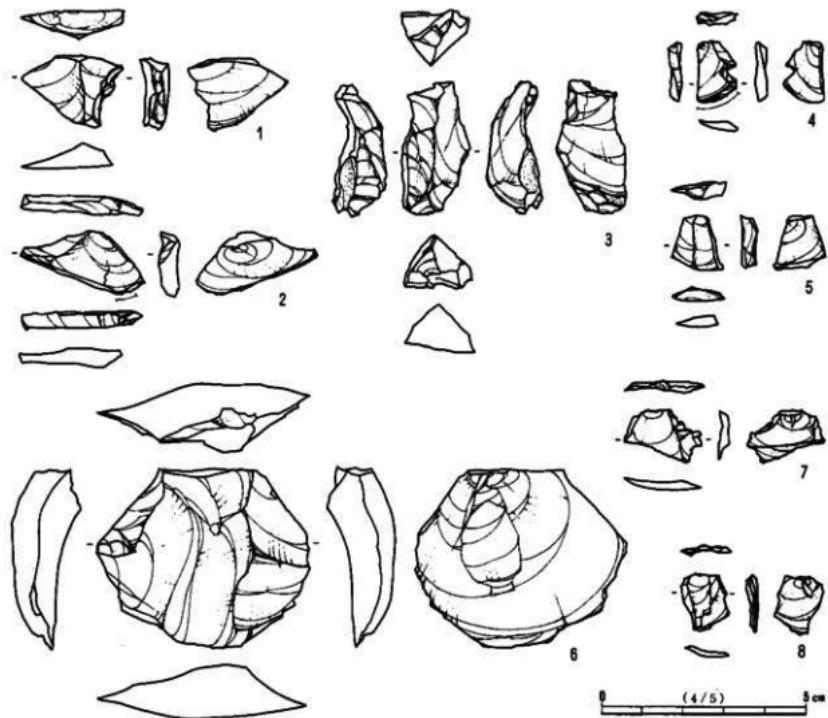
第13図 石器集中2 器種別分布と石材別分布



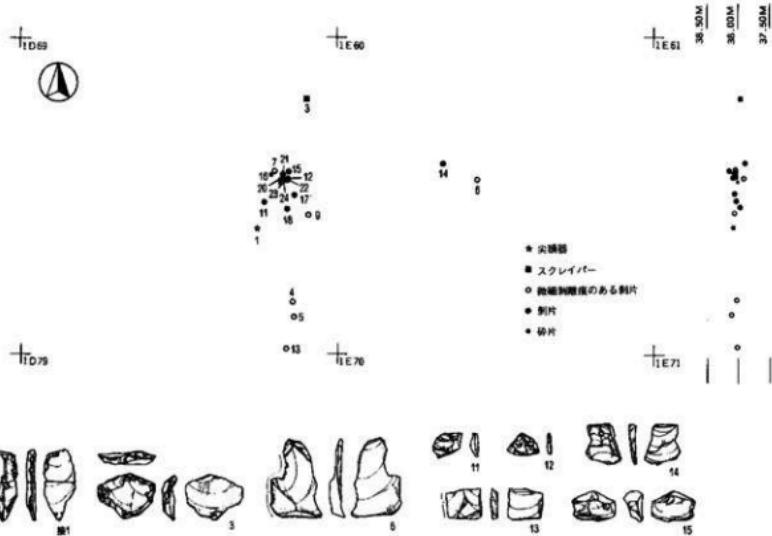
第14図 石器集中2 出土石器



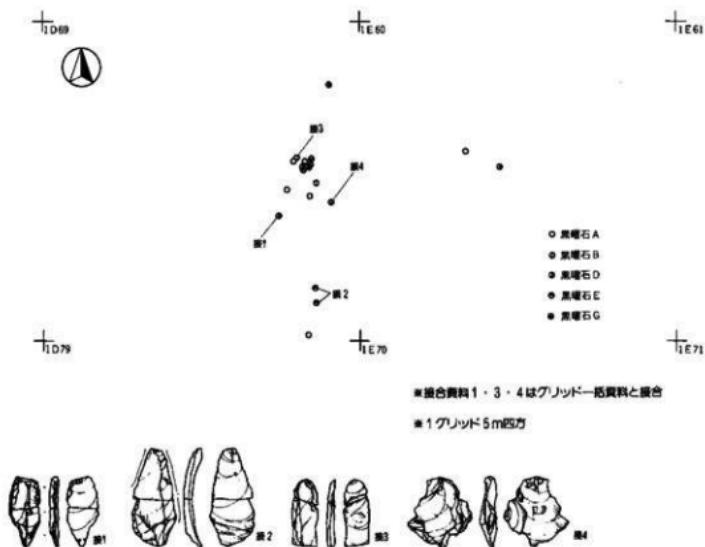
第15図 石器集中3 器種別分布と石材別分布



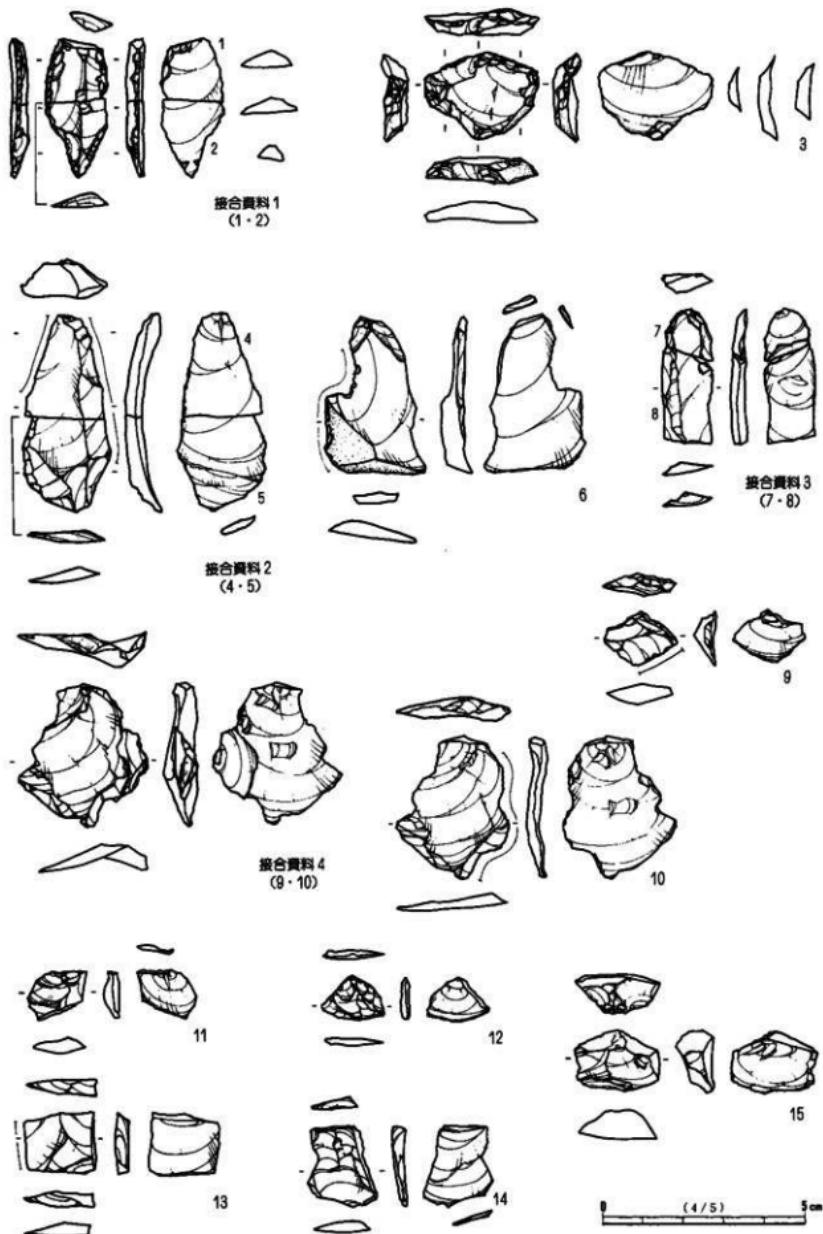
第16図 石器集中3 出土石器



第17図 石器集中4 器種別分布



第18図 石器集中4 石材別分布



第19図 石器集中4 出土石器

第3節 グリット一括石器集中地点

1 一括集中1 (第20図~22図、第7表、図版9)

2D80・81区を中心に径20m前後の範囲に散漫に分布する。一括資料から33点を抜き出した。器種としては、ナイフ形石器・彫刻刀形石器・スクレイパー・石刃・微細剝離痕のある剝片・剝片類がある(第20図)。メノウと珪質頁岩を主体とし、ほかに黒曜石・頁岩・珪化岩・ガラス質黒色安山岩などがある。

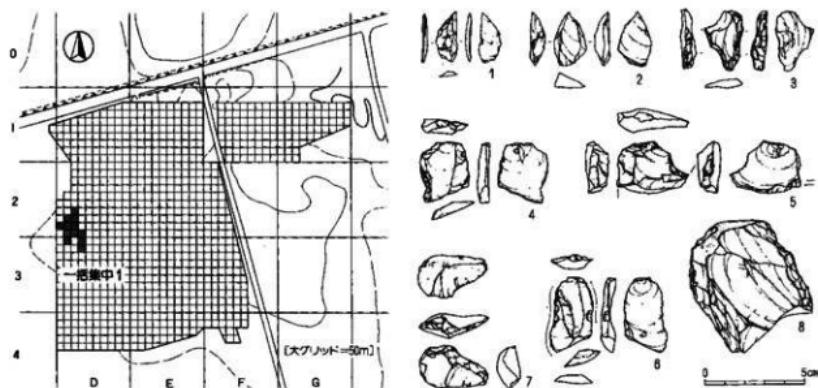
出土石器(第21・22図1~17) ナイフ形石器は3点が出土している。1は切出形を呈する。赤褐色を呈する珪質頁岩を用いている。縦長の素材を用い、打面を切るようにプランティングを施している。刃部には微細剝離痕が見られる。2は珪質頁岩製のナイフ形石器である。風化剝離面は灰白色を呈し、左側縁に正面・裏面の両方向からプランティングを施し、打面を除去している。素材剝片の末端はヒンジフラクチャーをおこしている。刃部には微細剝離痕がみられる。3は切出形を呈する。横長の素材を用い、二側縁にプランティングを施す。打面は左側縁のプランティングによって除去される。基部は抉りに近い調整によって作出されている。

スクレイパーは3点出土している。4は縦長の素材を用い、左側縁に抉入状の刃部をもつ。末端を欠損する。右側縁には微細剝離痕が見られる。7は横長の素材を用い、打面を切るように刃部を設定している。8は大形の分厚い剝片を素材とし、両側縁に急角度の刃部をもつ。

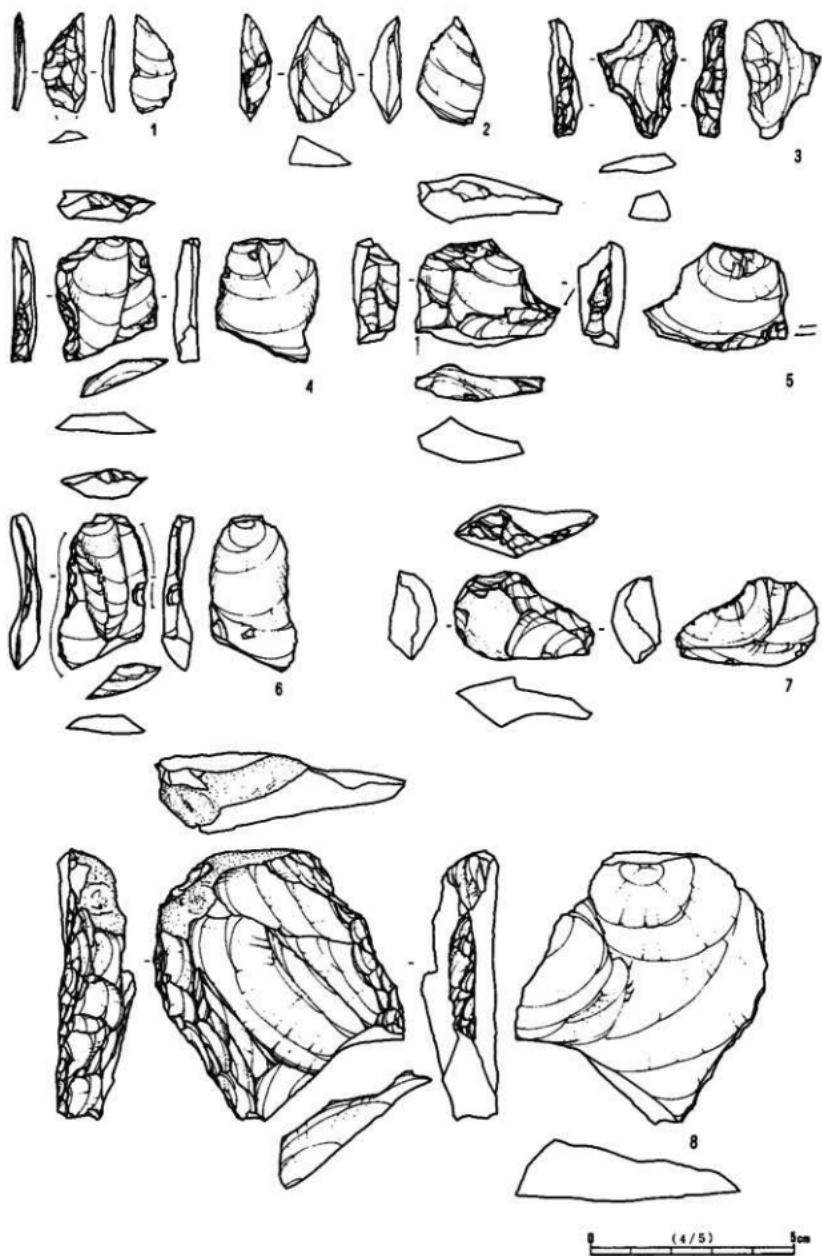
5は彫刻刀形石器である。折断によって器体を分割し、彫刀面を各所に作出する。正面右側縁に抉り込むように調整が施されており、スクレイパーとしての機能も窺える。打面には発達したLipが見られる。

15は石刃とした。複剝離打面でLipは発達しない。右側縁に微細剝離痕が連続する。石材は黄土色を呈した特徴的な珪化岩1である。未掲載であるが同一母岩に縦長剝片がある。

9~14・16・17は微細剝離痕のある剝片と剝片である。打面が小さく幅広で寸詰まりのものが多い。図版掲載分の石器石材は、1・4~6は珪質頁岩2、2は珪質頁岩、3・9~14・16・17はメノウ4、7は頁岩、8は安山岩A、15は珪化岩1である。



第20図 一括集中1と主要な出土石器



第21図 一括集中1 出土石器 (1)



第22図 一括集中1 出土石器 (2)

2 一括集中2 (第23・24図、第8表、図版10)

1 D85・95グリッドを中心に径15mの範囲に分布する。1 D85から南東方向に溝が走り、遺物の大半は溝覆土からの出土品である。グリッド一括資料と溝覆土内出土資料から42点を抜き出した。黒曜石を主体とする地区で、一括集中3とは視覚的に分離されるが、母岩の共有関係や石器組成から隣接する一括集中3と石器集中4とは密接な関係にあることは明らかである。器種別に見ると尖頭器・スクレイパー・彫刻刀形石器・敲石・石刃・微細剝離痕のある剝片・剝片・碎片がある(第23図)。石材は黒曜石A・Bを主体とする。

出土石器 (第24図1~10)

尖頭器は3点出土した。1は木葉形で両面加工を施す。打面部側を基部とし、打面は調整によって除去される。器体中央部に最大幅がくる。調整の進行方向は不定である。2は木葉形で縦長の素材を用い、片面加工を施す。打面を残置し、打面部側を基部とする。器体中央部に最大幅がくる。剥離進行方向は不定である。3は木葉形で縦長の素材を用い、片面加工を施す。バルブを除去し、打面部に基部調整を施している。先端部を欠損する。

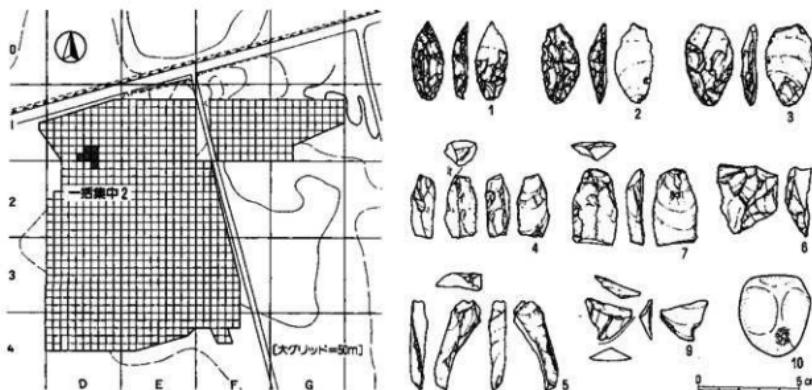
4は彫刻刀形石器である。稜柱形の剝片を素材とし打面部を折断後、左側面上部に彫刀面を作出している。自然面を残す。

5はスクレイパーである。縦長の素材を用い、左側縁に刃部をもつ。剝片はねじれた状況を呈し、末端がヒンジフラクチャーをおこしている。

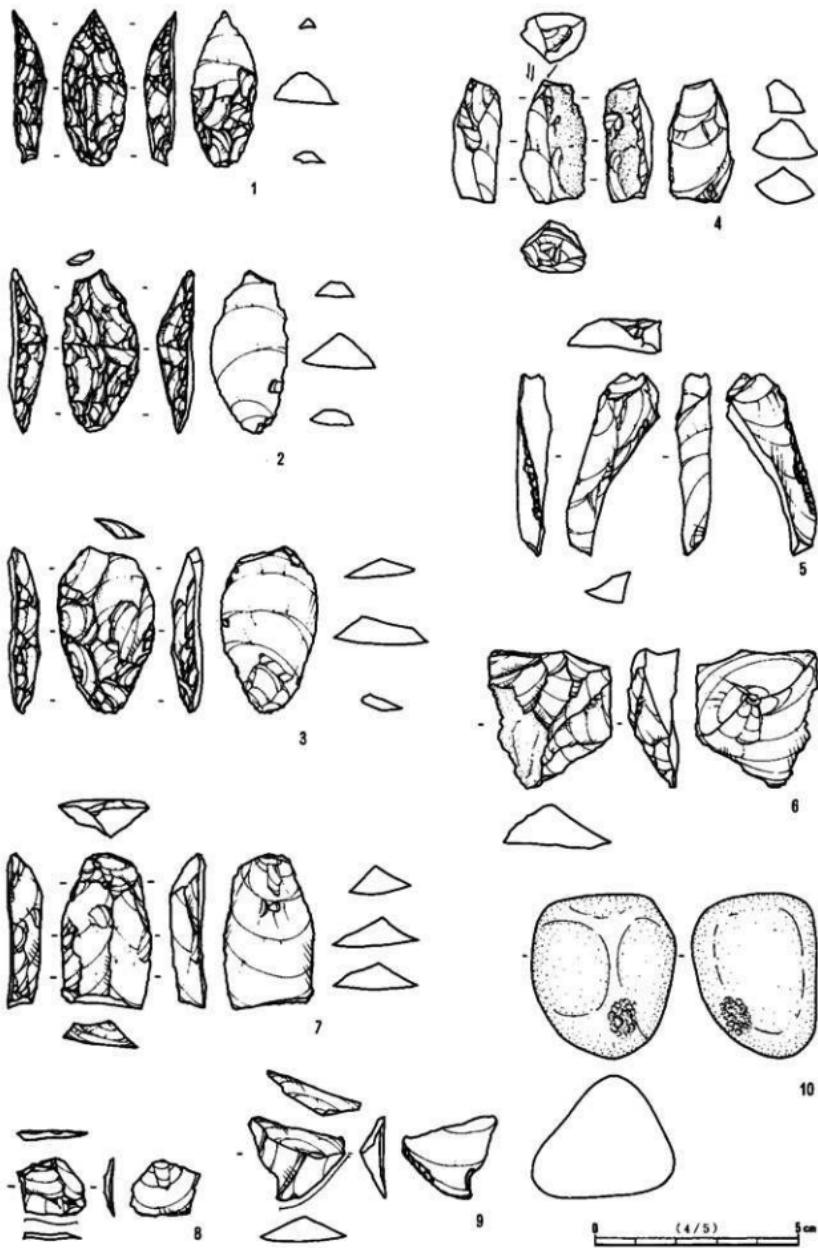
10は敲石である。砂岩製で器体下部に敲打痕が見られる。

剝片は全体的に打面の小さいものが多く、ポイントフレイクの特徴を有するものが多い(8)。折断剝片に微細剝離痕の観察されるものもある(9)。また、石刃(7)ないしは縦長剝片も特徴的に見られる。

図版掲載分の石器石材は、1・2・5・6・8・9は黒曜石A、3・4・7は黒曜石Bである。



第23図 一括集中2と主要な出土石器



第24図 一括集中2 出土石器 (1)

3 一括集中3 (第25図～28図、第9表、図版10)

1 D69区を中心に、径約20mの範囲に分布する。石器集中4と分布範囲を同じくする。グリッド一括資料から58点を抜き出した。黒曜石を主体とする地区であり、一括集中2とは視覚的に分かれるが、母岩の共有関係が認められる。ほかに頁岩、チャートなどが見られる。黒曜石は、その特徴から4種に分離される。器種については、尖頭器・スクレイバー・石核・微細刻離痕のある剝片・剝片・碎片・標がある(第25図)。剝片・碎片が全体の約6割を占める。

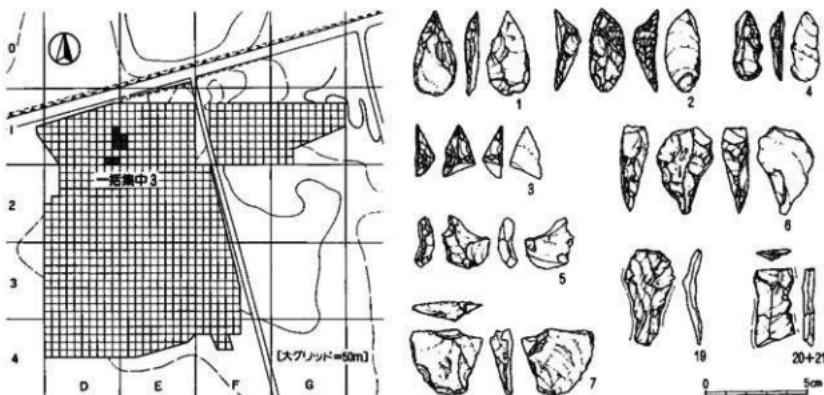
出土石器 (第26図～28図 1～31)

尖頭器は4点出土している。すべて黒曜石製で片面加工を施す。1は最大幅が器体下半部にある。両側縁から入念に尖頭部を作出し、剝離の進行方向は基部から先端に向かっている。裏面下部に自然面を有する。2は木葉形を呈し、やや反りのある素材剝片の末端を尖頭部とする。打面は基部調整によって除去され、右側縁を振器状に加工している。左側縁先端部分には櫛状の剝離痕が観察されるが、意図したものではないと考える。剝離進行方向は不定である。3は先端部のみで、両側縁とも剝離進行方向は先端から基部に向かっている。6は尖頭器未製品、又は尖頭器製作途中でスクレイバーに転用したものかもしれない。基部は両側縁から抉り込むように調整を施す。先端部の折面には再加工が施されている。

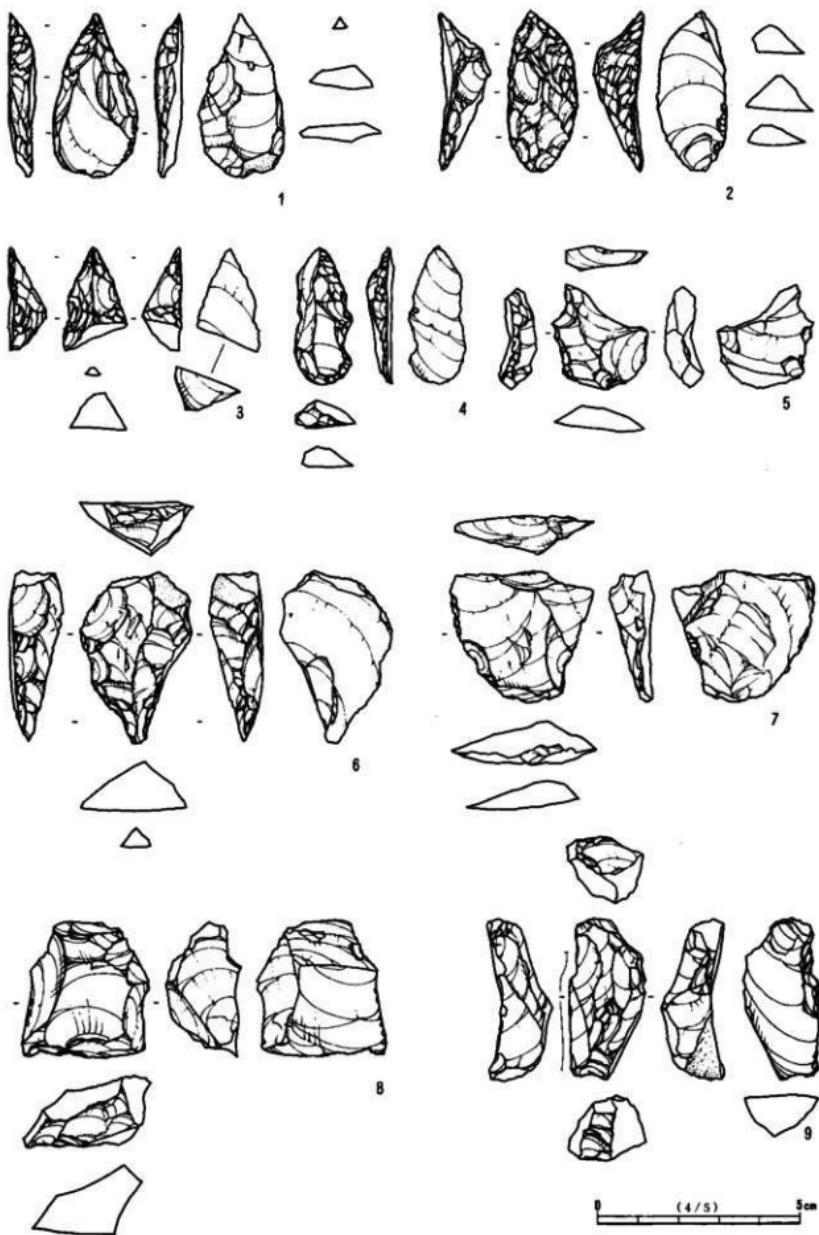
スクレイバーは2点出土している。4は縦長の素材を用い、打面は刃部調整によって除去される。尖頭形状で右側縁から下側縁まで調整を施すが、抉入部を2か所もつ。5はやや反りの大きい素材を用い、左側縁部に刃部を設定する。打面部を欠損する。

8は厚手の剝片を分割していく過程で生じた残核である。その形状からやや幅広の剝片を生産していたと考えられる。

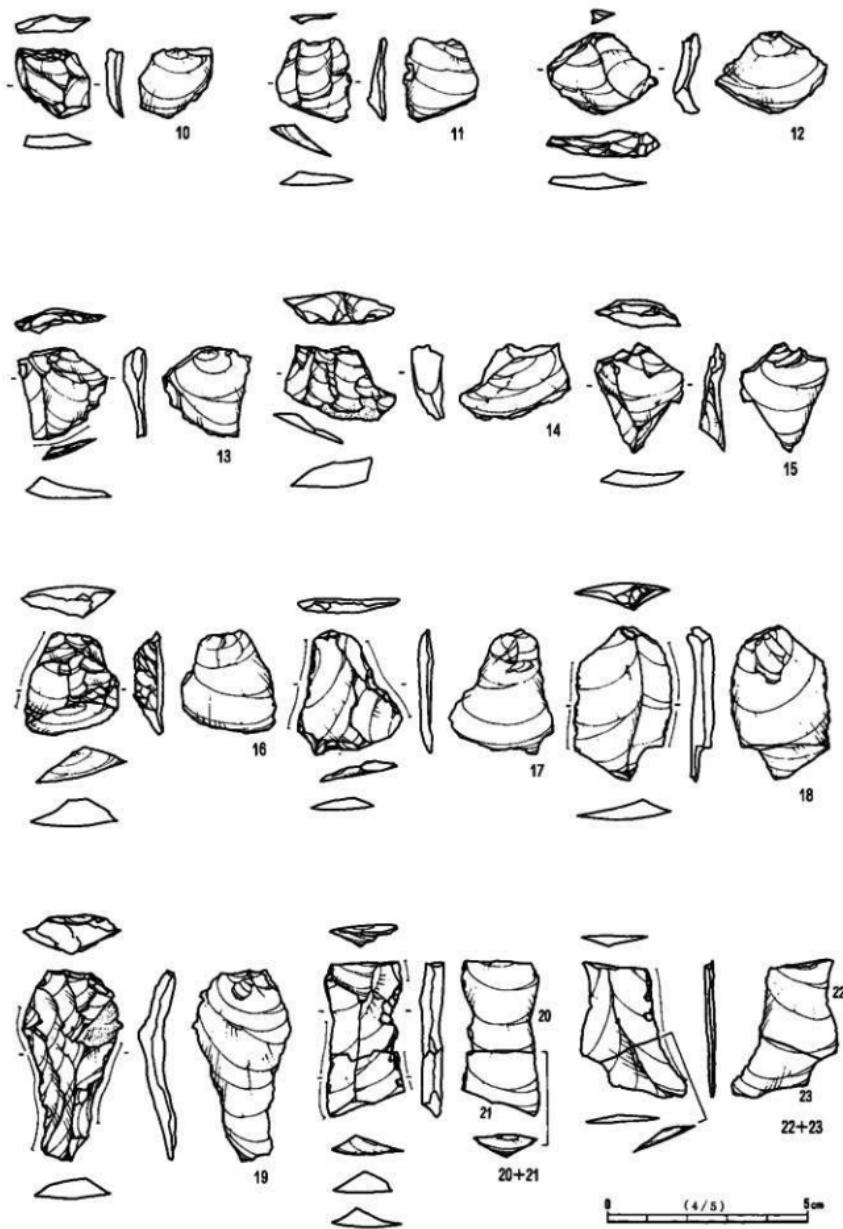
7・9～31に微細刻離痕のある剝片を含む剝片類をまとめた。縦長のものは打面が小さい傾向にある。折断された剝片の長さはほぼ30mm以内に収まり、微細刻離痕が目立つ。ポイントフレイク状のものや自然面を有するものあまり見られない。7は下部を欠損する。右側縁に微細刻離痕がみとめられる。形状から尖頭器未製品の可能性もある。13は打面と下部に微細刻離痕が見られる。左側縁を刃部と見立てれば台形



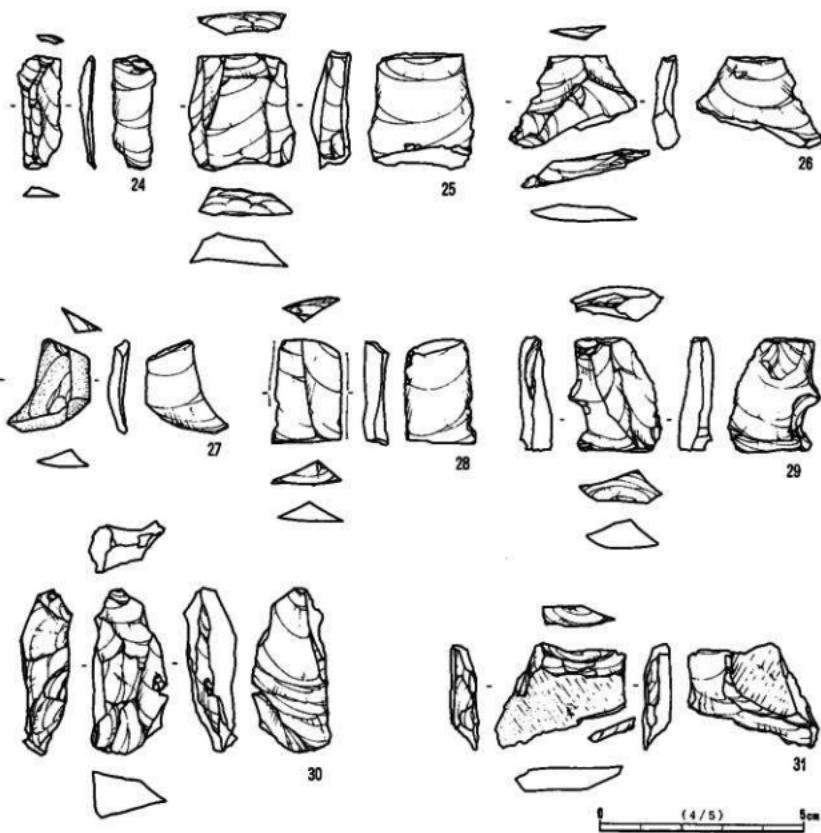
第25図 一括集中3と主要な出土石器



第26図 一括集中3 出土石器(1)



第27図 一括集中3 出土石器 (2)



第28図 一括集中3 出土石器（3）

様石器とすることもできよう。

図版掲載分の石器石材は、3・4・6・8～11・13・15～19・25・28・31は黒曜石A、1・2・5・7・12・14・20～23・27・30は黒曜石B、26は黒曜石E、24は黒曜石Fである。

4 一括集中4 (第29図~32図、第10表、図版2・11)

1G80区を中心に、径20m前後の範囲に分布する。グリッド一括資料から149点を抜き出した。安山岩A (ガラス質黒色安山岩) を主体とする地区である。ほかには、ごくわずかであるが珪質頁岩、チャート、安山岩B (トロトロ石) がある。器種としては、尖頭器・スクレイパー・微細剝離痕のある剝片・剝片・碎片・礫などが見られるが、剝片・碎片が全体の約9割を占める (第29図)。

石器検出状況の調査写真 (図版2) から、石器の広がりは径5mの範囲に集中し、周辺にやや散漫な広がりを見ることがある。出土層位は明らかにソフトローム (III層) より上位にあり、漸移層 (IIc層) に包含されていたと思われる。

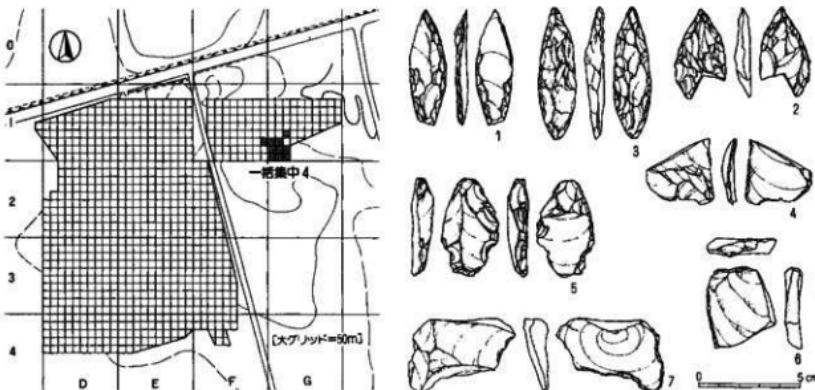
出土石器 (第30図~32図 1~27)

尖頭器は3点出土した。すべてガラス質黒色安山岩製で左右対称形を呈する。1は柳葉形で縦長の素材に周縁加工を施し、基部を欠損する。2は木葉形で両面に粗い調整が施され、基部を欠損する。3は柳葉形で両面を粗く調整している。器体中央部がやや分厚く、除去困難な高まりを残す。剝離進行方向は不定である。

スクレイパーは4点出土した。4は両側縁に刃部をもつ。5は右半部に刃部をもち、基部作出を意図したかのような抉りがみられる。尖頭器未製品の可能性がある。6はや幅広の素材を用い、左側縁に刃部を形成する。7は幅広の素材を用い、下側縁と右側縁に刃部を形成する。自然面を打面としている。

微細剝離痕のある剝片・碎片は8~27にまとめた。ほとんどが幅広の形態を呈する。頭部調整や打面調整が特徴的に施された両面体の調整剝片 (ポイントフレイク) が主体である。大形のものは自然面を有する傾向にある。8は入念な頭部調整を施している。折断面に微細剝離痕が見られる。

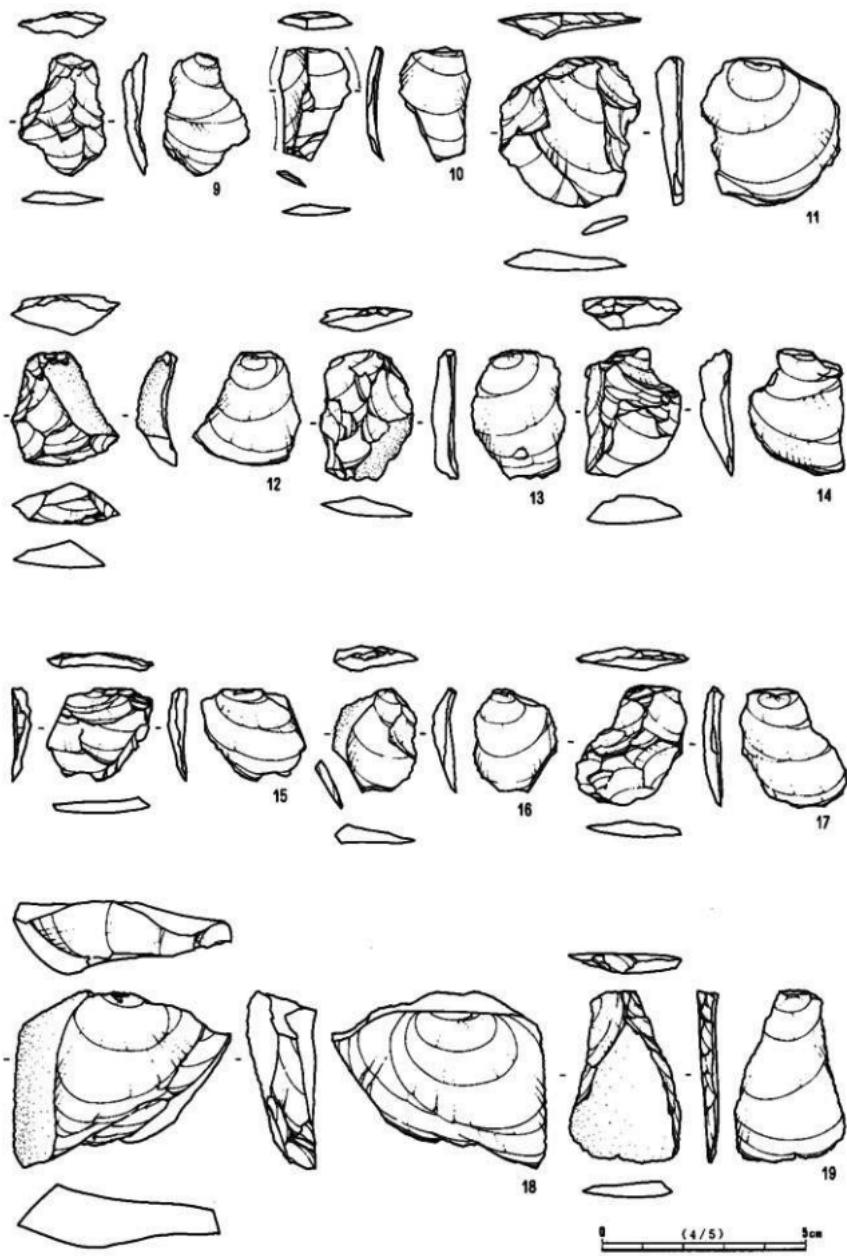
図版掲載分の石器石材は、1~3・6・7・9~11~27は安山岩A、4・5は珪質頁岩3、8~10は珪質頁岩である。



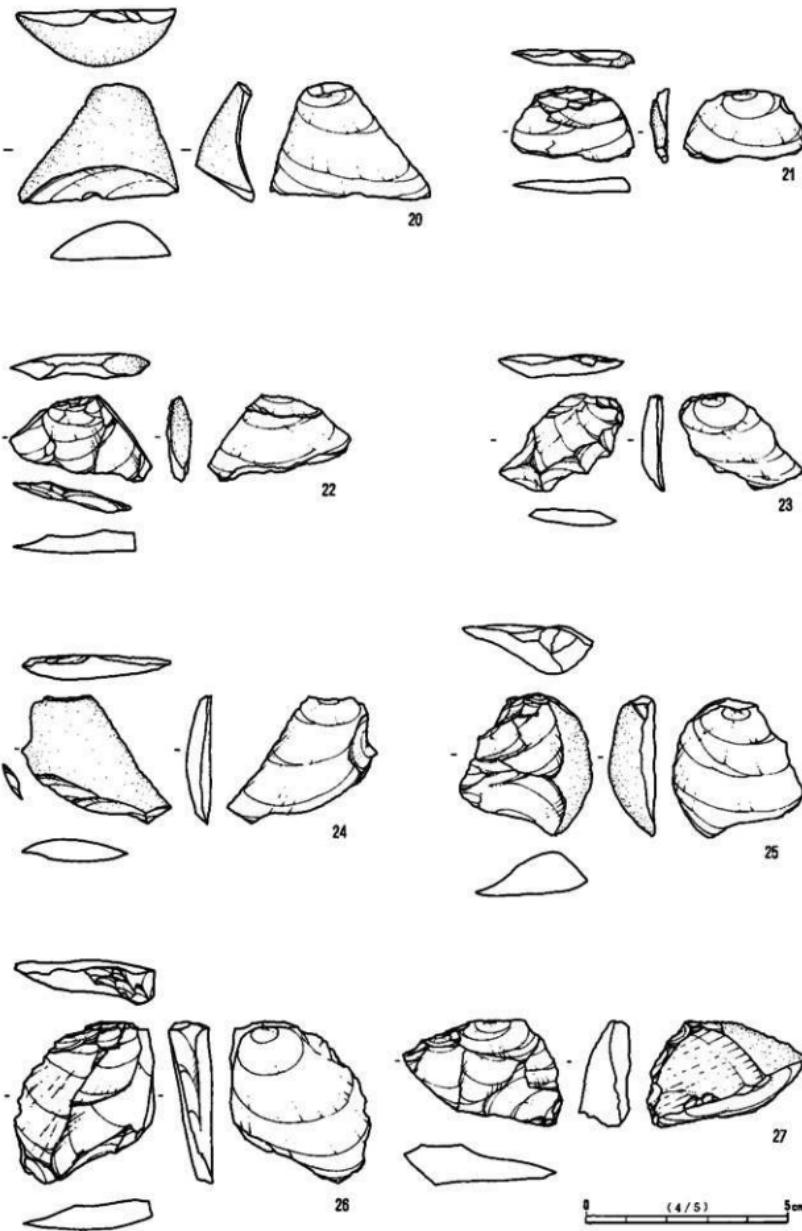
第29図 一括集中4と主要な出土石器



第30図 一括集中4 出土石器 (1)



第31図 一括集中4 出土石器 (2)



第32图 一括集中4 出土石器 (3)

5 石器集中地点外（第33図～37図、第11表、図版12・13）

グリッド一括出土品のうち、集中地点を形成しない単独出土のものを取り上げる（第33図）。

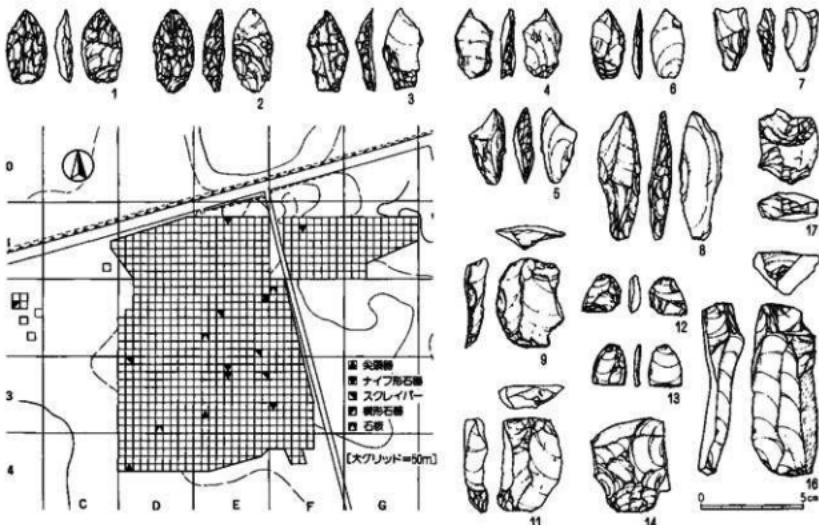
黒曜石製の尖頭器（第34図1～3）は明らかに石器集中4及び、一括集中2・3に見られる尖頭器石器群と同一時期の所産と考えられるが、分布状況はそれら石器集中に近接することなく、遺跡内に散漫な広がりを見せており。その他の器種についても石器集中、一括集中と分布域が異なるが、第34図4の黒曜石製のナイフ形石器のみが石器集中2と分布域を共有する。

出土石器（第34図～37図1～26）

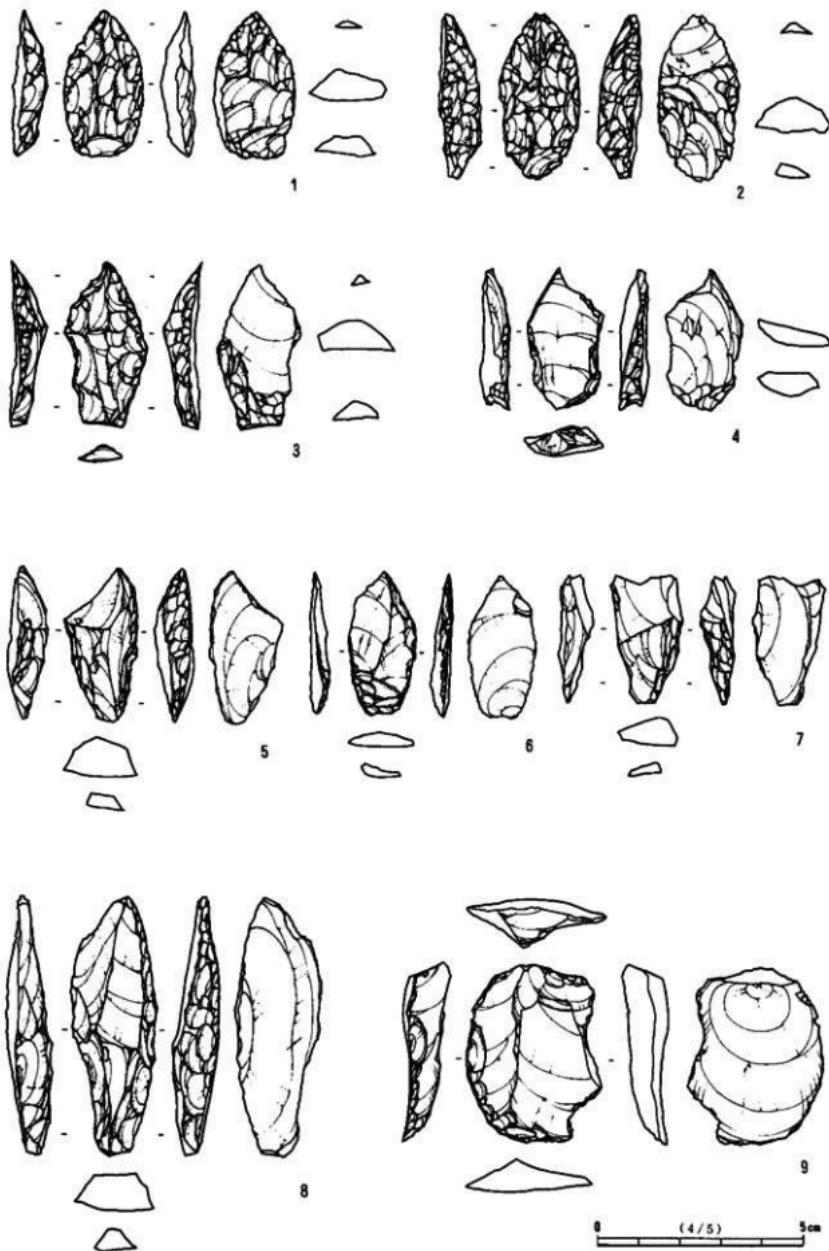
尖頭器は3点ある。1・2とも黒曜石製で木葉形を呈し、1は両面、2は半両面加工を施す。両者とも器体中央部に最大幅をもち、剥離の進行状況は両側縁とも不定である。2はやや厚手の剥片を素材として、素材剥片の反りを除去する程度に裏面側へ調整を施している。3は黒曜石製で半両面加工を施す。剥離進行方向は先端から基部へ向かう。裏面の基部加工は素材末端の反りを除去するためのものであろう。

ナイフ形石器は5点ある。いずれも二側縁加工を施すが4・5・7・8は横長、6は縦長の素材をそれぞれ用いている。横長素材のものは打面部をプランティングによって除去している。4は黒曜石製で石器集中2と分布域・母岩を共有する。先端を欠損し、側縁は裏面側から、基部は正面側から調整を施す。5は流紋岩製で切出形を呈する。6はチャート製で左右対称形を呈する。打面側を基部とし、側縁に細かく調整を施す。7はメノウ製で切出形を呈し、左側縁は折断により形成される。8はガラス質黒色安山岩製で切出形を呈する。基部は大きめの剥離によって抉るように作出される。

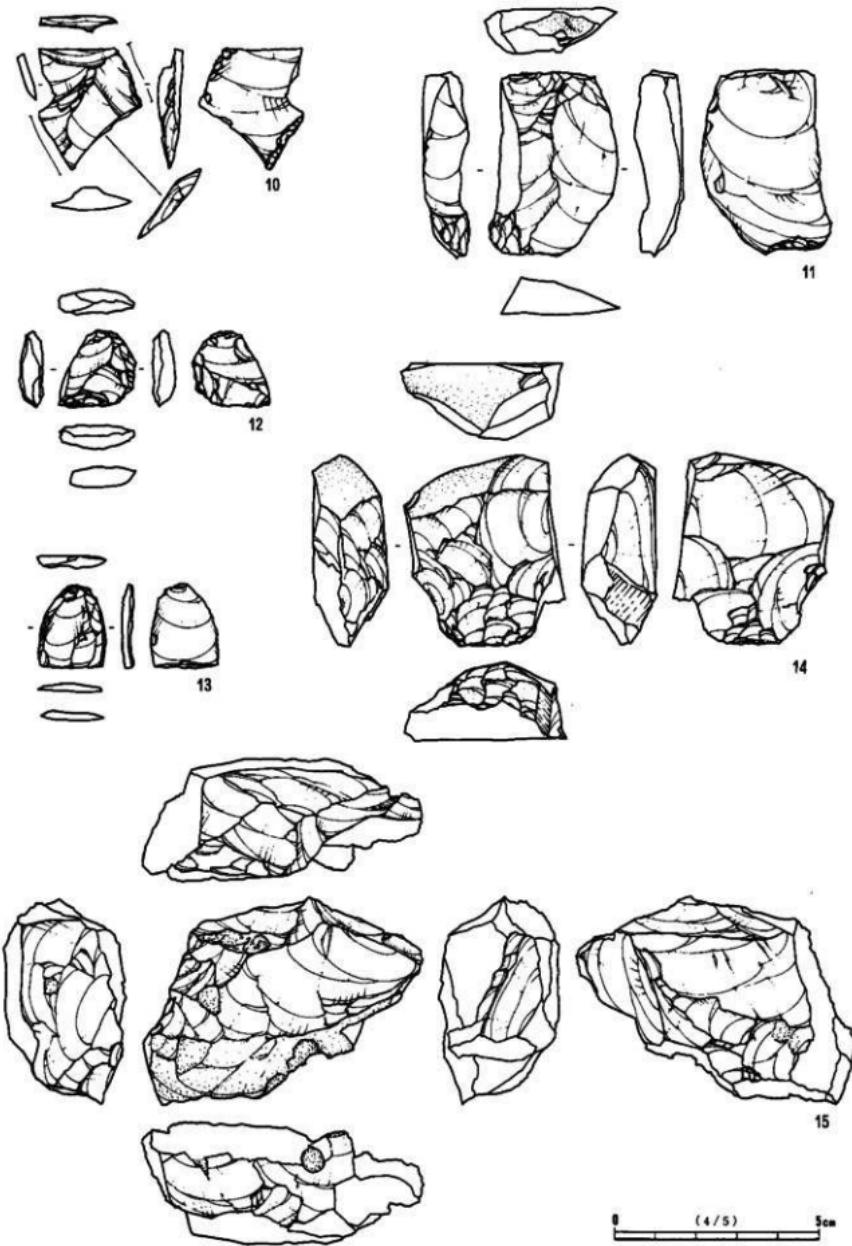
スクレーバーは4点ある。9は黒曜石製で刃部が器体を半周する。11は珪質頁岩製で末端に、裏面・正面から両面に調整が施されている。14はガラス質黒色安山岩製で素材両端を折断し、左側縁部に急角度の



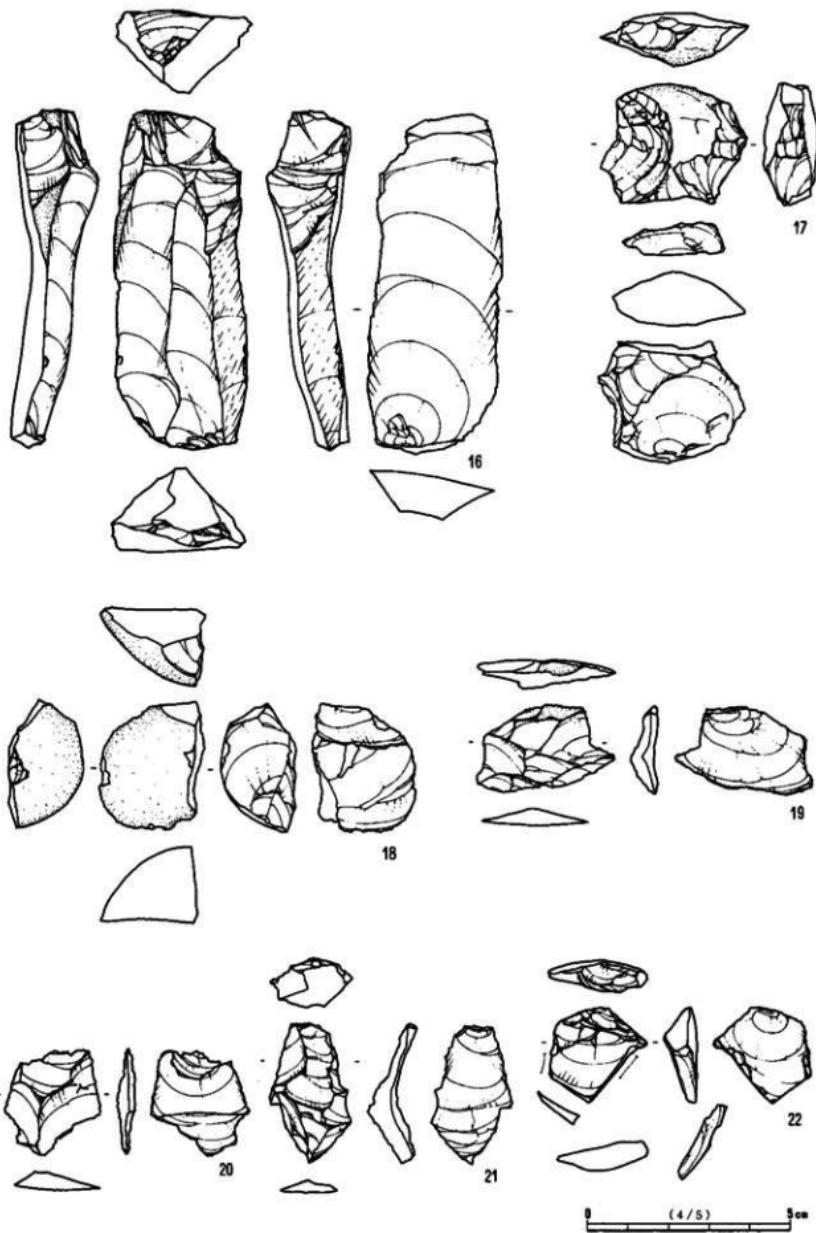
第33図 石器集中地点外と主要な出土石器



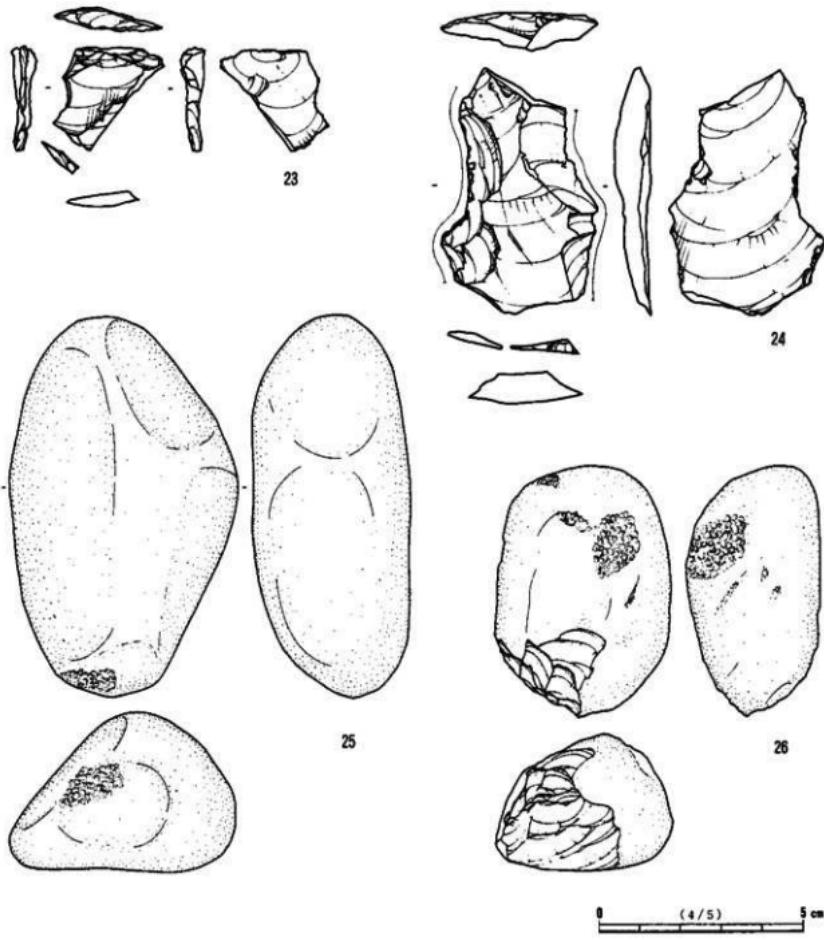
第34図 石器集中地点外 出土石器（1）



第35図 石器集中地点外 出土石器 (2)



第36図 石器集中地点外 出土石器 (3)



第37図 石器集中地点外 出土石器 (4)

刃部を作出している。17は黒曜石製でやや分厚い剥片を素材とし、右側縁に裏面から調整が施されている。

楔形石器は1点(12)で、頁岩製である。

石核は3点ある。15はメノウ製で正面に自然面を有する(出土状況は図版3を参照)。幅広の剥片生産が行われている。16は珪質頁岩製で背面に自然面を有する分厚い石刃を素材としている。石刃の末端部を折断し、その折断面を打面に設定して剥片剥離を行っている。「有撓石刃」とも呼称されている。18は安山岩製の石核である。

微細剥離痕のある剥片を含む剥片類を10・13・19～24に掲載した。10・22は黒曜石A、13は珪質頁岩、19・20は安山岩A、21はメノウ、23・24は黒曜石Cである。

第7表 一括集中1 器種組成と石材構成

	ナイフ形 石器	彫刻刀形 石器	スクレイパー	石刃	微細刻線の ある削片	鋸片	鉋片	合計	組成比
黒曜石 A						3		3	9.09
					1.18			1.18	0.59
黒曜石 B					1			1	3.03
					0.88			0.88	0.44
珪質頁岩 2	1 0.58	1 10.73	1 5.07		1 4.99			4 21.37	12.12 10.62
珪質頁岩	1 2.58				1 0.57			2 3.15	6.06 1.57
珪化岩 1				1 6.83		1 2.59		2 9.42	6.06 4.68
頁岩			1 4.58		1 3.54			2 8.12	6.06 4.04
メノウ 3					1 0.85	1 3.21		2 4.06	6.06 2.02
メノウ 4	1 3.35				4 28.74	9 53.01	1 0.22	15 85.32	45.45 42.41
安山岩 A				1 66.71				1 66.71	3.03 33.16
黒色安山岩						1 0.96		1 0.96	3.03 0.48
合計(点数)	3	1	3	1	8	16	1	33	100.00
合計(重量)	6.51	10.73	76.36	6.83	38.69	61.83	0.22	201.17	100.00
組成比(点数)	9.09	3.03	9.09	3.03	24.24	48.48	3.03	100.00	
組成比(重量)	3.24	5.33	37.96	3.40	19.23	30.74	0.11	100.00	

〔上段：点数、下段：重量(g)〕

第8表 一括集中2 器種組成と石材構成

	尖頭器	スクレイパー	彫刻刀形 石器	石刃	微細刻線の ある削片	鋸片	鉋片	離石	矯・矯片	合計	組成比
黒曜石 A	2 9.17	1 4.28			3 2.64	22 24.70	2 0.14			30 40.53	71.43 18.08
黒曜石 B	1 6.29		1 6.14	1 6.13		4 0.92	1 0.05			8 19.53	19.05 8.63
砂岩									1 60.56	1 60.56	2.38 26.75
石英ハンガ											101.80 101.80
不明									1 3.56	1 3.56	2.38 1.57
合計(点数)	3	1	1	1	3	26	3	1	3	42	100.00
合計(重量)	15.46	4.28	6.14	6.13	2.64	25.62	0.19	60.56	105.36	226.38	100.00
組成比(点数)	7.14	2.38	2.38	2.38	7.14	61.90	7.14	2.38	7.14	100.00	
組成比(重量)	6.83	1.89	2.71	2.71	1.17	11.32	0.06	26.75	46.54	100.00	

〔上段：点数、下段：重量(g)〕

第9表 一括集中3 器種組成と石材構成

	尖頭器	スクレイパー	石板	微細剝離の ある剝片	鉄片	鉛片	糠	合計	組成比
黒曜石 A	2	1	1	8	11			23	39.66
	13.14	2.01	15.65	26.88	22.52			86.20	35.35
黒曜石 B	2	1		7	16	1		27	46.55
	10.24	3.68		17.36	18.77	0.03		50.08	22.07
黒曜石 E					2			2	3.45
					4.09			4.09	1.80
黒曜石 F					2			2	3.45
					4.81			4.81	2.12
メノウ				1				1	1.72
				0.65				0.65	0.29
石英ハニカム							1	1	1.72
							40.56	40.56	17.88
花崗岩							1	1	1.72
							11.83	11.83	5.21
不明							1	1	1.72
							34.67	34.67	15.28
合計(点数)	4	2	1	16	31	1	3	58	100.00
合計(重量)	23.38	5.69	15.65	44.89	50.19	0.03	87.06	226.89	100.00
組成比(点数)	6.90	3.45	1.72	7.79	53.45	1.72	5.17	100.00	
組成比(重量)	10.30	2.51	6.90	19.78	22.12	0.01	38.37	100.00	

(上段:点数、下段:重量(g))

第10表 一括集中4 器種組成と石材構成

	尖頭器	スクレイパー	微細剝離の ある剝片	鉄片	鉛片	糠	合計	組成比
安山岩 A	3	2	3	123	5		136	91.28
	24.97	39.59	21.07	249.22	0.54		326.39	83.58
安山岩 B				1			1	0.67
				5.37			5.37	1.38
チャート 1				2			2	1.34
				0.90			0.90	0.23
チャート				1			1	1.34
				0.21		0.52	0.73	0.19
珪質頁岩 3		2					2	1.34
		17.80					17.80	4.56
珪質頁岩			2	1			3	2.01
		7.87	0.47				8.34	2.14
黒色頁岩					1		1	0.67
					0.27		0.27	0.07
不明						3	2	1.34
						36.70	36.70	7.86
合計(点数)	3	4	5	128	6	3	149	100.00
合計(重量)	24.97	48.39	28.94	256.17	0.81	31.22	390.50	100.00
組成比(点数)	2.01	2.68	3.36	55.91	4.03	2.01	100.00	
組成比(重量)	6.39	12.39	7.41	65.60	0.21	7.99	100.00	

(上段:点数、下段:重量(g))

第3章 繩文時代

第1節 遺構と遺物

縄文時代の遺構は、陥穴5基を検出したのみである。大半は、取香川に続く北の小支谷尾羽根川の谷頭に位置している。それらのさらに南側には縄文早期を中心とした包含層がある。

1 陥穴

1号陥穴（第38図、図版4）

調査区の北西の隅に位置する。グリッド番号は、1C58・1C59に当たる。形状は細長い橢円形である。北側と南側の先端部はオーバーハングしており、底面は著しく狭くなっている。規模は長軸3.22m、短軸0.29m、検出面からの深さ1.70m～1.91mである。主軸方向は、N-18°-Eで等高線と直交する。遺物は出土していない。

2号陥穴（第38図、図版4）

調査区の北側に位置する。グリッド番号は、1D48に当たる。形状は細長い橢円形である。北側と南側の先端部はオーバーハングしており、底面は著しく狭くなっている。規模は長軸2.60m、短軸1.24m、検出面からの深さ1.00m～1.74mである。主軸方向は、N-24°-Eで等高線と直交する。遺物は出土していない。

3号陥穴（第38図、図版4）

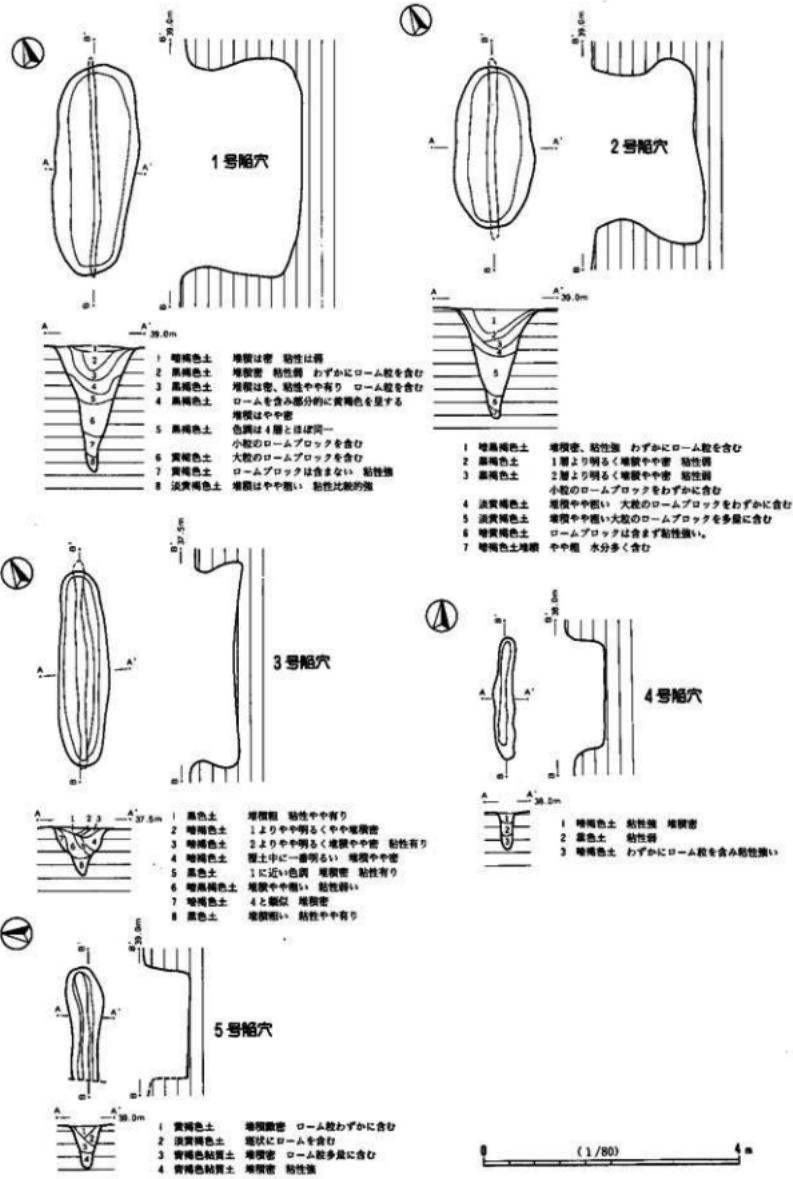
調査区の中央部北側、北からの谷の谷頭に位置する。グリッド番号は、1E58に当たる。形状は細長い橢円形である。北側と南側の先端部はオーバーハングしており、底面は著しく狭くなっている。規模は長軸3.04m、短軸0.72m、検出面からの深さ0.65m～0.80mである。主軸方向は、N-20°-Eで等高線と直交する。遺物は出土していない。

4号陥穴（第38図、図版4）

調査区の中央部北側、3号陥穴の南側に位置する。グリッド番号は、1E88に当たる。形状は細長い葉巻形である。底面は著しく狭くなっている。規模は長軸1.88m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.50m～0.52mである。主軸方向は、N-5°-Eである。遺物は出土していない。

5号陥穴（第38図、図版4）

調査区の中央部南側に位置し、下層の確認調査時に東側半分のみを検出した。グリッド番号は、3D89に当たる。形状は細長い葉巻形であり、底面は著しく狭くなっている。規模は長軸1.74m、短軸0.38m、検出面からの深さ0.55m～0.70mである。主軸方向は、N-80°-Eである。遺物は出土していない。



第38図 陷穴

第2節 グリッド出土遺物

1 土器

本遺跡から出土した土器片は総数976点であり、早期から晩期までの諸型式にわたっている。これらを大別すると、以下のとおりに分類される。さらに、細分については形態及び文様による分類に従って行う。

第I群土器 早期の土器

第II群土器 前期・中期の土器

第III群土器 後期・晩期の土器

第I群土器 早期の土器

本群の土器は、総数494点と全体の50.6%を占める。調査区中央南寄りに分布し、特に3E区に集中している(第39図)。細分すると井草I式土器・三戸式土器・田戸下層式土器・田戸上層式土器・条痕文系土器に分類される。

第1類 井草I式土器(第42図1~4、図版14)

1は口縁が肥厚するもので、口唇は面取りされ、斜綱文が上面及び外縁に施文される。その下位には条横走の単節RL綱文が施文される。胎土は白色砂を含み全体に細かい。2は口縁が外反するもので、口唇部は両縁から斜綱文が施文され尖頭状口唇になる。外面は、条横走の綱文が施文されている。胎土に長石を多く含む。3・4の口唇部は両縁から斜綱文が施文され、以下は条横走綱文が施文される。外反の角度は緩やかである。

第2類 三戸・田戸下層式土器

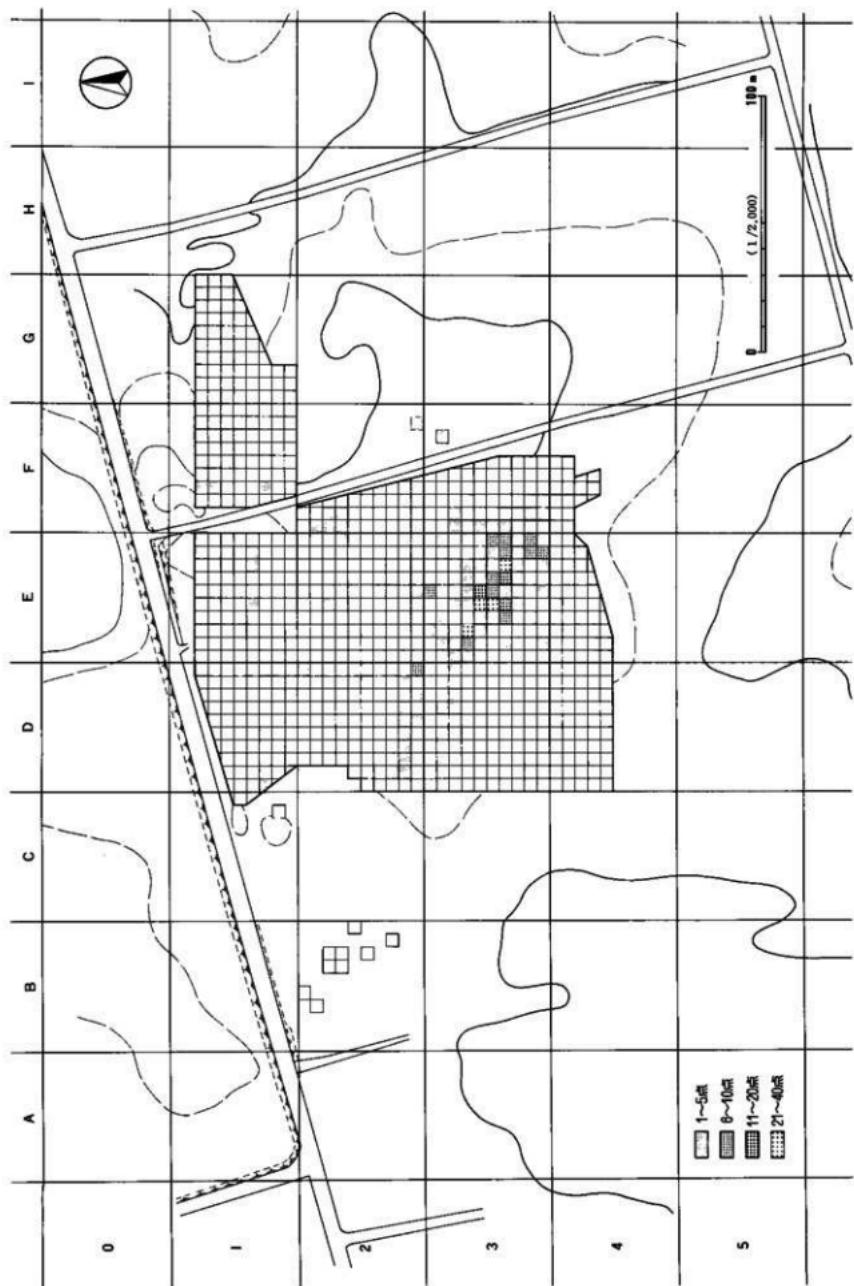
a種 細沈線が施文されるもの(第42図5~21、図版14)

三戸式から田戸下層式の古手の細沈線の土器を一括した。5・6の土器は細沈線で横位に施文した上に縦位、斜位に文様が展開する。口唇は内削ぎで刻みが入る。胎土に赤色スコリアと砂粒を含む。焼成は良好である。内面はよくなでられている。7は横位に数条の沈線が施文される。口唇は角頭状でやや外反する口縁をもつ。8~10は横位に沈線が施文される。10は胎土に長石を多く含む。口唇は角頭状である。11は胴部片であるが全体に横位に細沈線が施文される。胎土に長石、石英をやや多めに含む。12は胎土に長石を多く含み、内面もよくみがかれている。13はやや太めの沈線が横位に施文される。胎土に砂粒を多く含む。14~16は口縁部から胴部に縦に細沈線が施文される。胎土に石英・長石を含む。17は横位に細沈線が施文される。18~21は横位・斜位に細沈線が施文される。胎土に石英・長石を含む。5・6・10・11は三戸式に比定される。

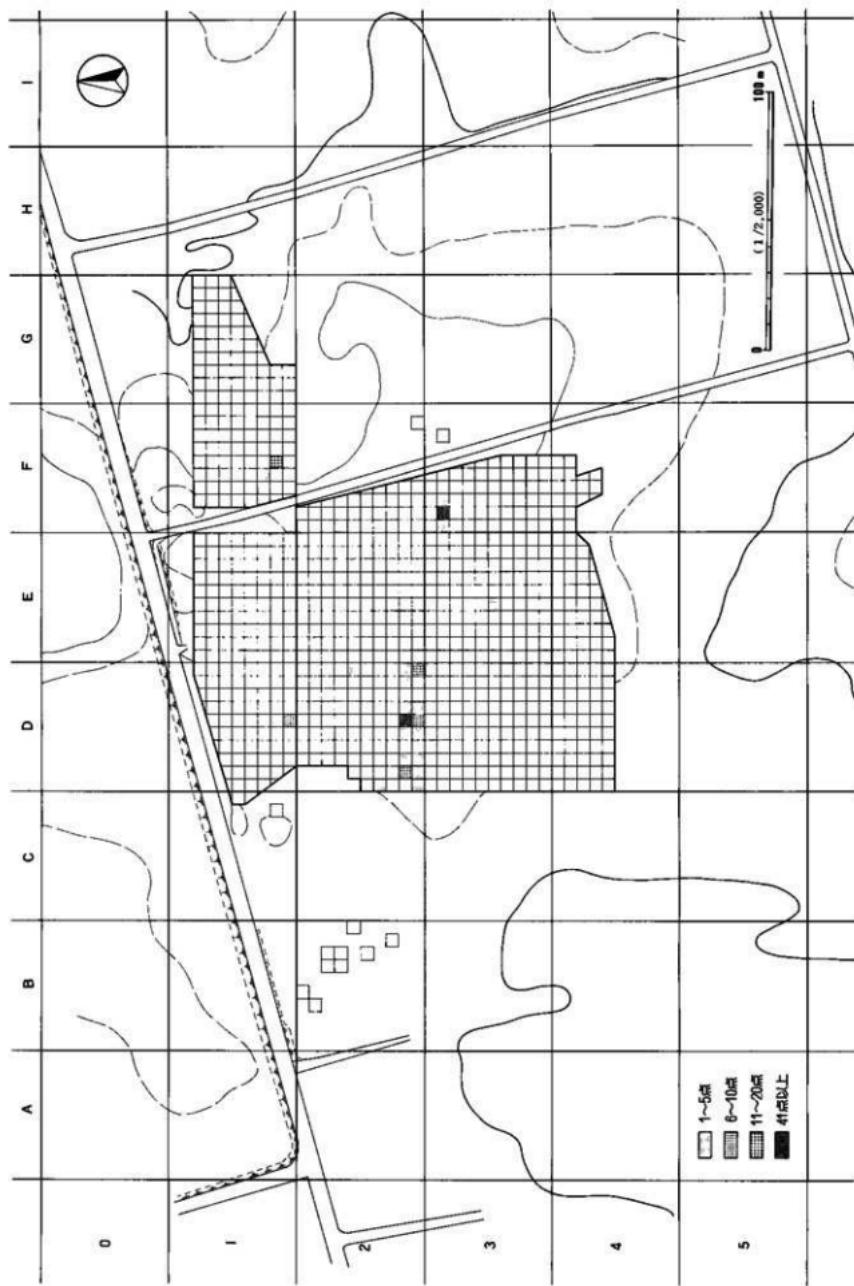
b種 細沈線と貝殻腹縁が併せて施文されるもの(第42図22~44、図版14)

貝殻腹縁文の横位区画文、横走の密集沈線文を特徴とする土器である。器形は口縁部が軽く外反する。胎土には石英、長石、雲母粒を多く含む。23~31は、外反する波状口縁をもつ深鉢である。口唇部に細かな沈線の刻みが入る。口縁部から胴部にかけ、横位・斜位に数条の細沈線で区画された中にアナグラ属の貝殻腹縁文が施文される。胴部は2本の沈線間に無文になり、沈線により三角、菱形に区画された中を比較的細かな貝殻腹縁文が施文されている。32~44は、やや太い沈線により描かれた幾何学的な文様の中に、かなり大きめの貝殻により腹縁文が施文されている。

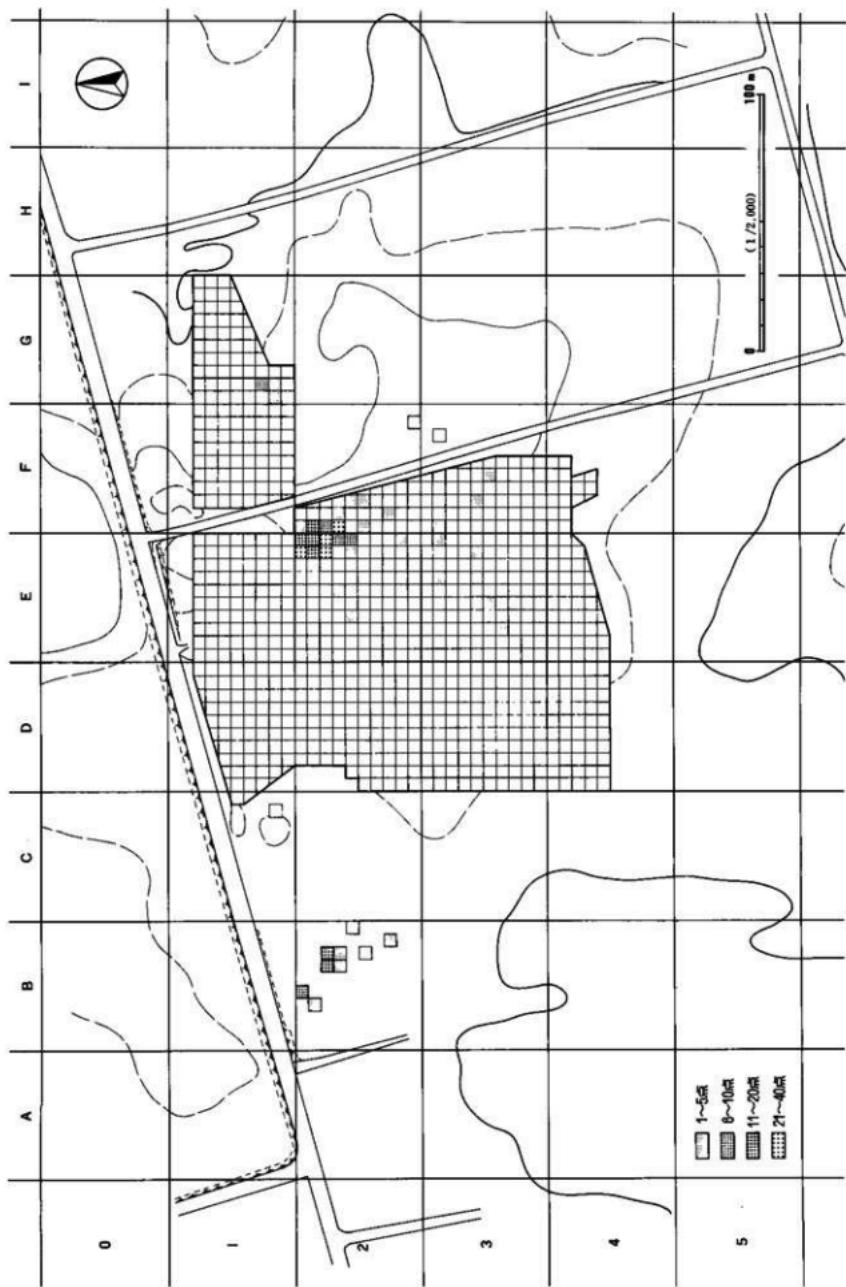
第39図 第1群 繩文土器(早期)分布図

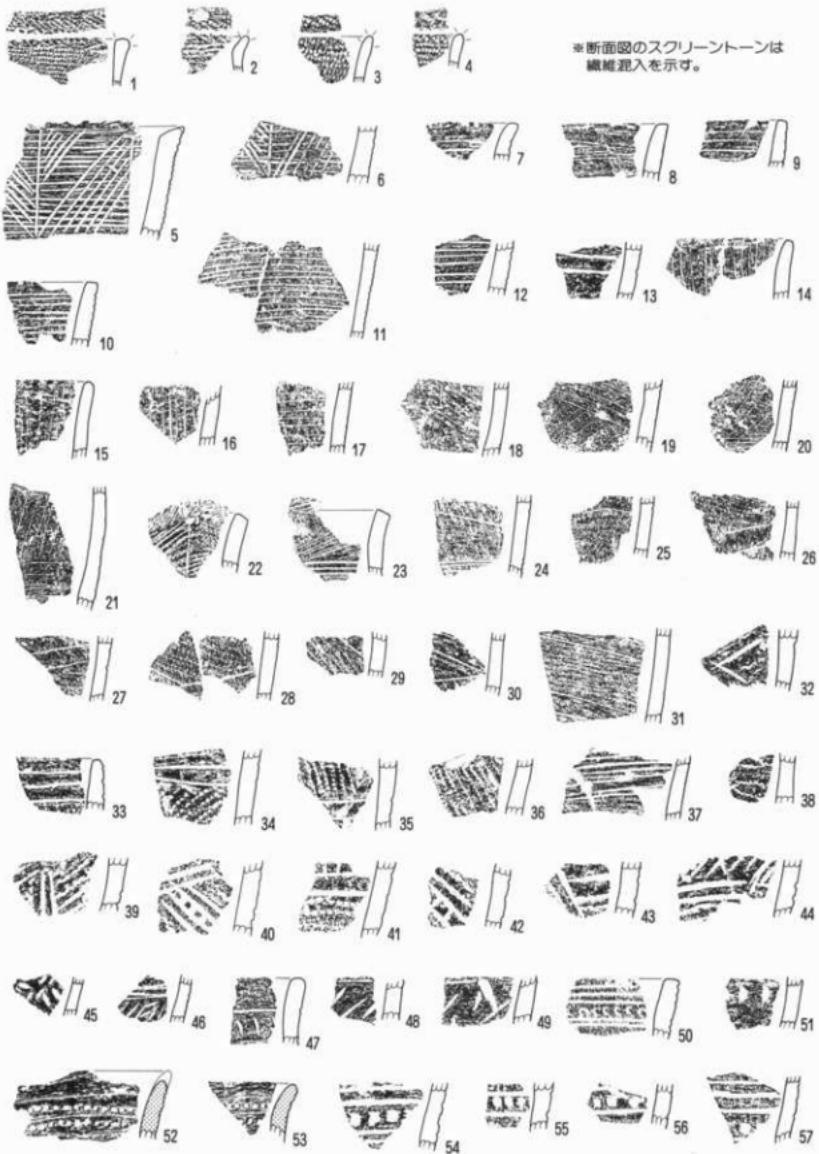


第40図 第II群 繩文土器（前・中期）分布図



第41図 第III群 繩文土器（後・晚期）分布図





第42図 第I群 繩文土器 (1)

1 (1/3) 10cm

c種 短沈線・列点が施されるもの(第42図44~51、図版14)

45は列点状の短沈線が施文される。46は横位と斜位の細沈線が施され、斜位の沈線間に短沈線が入る。47~49は横位の沈線の間に、斜めの短沈線が入る。50は、沈線のあいだに竹管により爪状の刺突が入る。胎土には長石を多めに含む。口縁は角頭状である。51は細沈線の直下に爪形の刺突が入る。

d種 沈線間に刺突文が施文されるもの(第42図52~57、図版14)

52~53は突起をもつ平縁の深鉢である。横位の細沈線の間に茎状のもので深めに突いた列点が並ぶ。胎土に纖維を少量含む。口縁は尖頭状である。54~57は、やや太めの沈線の間に茎状のもので突いた刺突文が巡る。刺突の縁がやや盛り上がっている。胎土に少量の石英・長石を含む。

e種 太沈線と細沈線が施文されるもの(第43図58~65、図版15)

58~59は縦位に配置された列点間を太沈線と細沈線が、ジグザグに施文される。口縁はやや波状になり、口唇は角頭状である。胎土に赤色の小石、長石、石英を含む。60は横位・斜位に沈線が施文される。61~62は同一個体である。数条の細沈線を区画として口縁まで縦の太沈線が施文される。内外面ともによく磨かれていて、焼成も良好である。63は細沈線の区画の中に斜めの太沈線が施文される。64は細沈線の区画の上下に、斜めの細沈線とやや太めの沈線が施文される。65は細沈線の上から斜めに太沈線が施文される。胎土に小石、赤色粒、長石が含まれる。三戸式に比定される。

f種 太沈線が施文されるもの(第43図66~72、図版15)

66~70は横位に太沈線が巡る。68~69は胎土に長石・石英を多く含む。71は縦位の太沈線が施文されている。口縁は角頭状である。胎土に長石・石英を含む。72は太沈線の間に斜位の沈線が入る。68~69は三戸式に比定される。その他は田戸下層式の古手の時期のものであろう。

g種 沈線と短沈線が施文されるもの(第43図73~82、図版15)

73~82は器面全体を細沈線に覆われるが、一部短沈線が列点状に施される。焼成も良好である。田戸下層式後半の土器である。

第3類 田戸上層式土器

a種 明神裏III式土器類似の土器(第43図83~87、図版15)

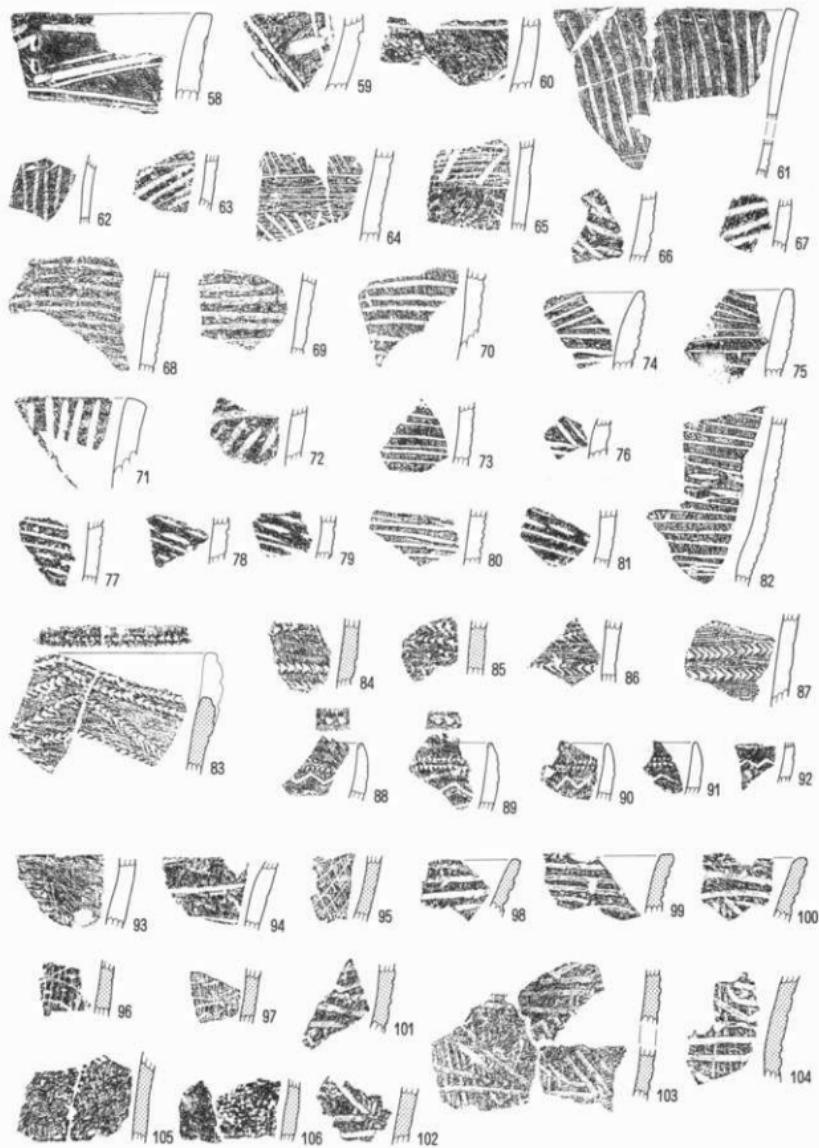
83~87は波状口縁を呈するキャリバー形の深鉢形土器である。口唇部、口縁部、胴部にかけてペン先状に尖った工具により、押し引き状の連続三角刺突文が施文される。胎土は、石英・長石、纖維も少量含む。86~87は条線上に連続三角刺突文が引かれている。

b種 典型的な田戸上層式土器(第43図88~94、図版15)

88~92は口唇部に内側を向いた工具による刻みが入る。口縁は波状で上部が膨らむ。口縁部近くは二条の刺突文が巡り、鋸歯状の沈線が引かれさらにその下に、横位の沈線が施文される。93は刺突を基に沈線が曲がる。胎土に長石・石英を少量含む。94はやや外反した深鉢の胴部片、横位に沈線が施文される。胎土に石英・長石を含むが、長石は多量である。

c種 条痕文の地文の上に沈線が施文されるもの(第43図95~106、図版15)

95~97は縦位に引かれた条痕状の浅い沈線を地文として、細沈線により文様を描いている。95~97は斜位に、96は弧状に沈線が引かれ、沈線間に刺突が入る。それぞれ胎土に纖維が入る。98~106は縦位・斜位に引かれた条痕文の地文の上に太沈線で文様が描かれている。口縁直下の3条の沈線と胴部に引かれた2条の沈線との間に文様が展開する。文様は弧状に引かれた沈線、鋸歯状に引かれた沈線、斜位に走る沈線



第43図 第I群 繩文土器（2）

が組み合わされたものである。器形は口縁部付近で外反する。胎土には纖維が含まれる。

第4類 条痕が施文されるもの・無文のもの

a種 条痕が施文されるもの(第44図107~119、図版16)

107~110は4~6条を単位とした短い条痕が全体に施文される深鉢である。色は赤褐色で内面はよく磨かれている。111~114は格子目状になる条痕文である。108~114・115~119は、擦痕状の条痕文土器である。胎土に微量の纖維を含む。107~119は三戸式から田戸下層式に比定される。

b種 無文のもの(第44図120~133、図版16)

120~127は軽く外傾する砲弾形の深鉢である。口唇は丸く成形され外面は整形時の砂の移動による擦痕が見られる。胎土には石英・長石が含まれる。内面はよく磨かれている。三戸式から田戸下層式に比定される。128~133は胎土に纖維を含む。田戸上層式土器に比定される。

第5類 底部(第44図134~137、図版16)

134~137は砲弾形の底部である。134は開く角度が40度で外面はナデが行われている。胎土には少量纖維を含む。135は開く角度39度で外面にケズリ痕が残る。136は開く角度42度で外面にナデが行われている。137は開く角度40度で、内外面ともナデが行われている。三戸式から田戸下層式の土器の底部である。

第6類 早期後半の条痕文系土器(第44図138~141、図版16)

内・外面に斜位の条痕が施される土器である。胎土中に纖維を含む。本類の出土は少量であった。

第II群 前期・中期の土器

本群は総数195点、全体の19.9%である。2D区・3F区・1F区の地点ごとに土器の傾向が分かれている(第40図)。細分すると黒浜式土器・浮島式土器・興津式土器・前期末・中期初頭の土器に分類できる。

第1類 黒浜式土器(第45図142、図版17)

142は斜繩文が施文される。胎土には纖維が含まれる。黒浜式土器の出土は極少量である。

第2類 浮島・興津式土器

a種 変形爪形文が施文されるもの(第45図143~158、図版17)

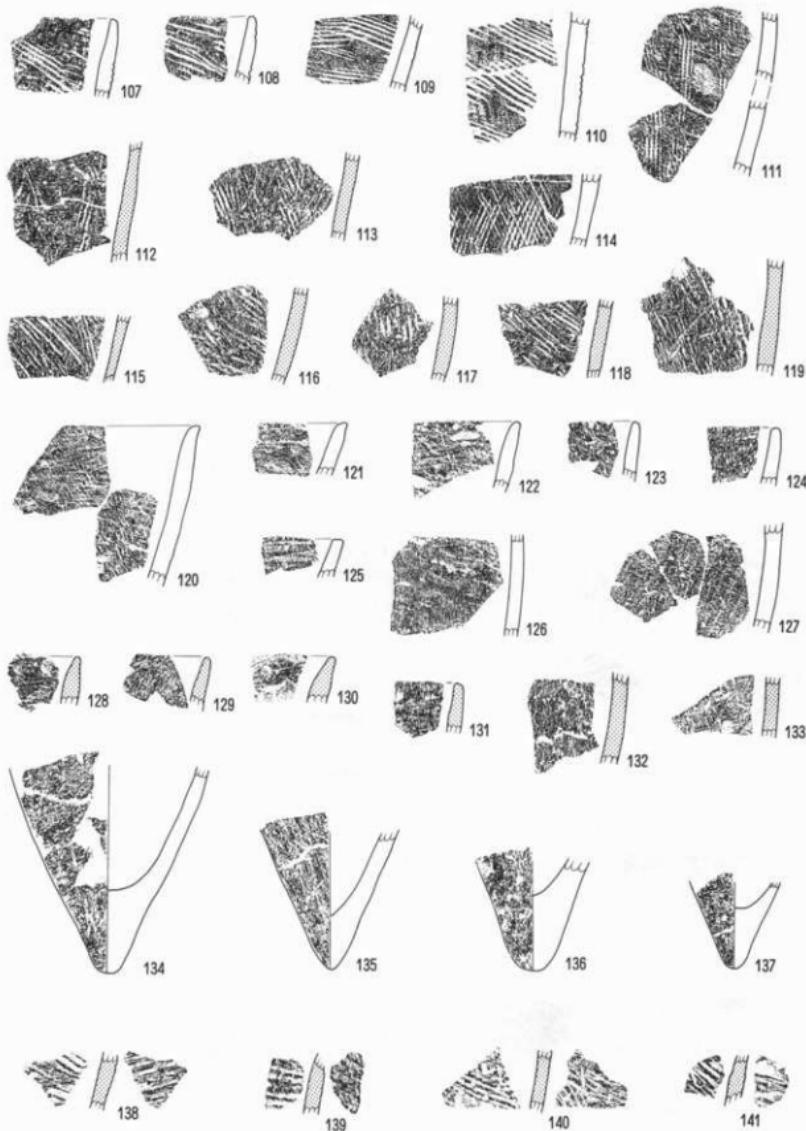
143は推定口径28.0cm、残存高27.0cmで器形は胴部下半がやや張り、口縁の外反する深鉢形土器である。底部は残存しない。口唇部は尖頭状で、文様は口縁直下と胴部に引かれた2条の変形爪形文で区画され、主文様は平行沈線でくの字の文様を構成する。変形爪形文は、先に沈線で割付けられてから充填する手法で施される。胴部下半は無文である。色調は淡褐色、胎土に細砂粒が多く含まれる。浮島2式に比定される。144~158は143と同形の深鉢である。口唇は外削ぎで縦に刻みが入る。刻みの直下には一条の沈線をはさんで変形爪形文の帯があり、さらに下位には斜めの短沈線が入る。竹管による大きなくの字文、変形爪形文、斜めの単沈線、貝殻による波状へと続く。胎土には長石が多く含まれる。浮島2式に比定される。

b種 横位に沈線が施文されるもの(第45図159~164、図版17)

159~164は口唇部に刻みが入る。胴部は、竹管により横位・斜位に模様が施される。器形は口縁部が開く深鉢である。最下部は無文である。興津式に比定される。

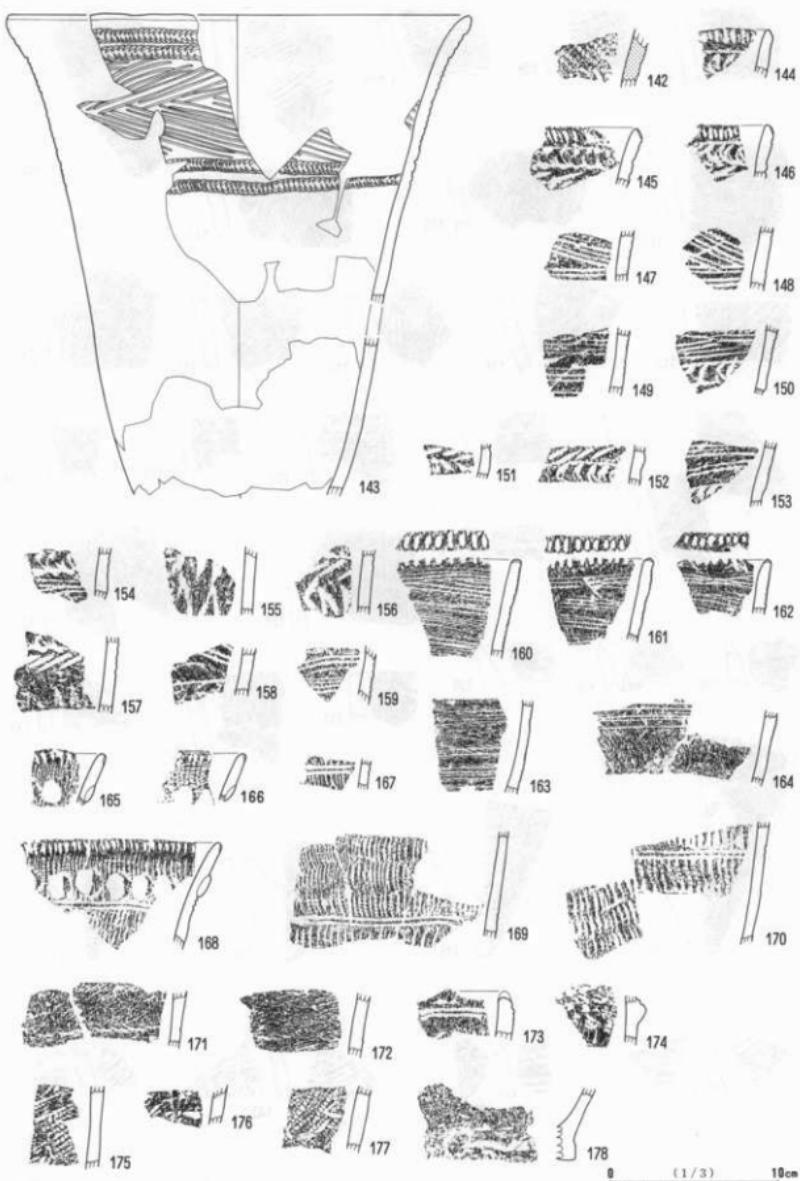
c種 貝殻により施文されるもの(第45図165~170、図版17)

165~170の口唇部はやや内削ぎで縦に刻みが入る。その下はわずかに無文帶があり、その下は貝殻により縦に全体に施文する。上部には、貝殻の腹縁を用いて、器面を深くえぐることで指頭圧痕様の文様を作

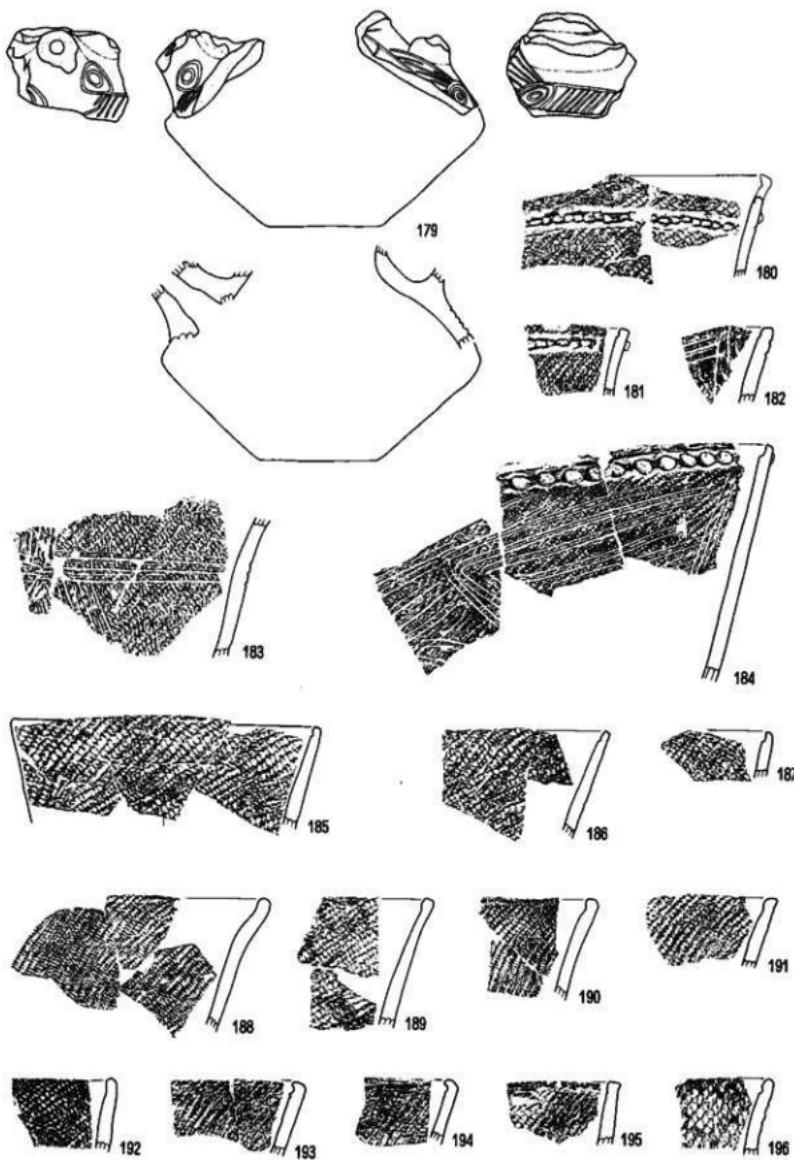


第44図 第I群 繩文土器（3）

0 (1/3) 10cm



第45図 第II群 繩文土器



第46図 第三群 繩文土器 (1)

(1 / 3) 10cm

出している。胴部には1条の竹管による横線が区画している。興津式に比定される。

第3類 前期末・中期初頭の土器(第45図171~178、図版17)

171・172は胴部片で地文は斜位の縄文が施文され、その上に綾絡文が施される。胎土には砂粒、長石の粒を含む。下小野式土器に比定される。173は突起をもつ口縁部である。口縁近くに2条の横沈線が引かれる。174は横位に隆帯が見られ、隆带上に刺突が施されている。175~177は胴部に斜縄文を施文している。178は底部片である。底部の近くが、くの字に括れ2条の刺突が入る。胎土に赤色の小石を含む。173~178は五領ヶ台式土器に比定される。

第III群 後期・晩期の土器

後期・晩期の土器は総数268点、全体の27.4%と空港予定地内に所在する遺跡としては多いほうである。2B区・2E区・2F区・1G区に集中がみられ、やはり地点ごとに傾向が分かれている(第40図)。細分すると、堀之内式土器・安行式土器に分けられ、全体的には前者が主体を占める。

第1類 堀之内式土器

a種 沈線による施文がされているもの(第46図179、図版18)

179は堀之内式の注口土器である。注口部分と把手の欠損部分がみられる。沈線による多重円と斜線の模様が入る。沈線以外は、文様はなく表面はよく磨かれている。胎土は砂をやや多く含んでいる。

b種 縄文を地文に、沈線ないし隆帯が施文されているもの(第46図180~184、図版18)

180・181は口縁部に小突起をもつ。口縁部下に隆帯が巡り押圧されている。内側に一条の沈線が巡る。全面単節L Rの縄文が施文される。182・183は同一個体の胴部片である。3条を単位に綾・横・斜位に沈線が施文される。184はわずかに開き気味に立ち上がる深鉢形の器形で、口縁は3~4単位で波状をなす。口縁にやや太い紐線文を巡らし、紐線上は指頭による压痕が連続する。地文に単節L R縄文を施し、綾位あるいは斜位に半截竹管で沈線が施文される。内面には一条の沈線を有する。

c種 縄文のみが施文されるもの(第46図185~196、図版18)

185~196は全面に単節L Rの縄文が施文された粗製土器である。内面に1条の沈線が入るものが多い。色調は黒褐色、暗褐色、灰褐色である。185・186は推定口径18.0cmで、口縁は軽い波状をなす。底部から口縁まで真っ直ぐに立ち上がる。187も軽い波状をなす。188~190は口縁が開き気味に立ち上がる器形である。193~194は内側に2条の沈線が巡る。196はやや粗い単節L R縄文が施文される。

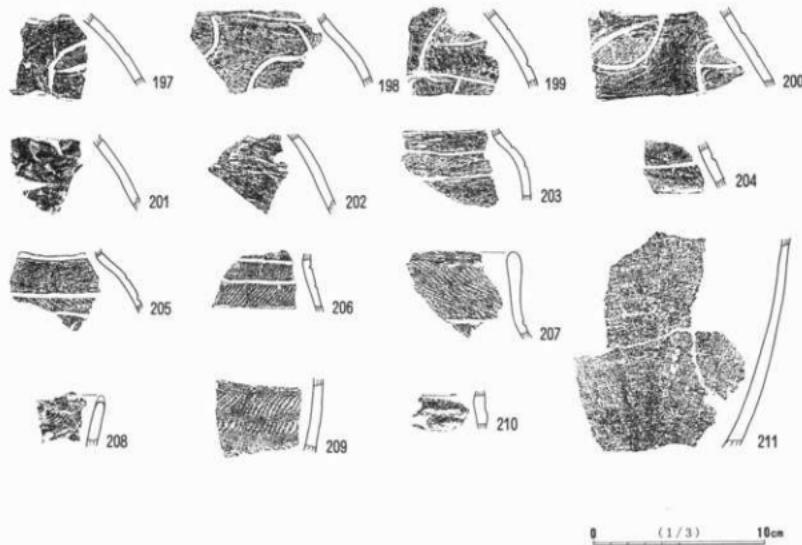
第2類 安行式土器

a種 入組文状の文様が施文されるもの(第47図197~202、図版19)

197~200は薄手で、木の葉状の文様が施文されるが、これはクランク状の入組文の変化したものではないかと考えられる。やや鋭く深い沈線によりできた木の葉状の空間に、細かな縄文が充填される。201は三叉文の一部で、202は無文部である。197~202は同一個体で晩期に属するものと思われる。

b種 帯縄文が施文されるもの・その他(第47図203~211、図版19)

203・204は胴部が膨らむ小型の鉢の胴部片で、沈線でかこまれた帯縄文が巡る。205は肩の部分は擦消されているが胴部に帯縄文が巡り、中に沈線と擦消しにより文様が入る。206は帯縄文と擦消し部分が分かれ、器面はよく磨かれている。207は帯縄文が施文される口縁部である。口縁部は肥厚している。208は口縁が外反し縄文が施文される深鉢の口縁部で小突起が付く。210は沈線による三叉文が入る。色調は橙褐色であ



第47図 第III群 繩文土器（2）

る。211は深鉢の脚下半部片である。

2 石器

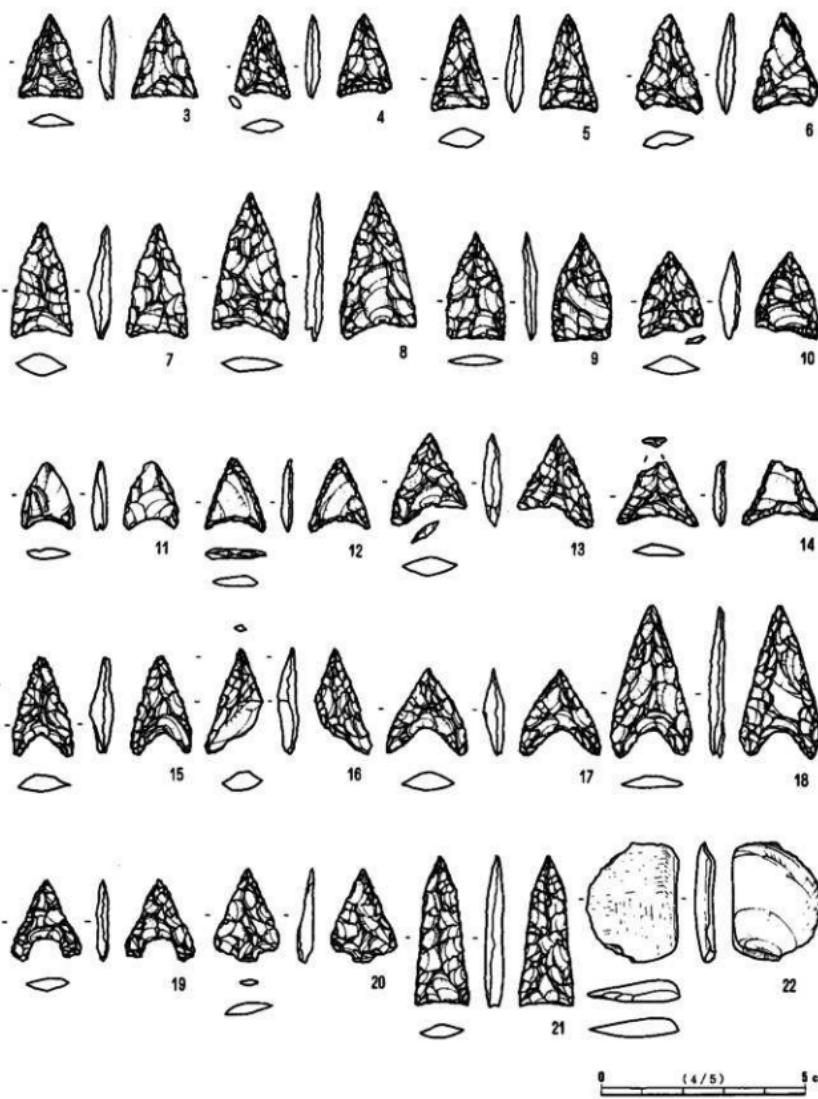
有舌尖頭器・石鎌・磨製石斧刃部破片が出土している。縄文遺跡に普遍的に見られる、礫石器（磨石・敲石）の類はほとんどない。石鎌については、チャートが多用されるが、黒曜石、ガラス質黒色安山岩、トロトロ石、メノウなどの石材も見られる。実測図として掲載したもの以外に、破損品が2点出土している。石鎌の分布域は、縄文土器の型式別分布域と比較すると、早期と前・中期に編年される土器型式の分布域に一部重なる状況を指摘できる。

出土石器（第48・49図1～22、第14表、図版20）

有舌尖頭器は2点出土した。1は3E47の1号溝覆土内から出土した。ガラス質黒色安山岩質で先端部をわずかに欠損する。側線は外湾し、ややなだらかに舌部へと至る。剝離の進行方向は基部から先端となるが、最大幅の位置する器体中央付近は不定である。2は1D96から出土した。ガラス質黒色安山岩質で先端部・基部を欠損する。側線は直線状を呈し、基部には明確な舌部をもつ。剝離の進行方向は不定で、1よりも調整は粗い。両者は縄文草創期に位置付けられよう。

石鎌は21点出土した。そのうち19点を図示した。大半が凹基・平基をもつが、大きさ及び全体のプロポーションにはバラエティーが見られる。やや大形のものは剝離の進行方向が明瞭なのに対し、小形のものは不定のものが目立つ。使用と再加工を繰り返した結果とも考えられる。

磨製石斧の刃部破片が1点出土した。刃角は72度を測る。



第49図 繩文時代の出土石器

第4章 古墳時代

第1節 遺構と遺物

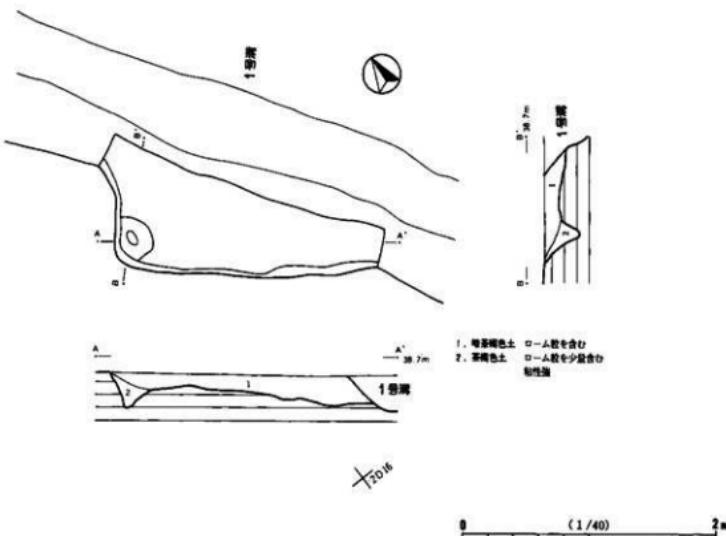
古墳時代の遺構は、竪穴住居跡1軒である。

1 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第50図、図版5）

2D06に所在し、1号溝に切られて一部のみ存在する。N-62°-Wに主軸を置く、現存長2.1mで長方形の平面形を有する竪穴住居跡である。本遺構の確認面は第II b層～III層にかけてで、確認面下0.05m～0.10mで床面に達する。壁は、やや斜めに立ち上がっている。柱穴やカマドなどの内部施設は検出されなかつたが、北西の角で1つのピットが見られた。深さは0.19mである。

遺物は、住居内には土師器の小破片1点のみしか検出されず、図示できるものはない。



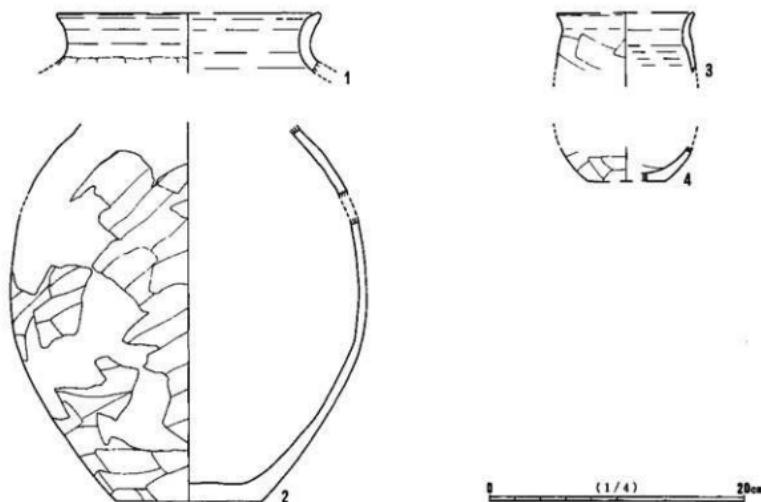
第50図 1号竪穴住居跡

第2節 グリッド出土遺物（第51図、図版19）

遺物は、1D85・1D95・2D06を走る1号溝の覆土中から出土した。出土位置はすべて、1号竪穴住居跡の周辺に限られている。住居跡内から出土した土器との接合関係も認められることや、他の地点からは古墳時代の遺物が極めて少量しか出土していないことから、本来は1号竪穴住居跡に伴う遺物であった

ものと判断できる。

1は土師器甕の口縁部である。復原口径21.0cm、内面、外面ともヨコナデが行われている。2は土師器甕の胴部から底部である。現在高29.0cm、底径12.0~12.5cm、ややいびつな椭円形である。色調は黄褐色である。胴部に斜め方向、横方向のヘラケズリが施されている。3は土師器の小型甕である。遺存度は1/2で、口径は11.0cmを測る。口縁はヨコナデ、胴部はヘラケズリ後ヨコナデ、底部はヘラケズリによる調整が施されている。色調は橙褐色である。



第51図 グリッド出土遺物

第5章 歴史時代

第1節 遺構と遺物

1 溝

1号溝（第52図、図版5）

1号溝は、調査区のほぼ中央1D41から4F34まで北西から南東に斜めに横切って存在する。ほぼ直線状で全長180m、幅は2.20m～3.34mである。検出面からの深さは、0.40m～1.05mであり、平均すると0.80m前後である。東側がより深く掘り込まれており、断面形には明瞭な段が認められる。土層断面図の観察からも、掘り直しが行われたことが分かる。主軸方向は、N-35°-Wである。規模及び台地を直線状に横切っていることからも野馬土手に伴う野馬堀の可能性が高い。調査時には野馬土手部分は削平されていた。遺物は流れ込みで、旧石器時代石器・繩文時代土器・石器、古墳時代土師器等が出土しているが、溝に伴う時期の遺物は少量であり、図示できるものはない。

2号溝（第53図、図版5・6）

2号溝は、1号溝の東側を32m離れて、ほぼ平行に、1D28から3F29に伸びている溝である。途中で一部切れしており、形態も異なるがほぼ直線状につながることから一条の溝であると判断した。溝のみの検出であり、土手状のものは調査時には存在していなかった。

北側の溝は、全長72m、幅0.30m～3.70mである。検出面からの深さは0.10m～0.46mである。2～5条の溝が並走する状況である。硬化面ははっきりとらえられなかつたが、これらの小溝が一つの単位で東から西に順次掘り直され、使用されたと考えられる。土層断面図の観察からも、場所により違いがあるが3～5回掘られていることが分かる。

南側の溝は全長45m、幅2.74m～3.50m、検出面からの深さは0.42m～0.70mである。1号溝と同様に掘込みがしっかりとれている。断面形も段を有し、東側の一部が深く掘り込まれ、掘直しが認められる。遺物は旧石器時代石器・繩文時代土器・石器、古墳時代土師器等が出土しているが、溝に伴う時代のものは少なく図示できるものはない。

北側と南側での様相の違いであるが、1E区周辺は尾羽根川の支谷へ向って低くなっていく地形のため、溝の残り具合で違いが出たのであろうか。北側の溝は小溝の集まりであり、1号溝よりも掘直しの回数が多いことなどから、道として使われた可能性も考えられるが、ここでは浅い野馬堀の跡としてとらえておきたい。

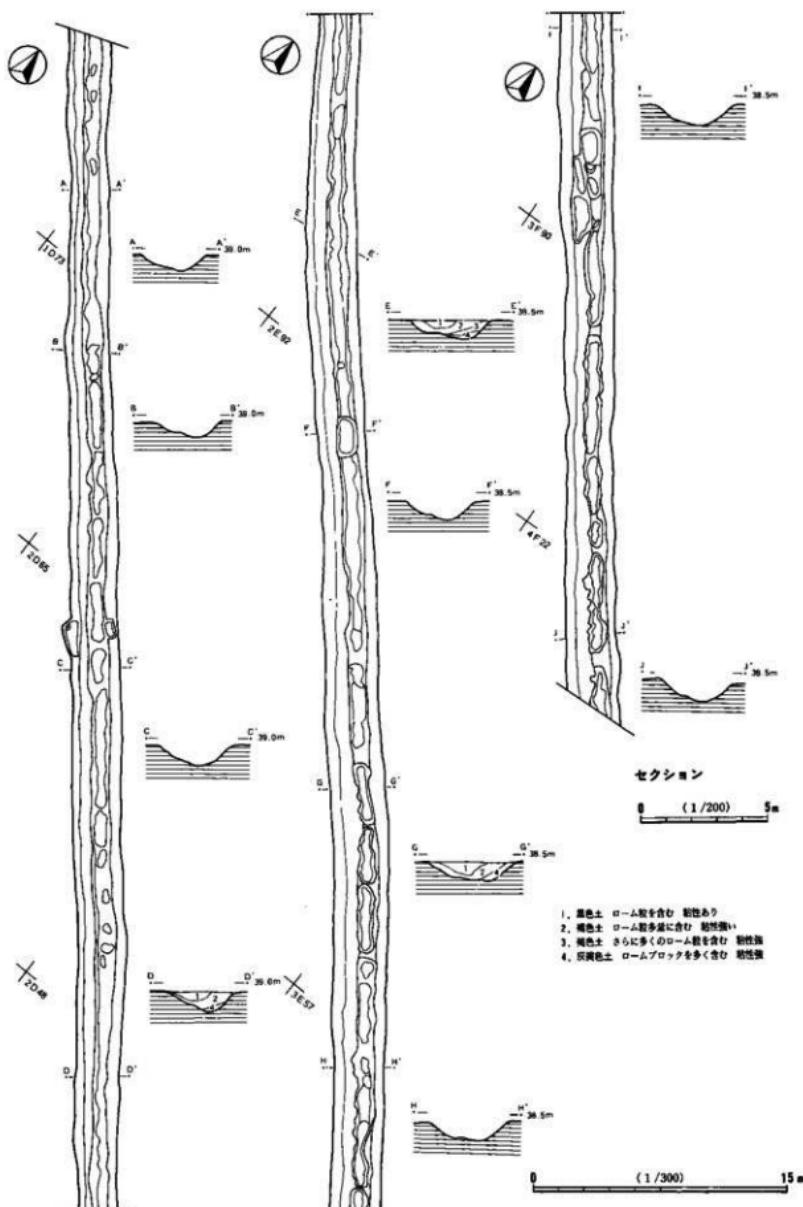
2 土坑

1号土坑（第54図、図版6）

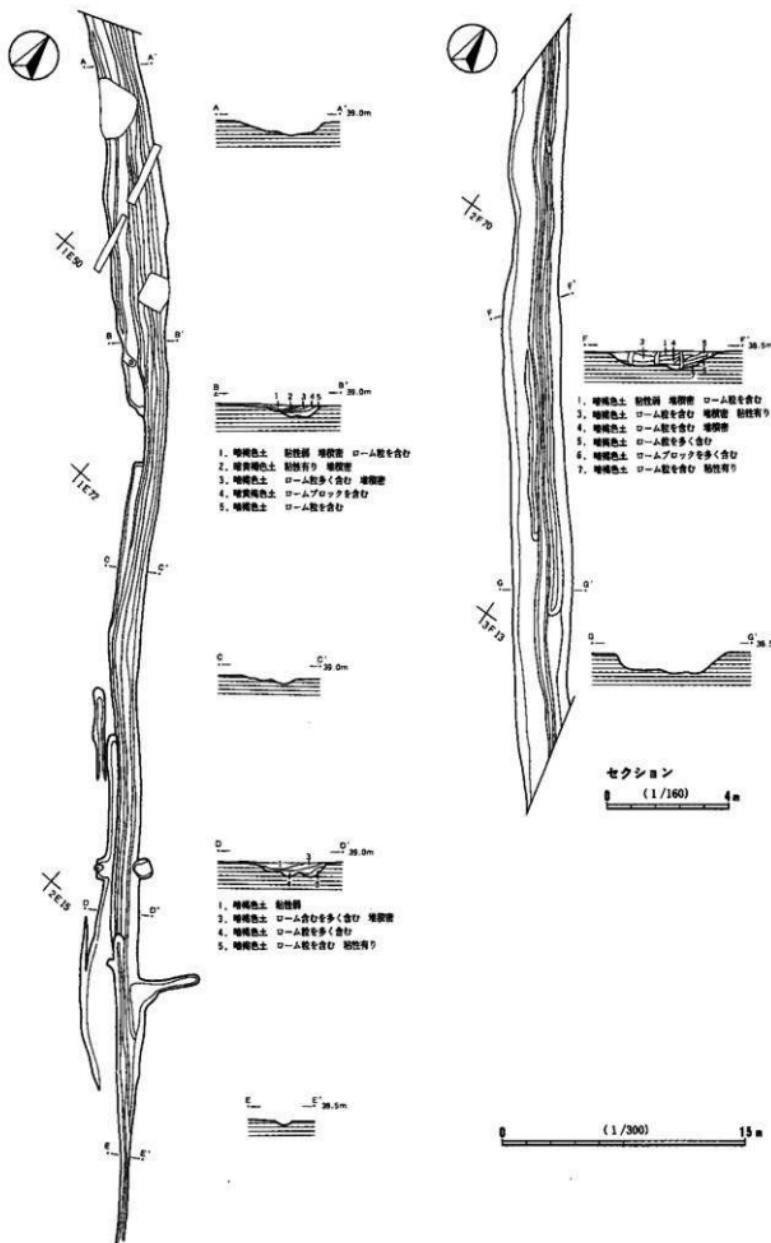
1G72・73・82・83に位置する。長軸4.48m、短軸3.50mの隅丸方形の土坑である。短軸方向は、N-16°-Eを指す。確認面からの深さは0.66m～0.88mを測り、壁は斜めに立ち上がる。南側に突起があり底面はやや起伏がある。覆土上部には炭化材を含む。遺物は出土していない。

2号土坑（第54図、図版6）

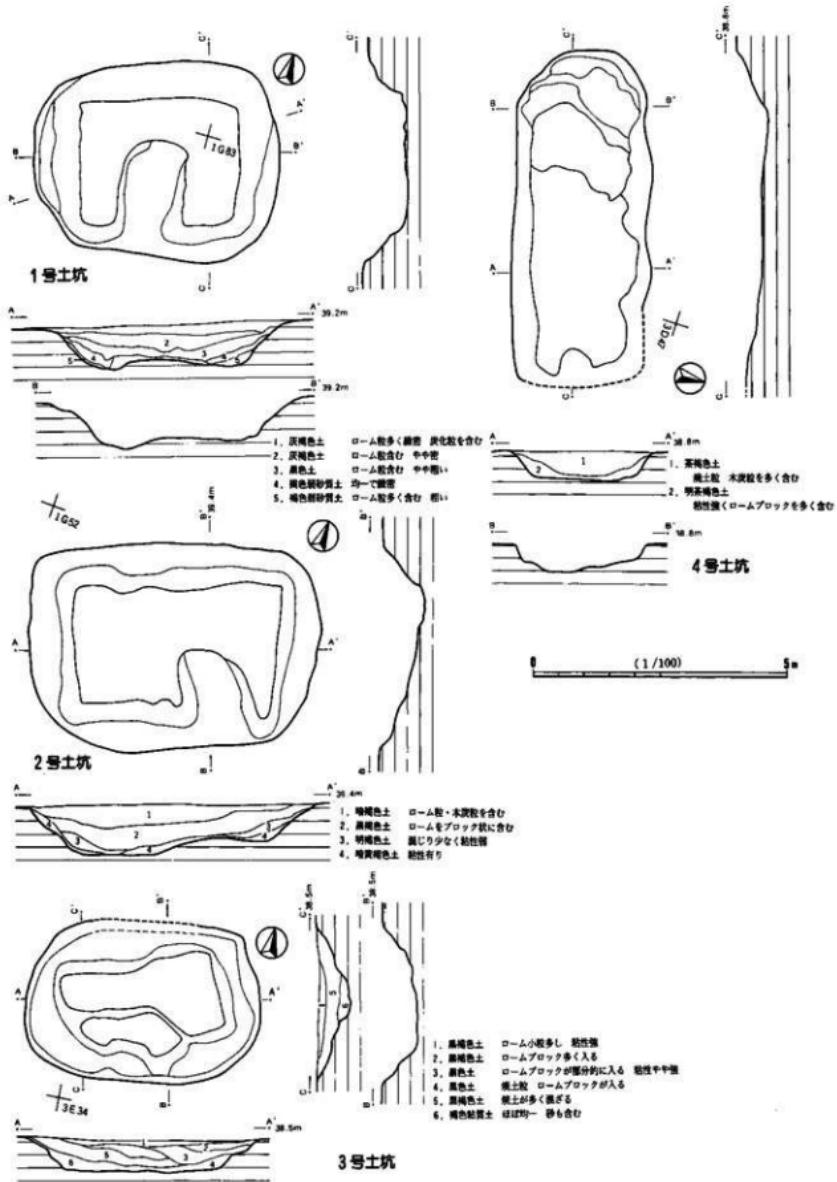
1G52に位置する。長軸5.78m、短軸3.65mの隅丸方形である。短軸方向は、N-20°-Eを指す。確認面



第52図 1号溝



第53図 2号溝



第54図 土坑

からの深さは0.60m～0.95mを測る。1号土坑と同様に突起があり、底面はやや起伏がある。覆土上面に炭化材を含む。遺物は出土していない。

3号土坑（第54図、図版6）

3 E23・24に位置する。長軸4.68m、短軸3.00mの橢円形である。短軸方向はN-12°-Eを指す。確認面からの深さは0.52m～0.60m、壁はゆるやかに立ち上がる。底面は起伏がある。遺物は出土していない。

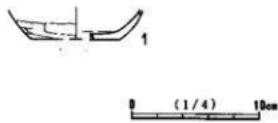
4号土坑（第54図、図版6）

3 D46・47に位置する。長軸5.58m、短軸2.50mの長楕円形である。短軸方向は、N-17°-Eを指す。確認面からの深さは0.50mである。遺物は出土していない。

第2節 グリッド出土遺物（第51図、図版20）

本遺跡では、奈良・平安時代の遺構は存在しないが、グリッドからは少量の平安時代の土器が出土している。器形が復元できるものは、1点のみである。

1は土師器杯である。3 D23と3 D41から出土したものが接合している。底部1/3が残存している。底径7cmで、外面はヨコヘラナデ、内面はヨコナデ、底部は手持ちヘラケズリが施されている。色調は黄褐色である。



第55図 グリッド出土遺物

第6章 まとめ

第1節 旧石器時代

東峰西笠峰遺跡（空港No63遺跡）における旧石器時代の石器群は、調査時に4か所から検出された。旧石器時代に属すると認識され調査の行われたこれらの石器群は、「石器集中（地点）1～4」として報告を行った。そのほかに整理途上で、縄文時代の包含層調査時にグリッド一括として取り上げられた資料のうち、旧石器時代石器群としてのまとまりの認められるものについて「一括集中（地点）1～4」と呼称し、4地点の報告を追加したところである。

「石器集中」はいずれも小規模で、明瞭な石器製作の痕跡を残さないが、それとは対称的に「一括集中（地点）」としたグリッド一括資料は多彩である。それら概要については既に述べてきた。ここでは、各石器集中地点と一括集中地点の関係と時期的な変遷についてまとめる。

石器集中1の出土層位は明らかに第2黒色帶下部（IX層）に包含され、本遺跡で最古の文化層と捉えることができる。ひとまず「IX層段階」石器群と呼称する。主要な石器として楔形石器がある。

石器集中2・3は、共に層位的にVI～III層に包含され、その前後関係については判断が難しい。これは下続台地においてローム層が薄いことと、ソフト化によりIV・V層の認識が困難であることも要因として挙げられる。また、石器群が小規模であるために時期を明確にできる資料が皆無であること、この問題をより難しくしている。唯一、石器集中2の分布域にあたるグリッド一括資料には、石器集中2に主体的に見られる母岩を利用したナイフ形石器がある（第34図4）。しかしながら、時期決定が困難であることには変わりがない。そこで、垂直分布図と出土状況写真を改めて検討すると、石器集中2の方が石器集中3よりも若干ではあるが下位から検出されていることが確認できる。そこで石器集中2を「VI～III層段階下部」石器群、石器集中3を「VI～III層段階上部」石器群とする。

石器集中4は黒曜石を主体とした尖頭器石器群であり、分布域が隣接する一括集中2と一括集中3とは石器群の内容、母岩の共有関係から同一時期に形成された石器集中地点と考えて間違いない。出土層位はIII層中であるので、これらを「III層段階」石器群とする。

一括集中4はガラス質黒色安山岩を主体とした尖頭器石器群であり、尖頭器は「III層段階」石器群と比較して技術・形態学的に新しい様相をもつ。出土層位もIIc層であり、これを支持する。「IIc層段階」石器群とする。旧石器時代終末から縄文時代草創期という微妙な移行期に相当すると思われる。

一括集中1については数点のナイフ形石器や彫刻刀形石器を伴い、利用石材も特徴的なものが數種ある。しかしながら、他の一括集中と異なり、これらの要素がすべて同時期のものであるのかグリッド一括という性格上、判断が困難であることから、石器群の位置づけは保留とした。まとめるところとなる。

段階	石器群
IX層段階	石器集中1の楔形石器群
VI～III層段階下部	石器集中2（集中地点外のナイフ形石器を含む）
VI～III層段階上部	石器集中3
III層段階	石器集中4、一括集中2・3の黒曜石製尖頭器石器群
IIc層段階	一括集中4の安山岩製尖頭器石器群

第2節 繩文時代

1 遺構

本遺跡から検出した遺構は陥穴5基のみである。4基は、尾羽根川により開析された谷頭の周辺に等高線に直交して分布する。1基のみ南に離れた位置にあり、向きも等高線と平行する。形状は、開口部が長楕円で坑底が非常に狭くなるものと、葉巻型で上部も坑底も細いものがある。遺物の出土はないが、繩文時代の遺構としておきたい。

2 遺物包含層

本遺跡では、繩文早期から晩期に至る土器が出土しているが、主体は第I群土器とした早期の土器である。早期の土器の分布は、3E区を中心とし38.5m~39.0mの等高線に沿って集中する。型的には、井草I式土器・三戸式土器・田戸下層式土器・田戸上層式土器・条痕文系土器に分離されるが、なかでも田戸下層式土器の割合が高い。

前・中期の土器を括した第II群土器のうち、浮島・興津式土器が数地点に分かれて集中がみられる。変形爪型文を特徴とする土器は2D区・3F区、全体に貝殻腹縁が施文される土器は1F区、横線文を特徴とする土器は2D区から検出され、分布傾向に偏在性が認められる。中期初頭の土器は少量であるが、1D区・1G区・2F区に分散して出土している。

第III群とした後・晩期の土器では、堀之内式土器は谷頭にあたる2E区・2F区と、東側の平坦部1G区に集中地点が分かれている。安行式土器は西側平坦部2B区に集中している。

3 遺跡の性格

本遺跡周辺には、成田市取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)¹¹⁾・東峰御幸畠西遺跡(空港No61遺跡)¹²⁾・東峰御幸畠東遺跡(空港No62遺跡)¹³⁾が近接している。取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)では、燃糸文期の住居跡が7軒検出され、燃糸文系土器・沈線文系の土器が大量に出土している。また、東峰御幸畠西遺跡(空港No61遺跡)でも、燃糸文期の住居跡が検出され、包含層からは沈線文系の土器が多量に出土している。東峰御幸畠東遺跡(空港No62遺跡)では、条痕文系の土器が大量に出土している。

このように、隣接する遺跡からは居住施設とともに、大量の土器片が検出されているのに対して、わずか数百mの距離にある本遺跡からは居住に関する遺構は検出されず、土器の出土量も少量である。時期的には、早期から晩期にかけて、多くの土器型式が出土しているものの、各型式ごとの分布は狭い範囲に集中し、それが時期によって地点が異なっていることは前述した通りである。さらに、土器の個体数も少ない。これらの状況は、本遺跡が各時期を通して短期間に利用された「地」(キャンプサイト)として機能していたことを示しているとも言えよう。

現在、本遺跡周辺の東峰御幸畠西遺跡(空港No61遺跡)・東峰御幸畠東遺跡(空港No62遺跡)については整理作業中であり、詳細はまだ明らかではなく、確定的なことは言えないが、周辺の集落を含めた遺跡の性格については、それらの成果が出た時点で再検討することとし、今後の課題とした。

第3節 古墳時代

古墳時代後期の住居跡が1軒検出された。この住居跡は、後世に1号溝により破壊されており、一部の

み残存していた。住居内の出土遺物は土師器の小破片一点のみであるが、1号溝の覆土中から接合する土器が出土した。年代は、土師器の時期からみて7世紀後半の年代が考えられる。

第4節 歴史時代

1 野馬堀(野馬土手)

新東京国際空港用地内の周辺は、江戸時代に佐倉七牧のうち取香牧・矢作牧が所在した。国土地理院発行の1/50,000の地図には、本遺跡周辺に「駒の頭」という地名が見える。酒々井町史資料集第二巻付録の佐倉七牧復原地図¹⁾によると本遺跡は矢作牧に含まれ、遺跡から南へ500mの位置に馬の「捕込」が存在している。また、取香牧の「捕込」²⁾もすぐ近くに存在する。利根川・栗山川の両水系の分水嶺に広がる広い台地はこの辺りで括れており、両台地から馬を追い込むのに適した位置にあったのであろう。おのずと捕込に付随した野馬土手が存在したと思われるが、既に調査時には、牧の施設は残っておらず野馬堀であったであろうと思われる溝を検出するのみであった。本遺跡の野馬堀は南東から北西の方角に伸びている。その前方に位置する天神峰最上遺跡(空港No64遺跡)³⁾でも同様の溝があり、検出方向もほぼ整合している。本遺跡のものと密接な関係がうかがえる。

2 土坑

本遺跡から4基の土坑が検出されている。1G区にある1号土坑・2号土坑とともに、壁の中央に突起部分があり同一形態を呈している。覆土には炭化粒が含まれるもの、密な出土状況ではない。牧が機能していた時期の竪穴状の遺構と思われる。その他2基の土坑とともに用途は不明である。

注1 小久賀隆史・新田浩三 1994 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VIII 一取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)』(財)千葉県文化財センター

2 (財)千葉県文化財センター 1980 『千葉県文化財センターレポート No.6』

3 酒々井町史編纂委員会 1976 『酒々井町史 資料集2(佐倉牧関係1)』酒々井町役場

4 古込込前遺跡(空港No22遺跡)として(財)千葉県北総公社により調査・報告がなされている。

西野元ほか 1971 『三里塚』千葉県北総公社

5 (財)千葉県文化財センター 1989 『千葉県文化財センターレポート No.14』

写 真 図 版





調査前全景（南東から）



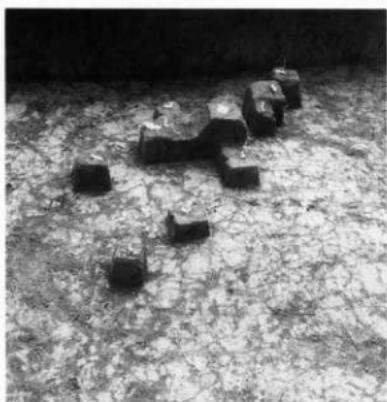
一括集中4（南から）



石器集中 1 (西から)



石器集中 2 (南西から)



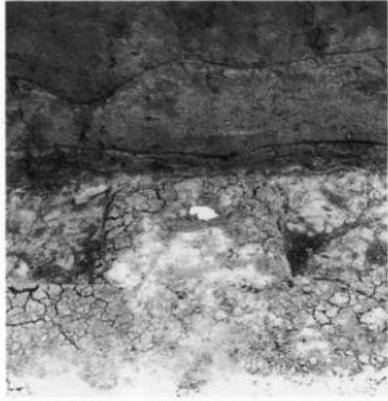
石器集中 3 (東から)



石器集中 4 (西から)



石器集中 4 (近景)



石器集中地点外 石核单独出土状況



1号陥穴（南西から）



2号陥穴（南西から）



3号陥穴（南西から）



4号陥穴（南西から）



5号陥穴（西から）



1号堅穴住居跡（南から）



遺物出土状況（北から）



1号溝（南東から）



2号溝（北西から）



2号溝セクション（南東から）



2号溝（北西から）



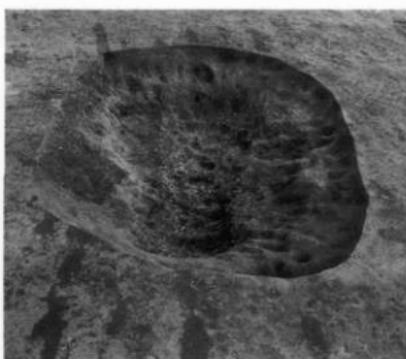
2号溝セクション（南東から）



1号土坑（東から）



2号土坑（東から）



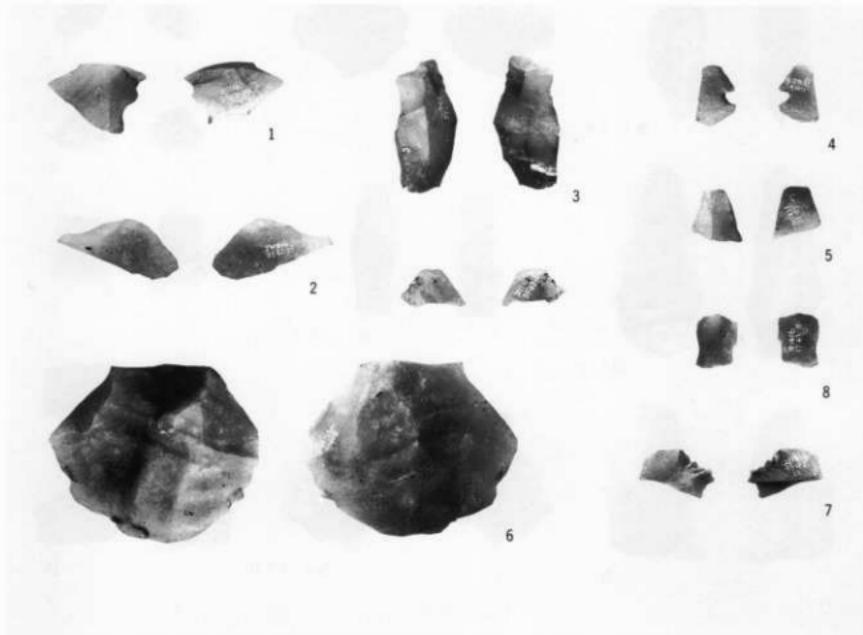
3号土坑（西から）



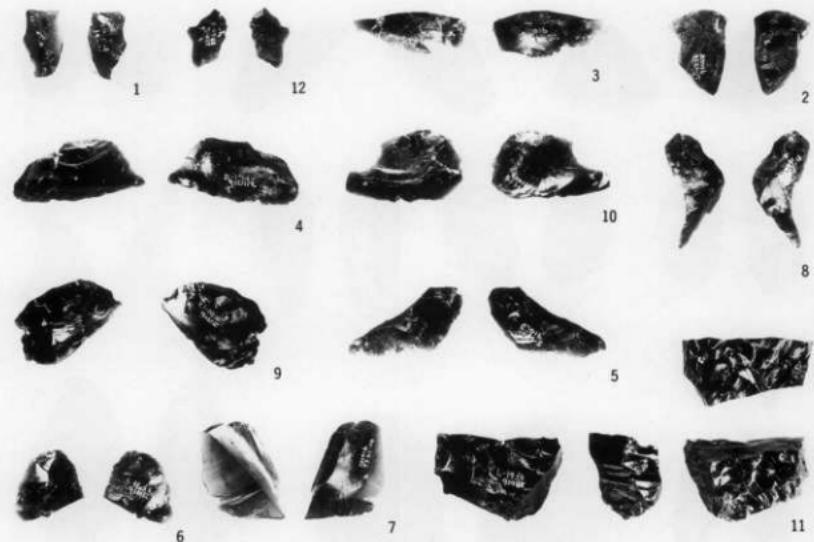
4号土坑（東から）



石器集中 1 出土石器



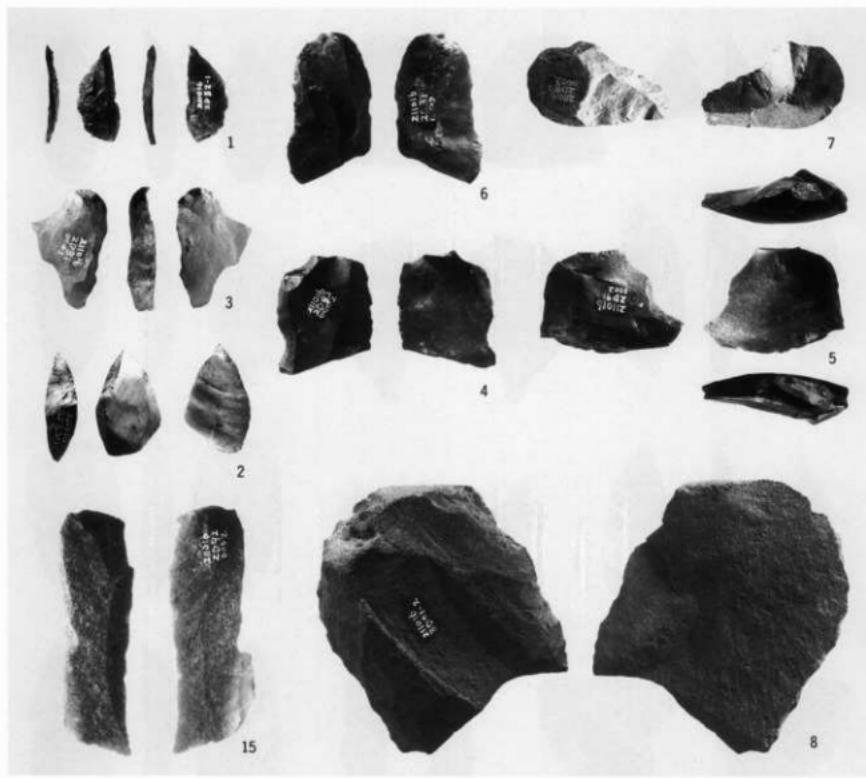
石器集中 3 出土石器



石器集中2 出土石器



石器集中4 出土石器



剥片類集合

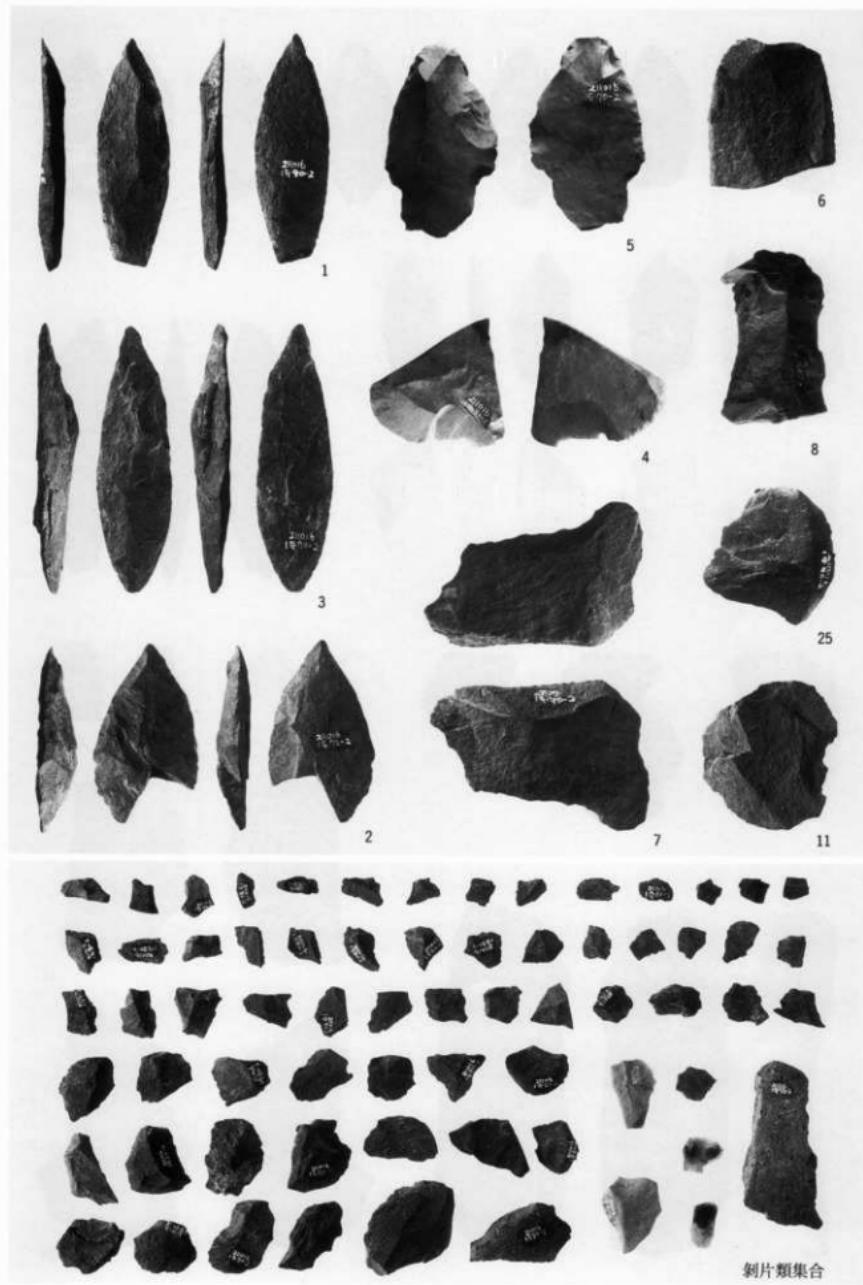


一括集中 1 出土石器



一括集中 2 出土石器

剥片類集合
一括集中 3 出土石器

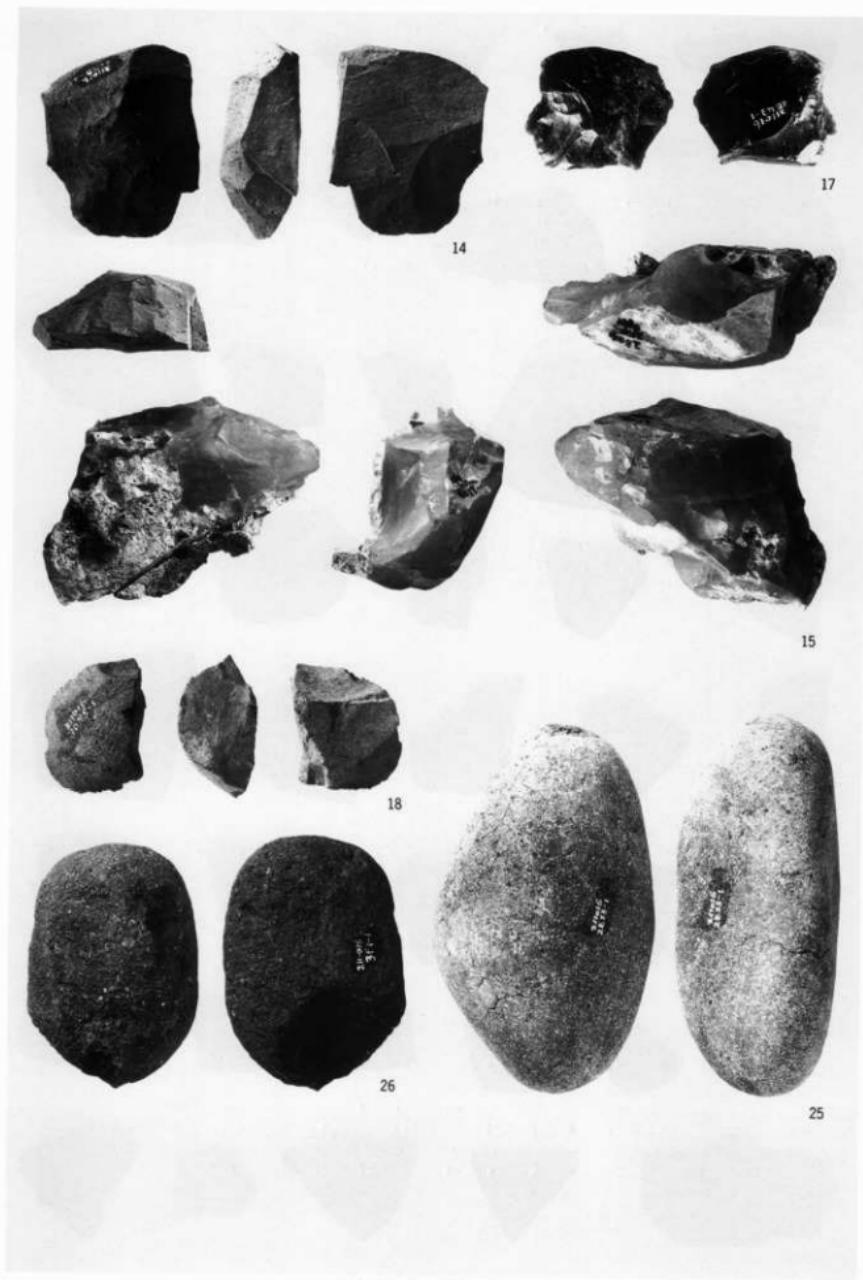


一括集中4 出土石器

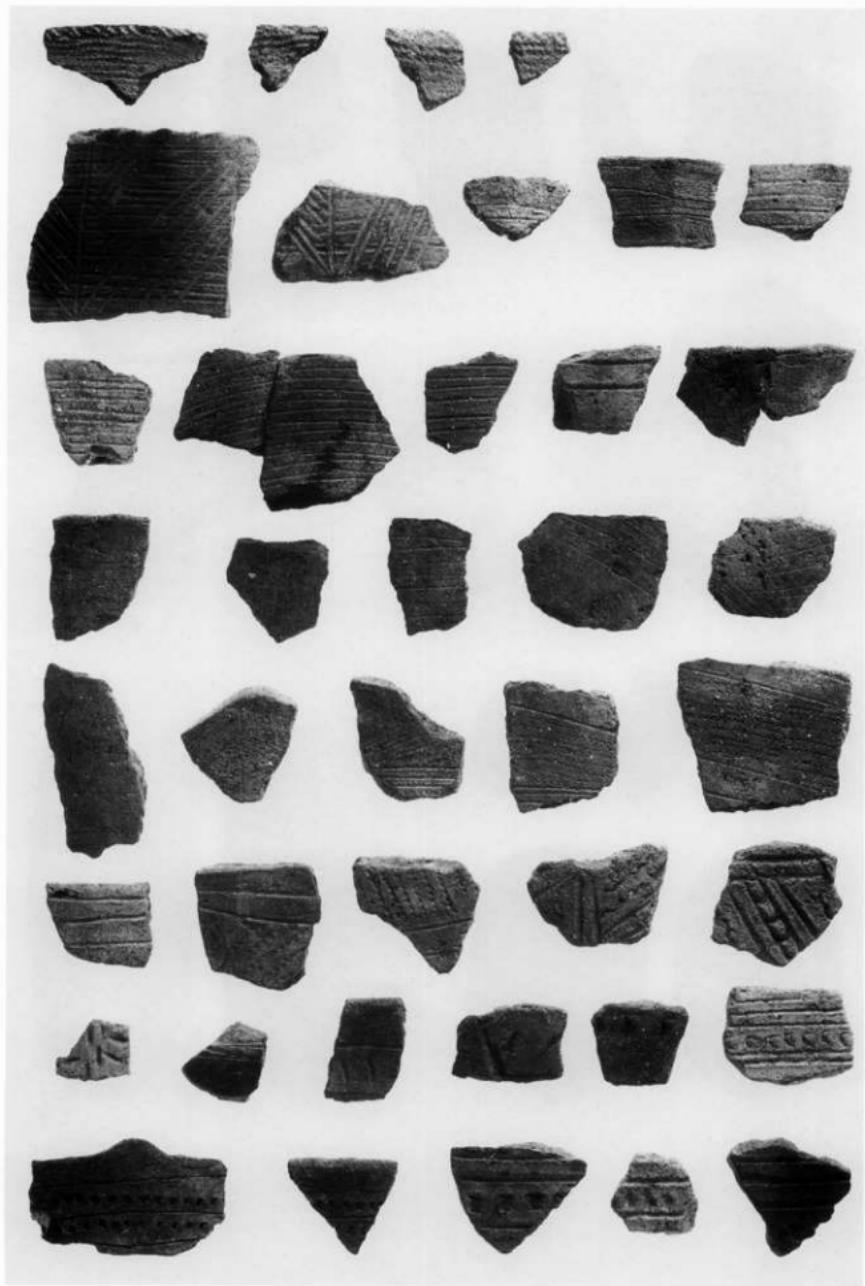
剝片類集合



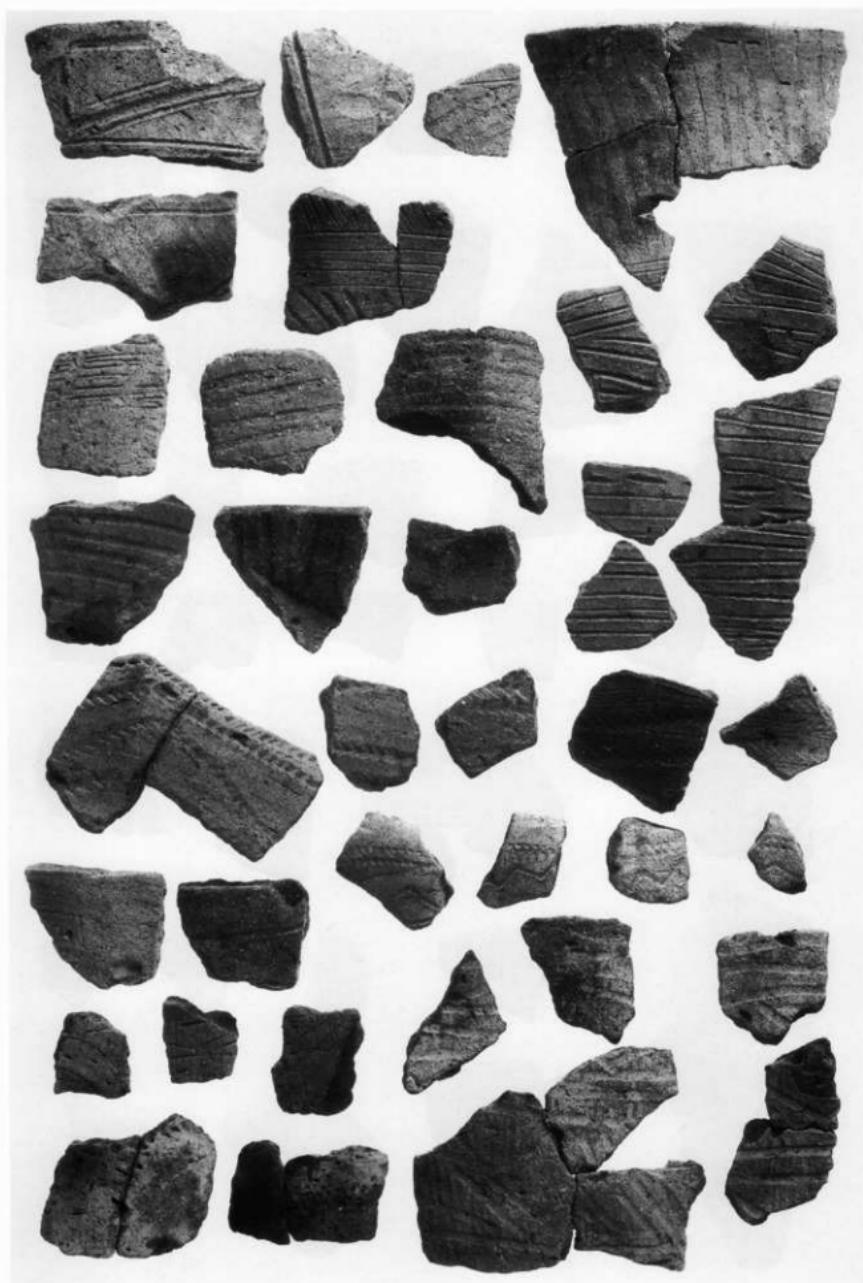
集中地点外 出土石器 (1)



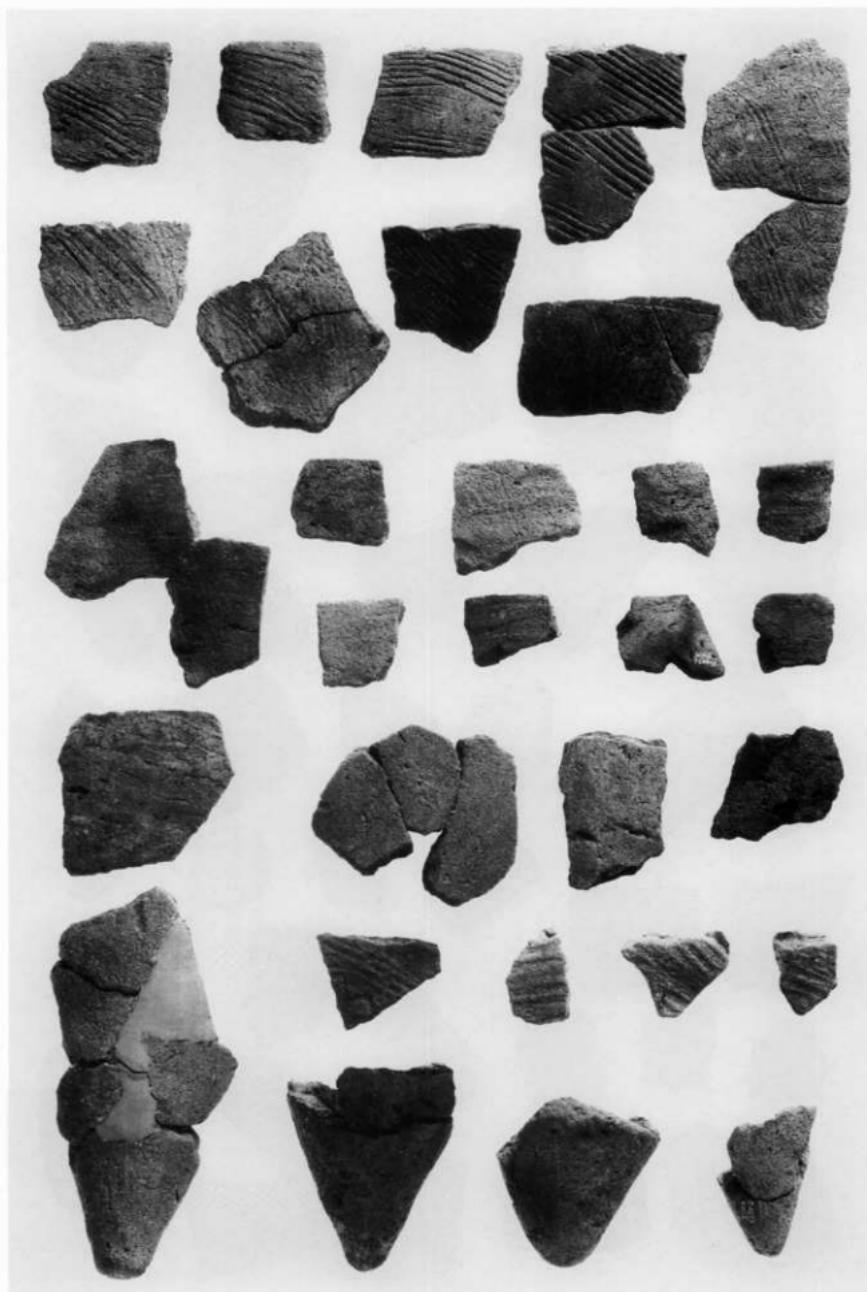
集中地点外 出土石器 (2)



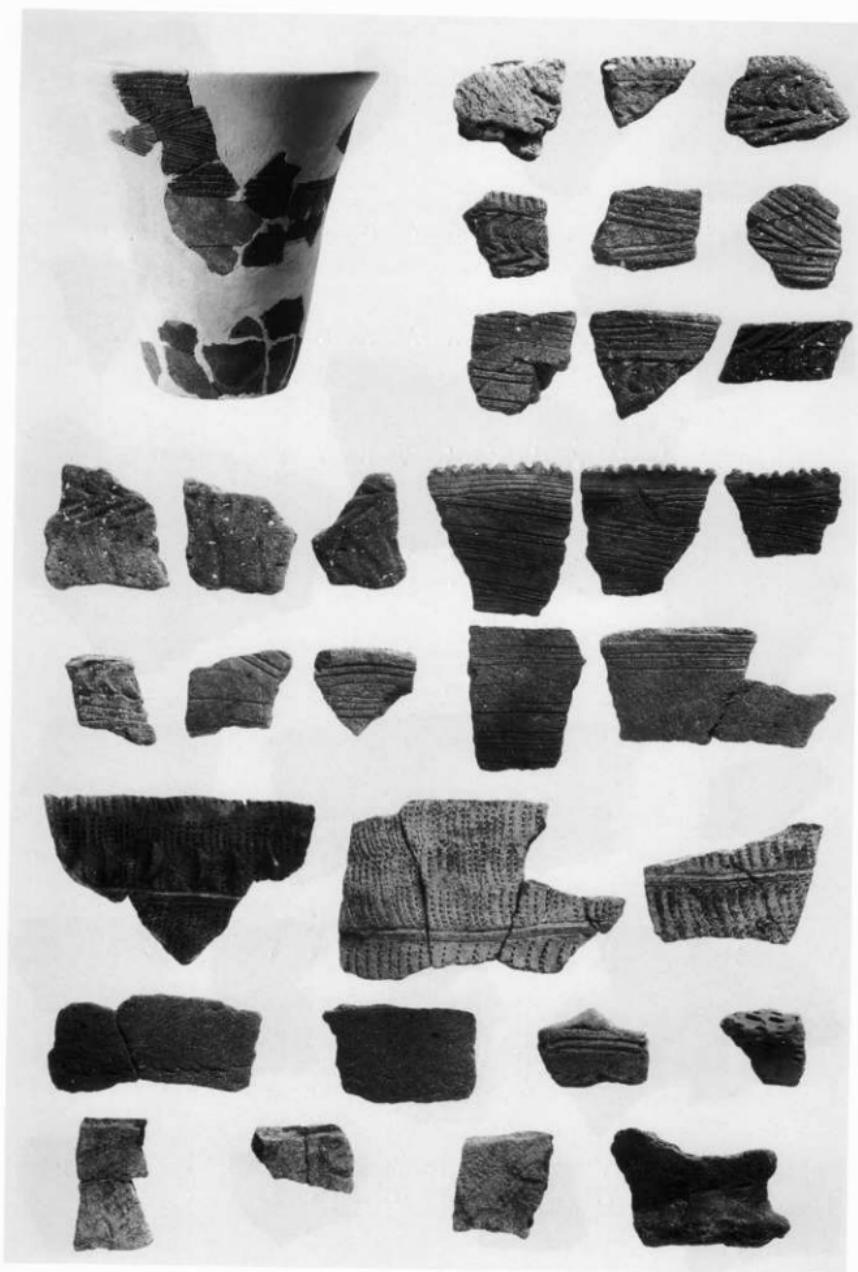
第I群土器(1)



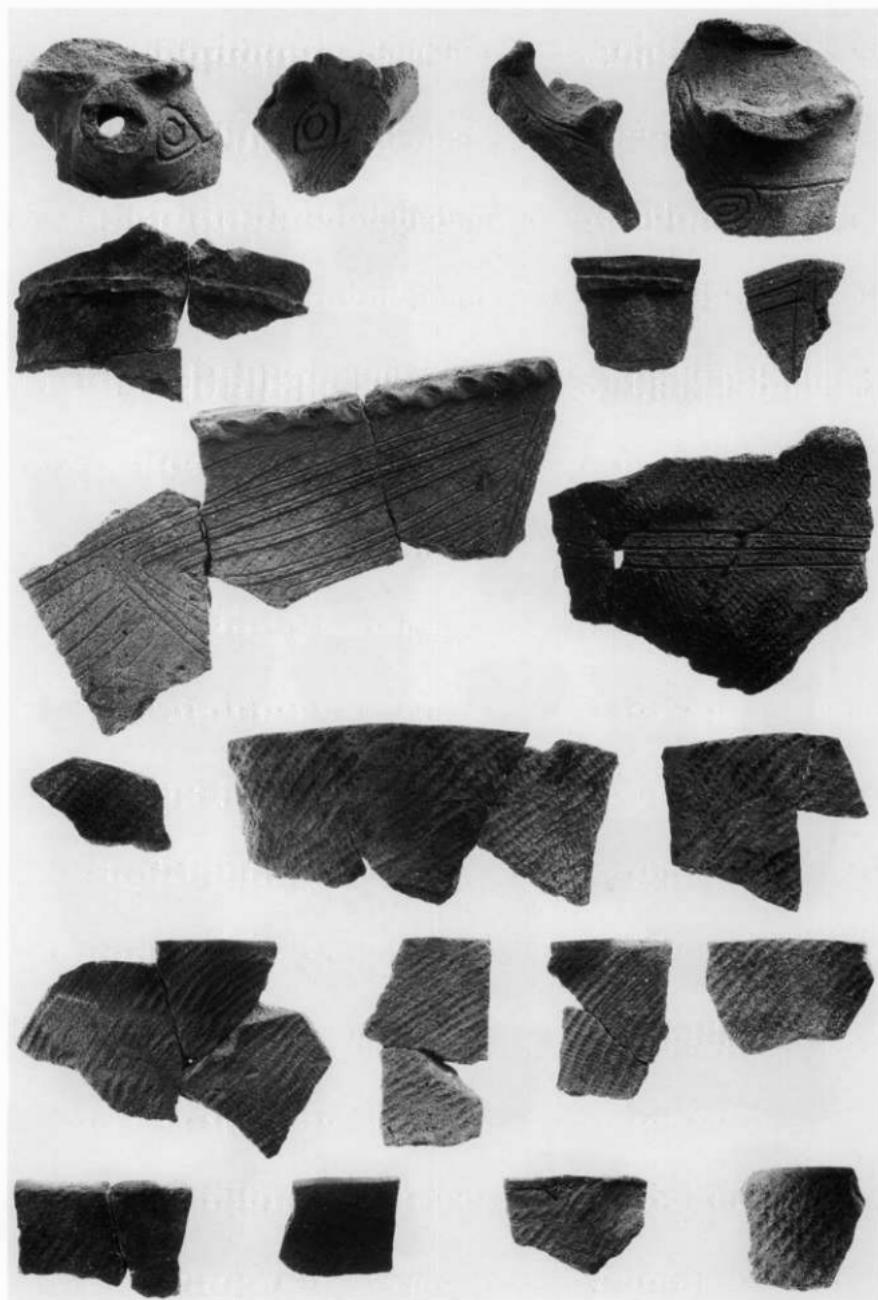
第1群土器(2)



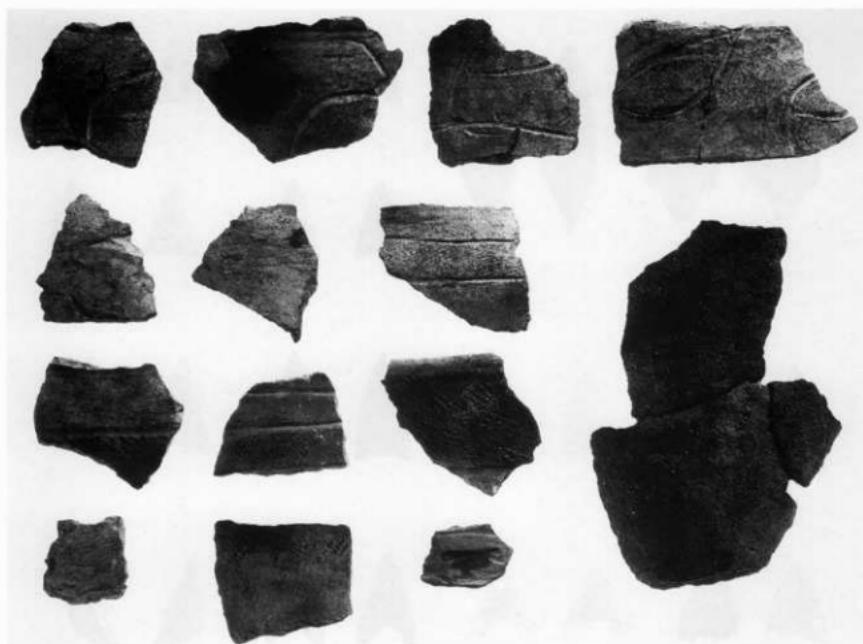
第Ⅰ群土器 (3)



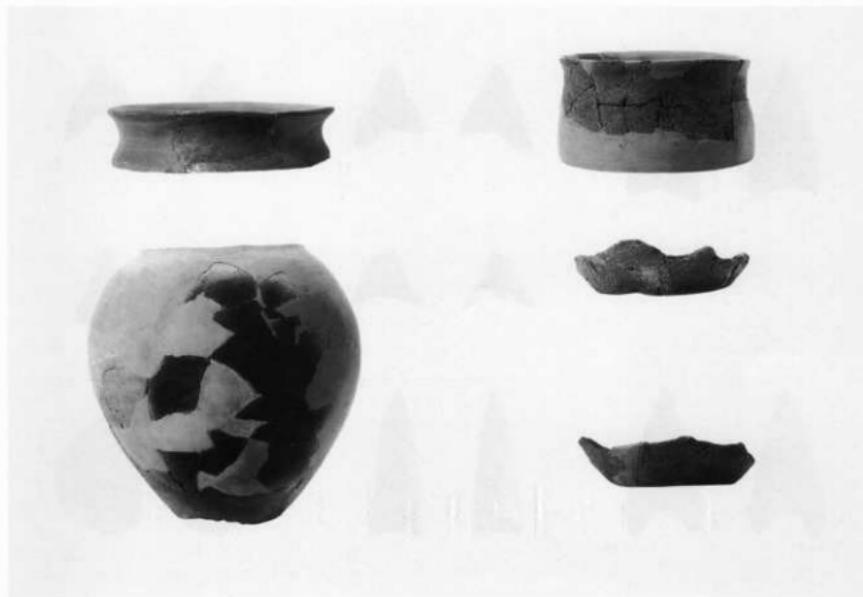
第II群土器



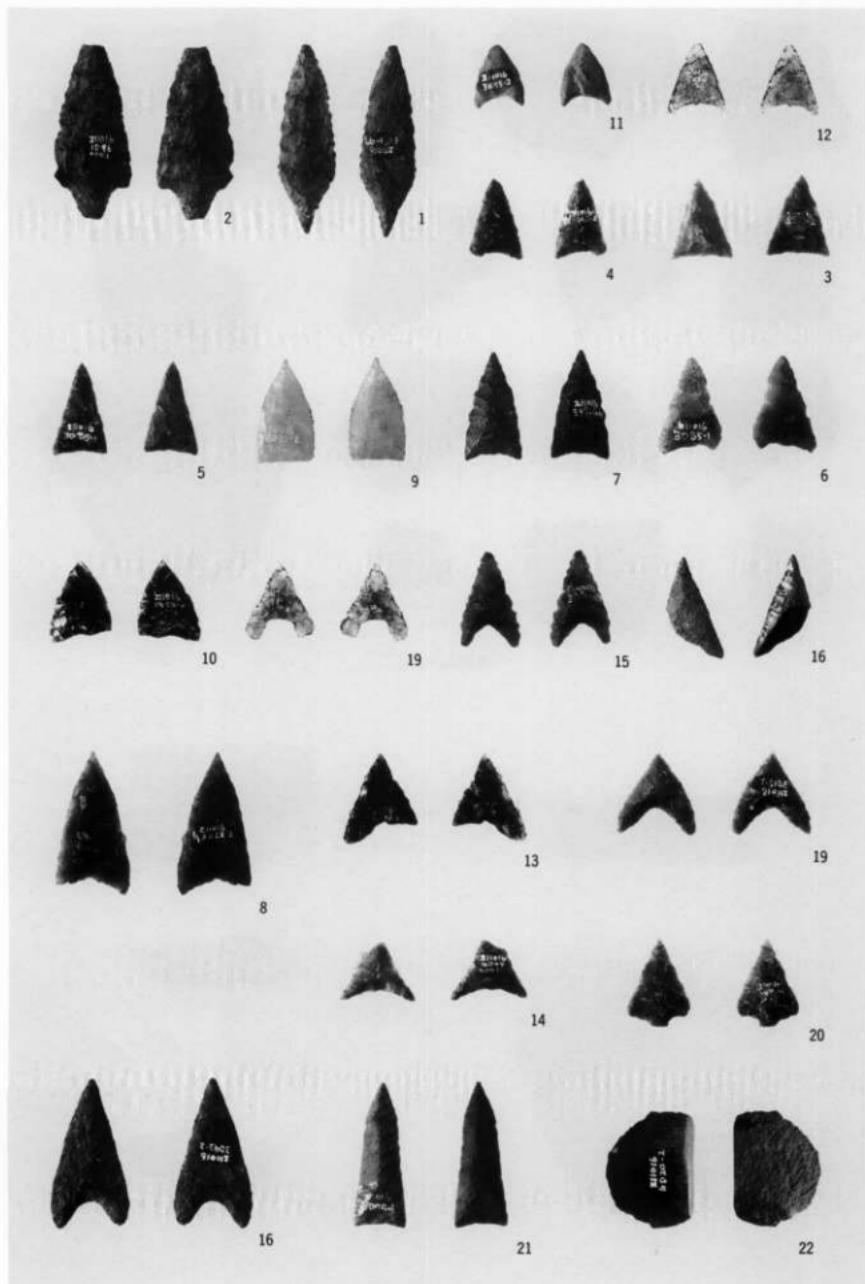
第III群土器 (1)



第III群土器 (2)



グリッド出土遺物



縄文時代 出土石器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しんとうきょうこくさいくうこうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ11						
書名	新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XI						
副書名	東峰西笠峰遺跡(空港No63遺跡)						
巻次	XI						
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第363集						
編著者名	平野 雅一・永塚 俊司						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 Tel 043-422-8811						
発行年月日	西暦1999年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東峰西笠峰 (空港 No63)	千葉県 成田市東峰字西笠峰 25-2他	12211	016	35度 46分 48秒	140度 23分 45秒	19810201 ~ 19810331 19810402 ~ 19810801	30,000	新東京国際 空港建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東峰西笠峰 (空港 No63遺跡)	包蔵地	旧石器	石器集中地点 4 地点	尖頭器、ナイフ形石器、楔形石器、搔器、彫刻刀形石器、石核、剥片	

千葉県文化財センター調査報告第363集

新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 XI

－東峰西笠峰遺跡（空港No63遺跡）－

平成11年3月31日発行

編
集
発
行

財団法人 千葉県文化財センター

新東京国際空港公園

成田市新東京国際空港内

（成田市木の根字神台24）

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市廻渡809-2

印 刷

株式会社 弘文社

市川市市川南2丁目7番2号
